

42539

教科書文庫

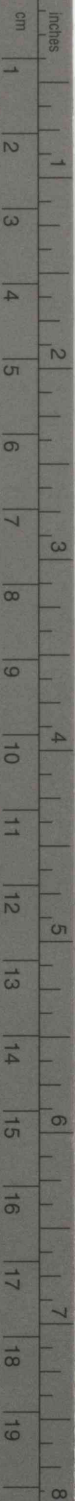
A
810
44-1934
200030
2115

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

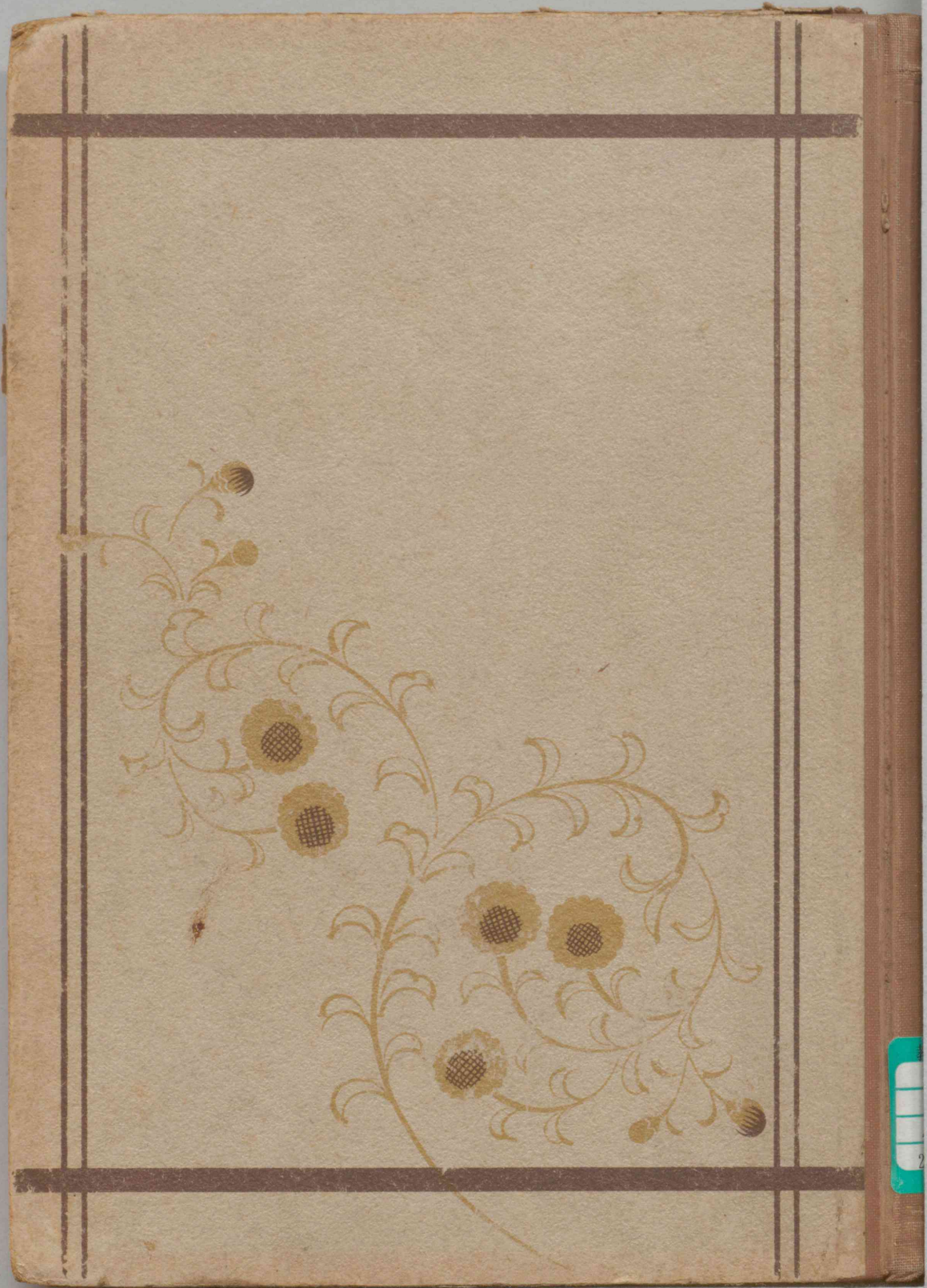
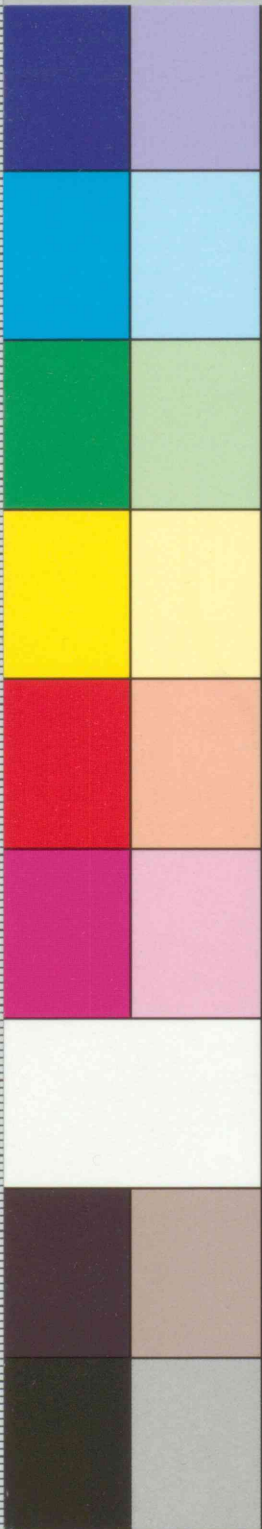
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



資 料

教科書文庫
4
810
44-1934
2000302115

325.9
K291

文部省檢定濟

實業學校國語教科書 昭和九年二月二十七日

實業學校
國文新選

卷三

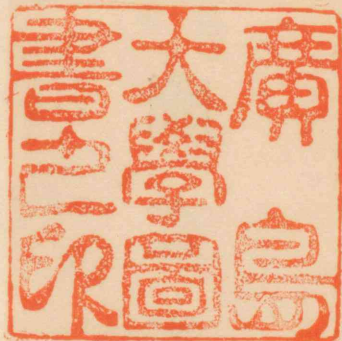
垣內松三編
西尾實

株式會社
文學社

広島大学図書

2000302115





一 國語科の重要な使命に鑑みて國民精神と國語教育の關聯に留意しました。

二 教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三 縦に學年を貫き横に學期を連ねて教材の編纂體系は組織的に排列しました。

目次 (卷三)

一 言葉の味……………五十嵐 力……………六

二 京の春……………夏目漱石……………二

三 汽車に乗りて……………上田 敏……………三

四 蓮……………豊島與志雄……………七

五 夏の雲……………國富信一……………七

六 蕪村の句……………與謝蕪村……………八

七 佛法僧……………高濱虚子……………四八

八 阿新丸……………(太平記)……………六〇

九 笛の音……………(平家物語)……………七一

一〇 男性美……………笹川臨風……………七五

一一 非凡なる凡人……………國木田獨歩……………八〇

一二 暴風……………島木赤彦……………九六

一三 丘の上……………吉江喬松……………一〇三

一四 海……………島崎藤村……………一〇九

一五 燈火……………佐々木信綱……………一一三

一六 玉勝間鈔……………本居宣長……………一二九

一七 正倉院……………藤代禎輔……………一三六

一八 斑鳩の宮……………三木露風……………一四三

一九 ミレ……………相良徳三……………一四七

二〇 仁王……………夏目漱石……………一五五

二一 時雨……………沼波瓊音……………一六一

二二 ひとり日記……………小林一茶……………一七〇

○	二三	折節のうつりかはり	吉田兼好	一七三
○	二四	名器を毀つ	薄田泣菫	一七五
○	二五	感想五題	伊原青々園	一八三
○	二六	フォード主義	大山卯三郎	一八七
○	二七	細川父子	(藩翰譜)	一九三
○	二八	近世歌人鈔	賀茂真淵・加藤千蔭・村田春海	
			小澤蘆庵・香川景樹・良寛・井手曙覽・大隈晋道	一九九
○	三〇	狐塚	(續狂言記)	二〇四
○	三一	落葉	相馬御風	二〇三
○	三二	縦の林	内村鑑三	二〇〇
○	三三	人臣の道	北畠親房	二〇三
○	三四	神國	徳富蘇峯	二〇六
○	三五	早春の賦	阿部次郎	二〇五

三五	夜叉王	岡本綺堂	二四八
----	-----	------	-----

附録

辭書一覽
漢字異同辨

五十嵐 力
文學博士。早
稻田大學教
授。明治七年
生。

海上胤平 歌
人。大正五年
歿。年八十八。
高崎正風 御
歌所長。明治
四十五年歿。
年七十七。

一言葉の味

五十嵐

力

6

老農友H氏の話である。

日本の古言には簡単な裡に實に奥深い眞理を含んだのがあ
るものですね。

いつぞや——もう二十年にもなりませうか——海上胤平と
いふ歌人が高崎正風といふ人の歌を評した中に、高崎氏の歌に
「牛牽く云々」とあつたのを咎めて、外國は知らず、我が國では昔か
ら牛には「追ふ」といひ來つたものであるのに、「牛を牽く」といふの
は落着かない詞遣ひだといつたのがありました。

當時私はそれを見て、歌人なんて暇つぶしに下らんことを云
つて楽しんでゐるものだと思つて、馬鹿にして居りましたが、其
の後十數年経つて、はつと思つたことがありましたよ。



板橋 東京市
板橋區。

乞食橋 東京
市豊島區巢鴨
町六丁目・西
巢鴨町二丁
目・同三丁目
を境せる富士
橋のこと。谷
端川に架す。

それは斯ういふ譯です。

或日牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、一人の男にあ
づけて出してやりましたが、程なく走つて來て、

「乞食橋の向うまで行くと、牛が坐り込んでどうしても動かな
くなりしました。」

といふのです。

「意氣地のない弱蟲だ。それぢやお前が行つて手傳つてやれ。」

と云つて、小力のある他の男をつけてやりましたが、しばらくす
るとそれが又歸つて來て、

「二人でもどうしても立ちません。」

と申しました。

「馬鹿な奴だ、二人掛りて牛一匹動かせない奴があるか。それぢ
や五平お前行つてやれ。」

7

と申しますと、五平は、

「情ない奴だな、それぢや俺が一つ立たしてやらうか。」などと云つて、威勢よく出かけて行きましたが、しばらくするとそれも歸つて来て、

「旦那どうしても動きませんよ。今日はどうかしたんですな、打つても、叩いても、引張つても、だまして、一寸も動きませんや。」と申しました。

私は「をかしい事だ。しかし俺が行けばどうにかなるだらう。」と怪しみながら、動物に對する飼主の威光と、男どもには多少優つた一日の長とを頼みにして急いで行つて見ますと、成程牛の奴が尖戸邸の裏門の前に大磐石と腰を据ゑて居り、周圍には眞黒に人だかりがしてゐます。それから私は三人の男に手傳はせて、鞭うつたり、あやしたり、いろいろ工夫をして見ましたが、どうし

ても一寸も動かすことが出来ません。

困りぬいて呆然として居りますと、人だかりの中に、半纏を着て股引をはいた、馬方らしい六十恰好の老爺さんが居りましたが、

「旦那それぢや動きませうまいよ。私が一つやつて見ませうか。」と云つて呉れました。

「それは有り難い、是非に。」と云つてねんごろに頼みますと、老爺さんは私の手から鼻綱を取つて、靜かに牛の右側に立ちました。右の手に持った綱を伸ばして、牛の尻邊を軽く打ちながら、「しつしつ」と申しますと、大磐石の牛が忽ち一身振ひして、むつくり起きあがりました。

それから老爺さんは後の方に立つて、尻を打ちつゝ、二三度圓く引廻しましたが、やがて三四十間追つて行つて、

賈島 唐の詩人。
應舉 同山氏通稱主水。有名なる畫家。寛政七年(二四五五)歿、年六十三。
フローベル フランスの小説家。
Flaubert (1821-1880)

「さあかうして後から追つていらつしやい。もう大丈夫です。」と云つて、綱を渡して呉れました。私は厚く禮を述べて別れましたが、此の時電光のやうに私の頭に浮かんで來たのは、例の海上氏の云はれた、牛には「追ふ」と云ふ辭が古言であるといふことでありました。私は一向に古學に不案内ですが、古い大和言葉の中には、いくらも斯ういふ風に祖先が幾百年の經驗を結晶させて、三四字の中に不動の眞理を疊み込んだのがあることでありませう。言葉の味なんていふものも實にえらいもんですね。私はこの老農夫の話をば、賈島が「推敲」の話よりも、應舉が「ゐのし」の話よりも、觀世大夫が「木賊刈」の話よりも、フローベルが「一語説」よりも、更に面白く、更に意味が深いと思ひ、黙止すにもだされずして備忘することにした。(八重葎)

二 京の春

夏目漱石

夏目漱石 名は金之助、大正五年歿、年五十。

比叡山

「随分遠いね。元來何處から登るのだ。」

と、一人が手巾で額を拭きながら立留つた。

「何處か己にも判然せんがね。何處から登つたつて同じ事だ。山

はあすこに見えて居るんだから。」

と、頭も體軀も四角に出來上つた男が無造作に答へた。

反を打つた中折れの茶の廂の下から、深き眉を動かしながら

見上げる頭の上には、微茫なる春の空の底までも藍を漂はせて、

吹けば揺ぐかと怪しまるゝ程柔かき中に、屹然として、どうする

氣かと云はぬばかりに叡山が聳えてゐる。

「恐しい頑固な山だなあ。」

山 比叡山を指す。比叡山は京都市と滋賀縣の境界にあり、海拔八四八米。

と、四角な胸を突出して一寸櫻の杖に身を倚たせて居たが、

「あんなに見えるんだから、譯はない。」

と、今度は叡山を輕蔑した様な事を云ふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えて居る。京都へ来て叡山が見えなくちや大變だ。」

「だから見えてるから好いちやないか。餘計な事を云はずに歩いて居れば、自然と山の上へ出るさ。」

細長い男は返事もせず、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる廂に遮られて、菜の花を染出す春の強き日を受けぬ廣き額だけは、目立つて蒼白い。

「おい、今から休息しちや大變だ。さあ早く行かう。」

相手は汗ばんだ額を思ふまゝ、春風に曝して、粘り着いた黒髪の逆さかに飛ばぬを恨む如くに、手巾を片手に握つて、額とも云はず、

顔とも云はず、頸窩けいごの盡くるあたりまで苦茶苦茶に搔廻した。促された事には頓着する氣色もなく、

「君はあの山を頑固だと云つたね。」
と聞く。

「うむ、動かばこそと云つた様な按排ぢやないか。かう云ふ風に。」
と、四角な肩をいとゞ四角にして、あいた方の手に榮螺の親類をつくりながら、聊か我も動かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそと云ふのは、動けるのに動かない時の事を云ふのだらう。」

と、細長い眼の角から斜に相手を見下した。

「さうさ。」

「あの山は動けるかい。」

「あはゝゝ、又始つた。君は餘計なことを云ひに生れて來た男だ。」

「さあ行くぜ。」

と、太い櫻の洋杖をひゆうと鳴らさぬばかりに肩の上まで上げるや否や歩き出した。痩せた男も手巾を袂に収めて歩き出す。

「今から登ったつて中途半端になるばかりだ。元來頂上まで何里あるのかい。」

「頂上まで一里半だ。」

「どこから。」

「どこからか分るものか。高の知れた京都の山だ。」

痩せた男は何にも云はずににやにやと笑つた。四角な男は威勢よく喋舌り續ける。

「君の様に計畫ばかりして一向實行しない男と旅行すると、どこもかしこも見損つて仕舞ふ。連こそいゝ迷惑だ。」

「君の様に無茶に飛出されても相手は迷惑だ。第一、人を連出し

て置きながら、何處から登つて、何處を見て、何處へ下りるのか見當がつかんぢやないか。」

「なんの、是しきの事に計畫も何も入つたものか。高があこの山ぢやないか。」

「あの山でもいゝが、あの山は高さ何千尺だか知つてゐるかい。」

「知るものかね、そんな下らん事を。——君知つてるのか。」

「僕も知らんがね。」

「それ見るがいゝ。」

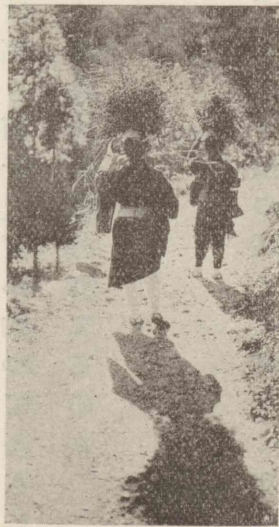
「何もそんなに威張らなくてもいゝ。山の高さは御互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時間かゝる位は多少確めて來なくつちや、豫定通りに日程は進行するものぢやない。」

「進行しなければやりなほすだけだ。君の様に餘計な事を考へてるうちには、何遍でもやりなほしが出來るよ。」

高野川 賀茂川の支流。京都府愛宕郡大原村より發し、南流して京都市の北にて賀茂川に入る。

大原女 京都府愛宕郡大原の里より物質りに京へ來る女。

と、猶さつさと行く。瘦せた男は無言の儘あとに後れて仕舞ふ。春はものの匂になり易き京の町を、七條から一條まで横に貫いて、烟る柳の間から温ぬき水打つ白き布を、高野川の磧がしに數へ盡くして、長々と北にうねる路を、大方は二里餘りも來たら、山は自ら左右に逼つて、脚下に奔る潺湲の響も、折れる程に曲る程に、あるはこなた、あるはかなたと鳴る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたならば春はまだ残る雪に寒からうと、見上げる峯の裾を縫うて、暗き陰に走る一條の路に、爪先上りなる向うから大原女おほはらめが來る、牛が來る。京の春は長く且靜かである。



大原女

保津川

保津川 京都府北桑田郡の山中に發し、曲折して龜岡に到り桂川となり、遂に淀川に入る。

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停る暇なきに、前へ前へと送る。重なる水の蹙つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は、已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀬はこれからである。

「いよいよ來たぜ。」

と、宗近君は船頭の體を透かして、岩と岩の逼る間を半町の向うに見る。水はどうと鳴る。

「成程。」

と甲野さんが舷から首を出した時、舟ははや瀬の中に滑り込んだ。右側の二人は、すはと波を切る手を緩める。權は流れて舷に着く。舳しほに立つは竿を横たへたまゝである。傾いて矢の如く下る舟は、どゝと刻み足に、船底に据ゑた尻しりに響く。壊れるなと氣が附

いた時は、もう走る瀬を脱けだしてゐた。

「あれだ。」

と宗近君が指さす後を見ると、白い泡が一町ばかり逆落しに嚙合つて、谷を洩れる微かな日影を萬顆の珠と我勝ちに奪ひ合つてゐる。

「壯んなものだ。」

と、宗近君は大いに御意に入つた。

「夢窓國師とどつちがい。」

「夢窓國師より此方の方がえらいやうだ。」

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の落ちんとして落ちざるを苦にせぬやうに、權を動かし來り、棹を操り去る。通る瀬は様々に廻る。廻る毎に新たな山は當面に躍り出す。石山、松山、雜木山と數ふる遑を行客に許さざる疾き流は、舟を驅つて又奔湍に躍

り込む。

大きな圓い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に撃附けて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、綠崩るゝ真中に舟こ



保津川下

そ來れと待つ。舟は矢も楫も物かは、一途に此の大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向うは見えず、削られて坂と落つる川底の深

さは幾段か。乗る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突當つて碎けるか、捲込まれて見えぬ彼方にどつと落ちて行くか。——舟は只まともに進む。

「當るぜ。」

と宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩は早くも船頭の黒い頭を
壓して突つ立つた。船頭は「うん」と舳に氣合を入れた。舟は碎ける
ほどの勢に、波を呑む岩の太腹に潜り込む。横たへた竿は取直さ
れて、肩より高く兩の手が揚ると共に、舟はぐうと廻つた。此の獸
奴と突離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向
うへ落ち出した。

「どうしても夢窓國師より上等だ。」

と、宗近君は落ちながら云ふ。

急灘を落ち盡くすと、向うから空舟が上つてくる。竿も使はね
ば、權は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命の拳を収めて、肩
から斜に盲縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを根限り戻舟
を牽いて来る。水行く外に尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石
に飛び、岩に這うて、穿く草鞋のめりこむまで腰を前に折る。だら

りと下げた兩の手は、塞かれて注ぐ渦の中に指先を浸すばかり
である。うんと踏ん張る幾世の金剛力に、岩は自然と擦減つて、引
懸けて行く足の裏を安々と受ける段々もある。長い竹を此處彼
處と岩の上に渡したのは、牽綱をわが勢に逆らはぬほどに疾く
滑らす爲の策と云ふ。

「少しは穩かになつたね。」

と、甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた
山の遙かの上に、鈍の音が丁々とする。黒い影は空高く動く。

「丸で猿だ。」

と、宗近君は咽喉佛を突きだして峯を見上げた。船頭は「猿だ、
慣れると何でもするもんだね。」

と、相手も手を翳して見る。

「あれで一日働いて幾らになるんだらう。」

大悲閣 千光
寺大悲閣とい
ふ。嵐山の西
部にあり。

「幾らになるかな。」

「下から聞いて見ようか。」

亂れ起る岩石を左右に繋る流は、抱くが如くそと割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて岩角をゆるりと越す。河は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」

と、長い竿を舷のうちへ挿込んだ船頭が云ふ。鳴る權に送られて深い淵を滑るやうに脱けだすと、左右の岩が自ら開いて、舟は大
悲閣の下に着いた。(漱石全集)

花の山二町上れば大悲閣

芭蕉

三 汽車に乗りて

上田敏

赤松の林をあとに

麻島ひだりに見つつ

汽車はいま堤にかかる。

ほのかなる水のほひに

河淀の近きは著し。

三稜草生ふる河原に

葦切はけけしと噪ぎ、

鶉こそ夏は來らね、

たまたまに百舌の速贄、

鶺鴒の何をか思ふ

上田敏 文
學博士。大正
五年歿。年四
十四。

しよんぼりと立てる暇に、
紡績の宿にやあらん

さり、はたり、はたり、ちよう、ちよう。

箴の音ややにへだたり、

道祖神祭るあたりの

鐵道の踏切近く、

繩帶の襪褌の衣

褐色は飾磨の染の

乳呑子を負へる少女は、

浅茅生の末黒に立ちて

萬歳と囃し送りぬ。

萬歳はなれにこそあれ、

幾年を生きよ、里の子。

人の世に尊きものは

土の香ぞ、國の御魂ぞ。

偽の市に住まへば、

産土の神に離りて

養をかきたる人も、

埴安の郷の土より

生えぬきのなれに呼ばれて

本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、

農人の寢覺に通ふ

微かなる土のおとづれ、

なつかしき母の聲音か。
午さがり草の香高く、
松脂のほひもまじる
地の胸の乳房のかをり、
蘇門答刺の香も及ばじ。

忽ちに鐵のほひす。

鳴神の落ちかかるごと

汽車は今橋に轟く。

桁がまへ、眼路をかぎりて、

ひとり見る蛇籠の礫。
〔上田 敏詩集〕

四 蓮

豊島 興志雄

私は蓮が好きである。泥池の中から眞直に一莖を伸ばして、その頂に一つ、葉や花や實をつける。あの獨得な風情もよい。また單に花からばかりではなく、葉や實や根などからまでも仄かに漂ひ出してくる、あの清い素純な香もよい。その形、その香、そして泥土と水、凡てに原始的な幽玄な趣がある。

田舎の子供達は眞白な蓮の根をぼきりと折つて、中に通つてゐる八つの穴に何がはひつてゐるか、好奇の眼を見張りながら、いつまでもじいつと覗き込む。または葉の莖を折り取つて、それを更に幾つにも小さく折つて、折られた莖が細い糸でつながつてゆくのを、面白さうにぶら下げて眺める。それにも倦きると、小川の清い水を葉の中にすくひ込み、鮒や鯰の子を捕へて來て、

豊島興志雄
東京帝國大學
佛蘭西文學科
出身。法政大
學教授。東京
帝國大學文學
部講師。明治
二十三年生。

その中に泳がせて楽しむ。或はまた大きな花を折り取つて来て、その眞白な花瓣を一つ一つむしり取り、黄色い雄蕊、雌蕊を中に乗せ、實を積んだ舟として、橋の上から川の眞中に、幾つも幾つも流し浮かべる。

蓮の葉や花が孟蘭盆の佛壇につきものとなつてゐるのは、佛敎の廣まつてゐる地方共通の周知の事柄である。が、或地方では、孟蘭盆の前、七月七日の七夕祭が可なり盛に行はれる。子供達は七夕に關係のある俳句や和歌や漢詩の類を、前々から習字しておいて、それを七夕の日の朝、普通の軸物くらゐの大きさに清書し、床の間に掛けて、いろんな果物や野菜の類を供へる。その後で、女の子は色紙で小さな衣服を裁ち、男の子は色紙の短冊に勝手な文字を書きちらし、それを青笹の枝に吊して、縁先の庭に立てる。そしてこれらの文字を書くために用ひられる硯の水は、蓮の

葉に溜つた露の雫を最もよしとしてゐる。子供達は早朝から起上つて、夜のうちに蓮の葉に溜つてゐる水銀のやうにとろりとした清い露の雫を、いそいそとして集めに出かける。

さういふ話を、一昨々年の夏、私は或友人に向つてした。すると十日ばかりたつて、美事な紅蓮の一鉢を植木屋から届けて來た。友人の名刺が附いてゐた。私の手蹟が餘り拙劣なので、蓮の露を取つて習字でもせよといふ謎かも知れないが、併し私には非常に嬉しかつた。庭の眞中に据ゑさせて、仕事に疲れた眼を慰めた。徑一尺餘りの小さな鉢だつたが、五六枚の葉をつけ、花を二つ持つてゐた。鉢の中の藻の間に絲蚯蚓が澤山ゐたので、それを食ひ盡くさせるために、緋目高を四五匹放つたりした。

そのうちに、淡紅色の花弁が散つて行き、葉も一二枚黒ずんで枯れていつた。花の後の漏斗形の萼は、實を結ぶ様子もなく、小さ

く萎びて枯れてしまつた。残りの葉もまだ霜を受けない先に枯れかゝつた。鉢の中を覗いてみると、彎曲したこちこちの根が、土の中に痛ましく露出してゐた。恐らく蓮は、徑一尺餘りの小さな鉢の中で、十分に伸びようとして伸びることが出来ず、窮屈の餘りに窒息しかけたのであらう。さう思ふと、吾が愛する此の蓮のために、十分の泥と水とを與へてやりたくなつた。

私は近くの瀬戸物屋へ出かけていつて、其處にある一番大きな蓮鉢を買求めた。徑三尺ばかりの分厚なもので、田舎の廣々とした蓮田には及びもつかないが、一二株の蓮の生長には十分らしくかつた。私はそれを日當りのよい所に据ゑて、庭の隅から掘起した土を盛り、それを水にこねて蓮を移し植ゑようとした。そこへ叔父がひよつこりやつて來た。漢籍や盆栽に親しんで日を送つてゐる叔父は、私の柄にもない仕事を見て、長い髯を撫てなが

ら笑ひ出した。そしてこんなことをいつた。

「蓮は秋に動かすものではない。春の彼岸頃、舊根が腐つて、新芽が出だしたのを、逆様に移し植ゑるのを以て法とする。併し凡そ花卉のうちでも、水ものは最も栽培困難としてある。素人の育て方で、蓮の花を一つでも咲かせ得たら、それこそ園藝の天才である。」

私はその天才にならうと欲した。そして叔父の意見を参考に、して、蓮を移し植ゑるのを翌年の春まで延ばした。すると圖らずも意外な便宜を得た。

私の家へ、田舎から時々野菜物なんかを持つて來てくれる農家の老人があつた。その老人が、蓮を育てたいといふ私の志望を聞いて、蓮には都會のこんな瘦せた土では駄目だから、上等の肥えた土を進上しようといふ好意を寄せてくれた。やがてその老

人が車に積んで運んで来てくれた土は、荒川岸の泥土とかで、壁土に用ひても最上等なもので、色は少し灰色がかつて、ねつとりとした、重みのある濃密なものだつた。

私はそれに力を得た。春の彼岸になるのを待つて、小さな蓮鉢をひつくり返してみると、底の方にか細い白根が腐らずに残つてゐた。でも、それだけでは大きな鉢には足りないやうな氣がした。て、更に植木屋から、白蓮と紅蓮との苗根を一株づつ取寄せ、その上田舎の老人に頼んで、普通の食用蓮の苗根をも取寄せ、それらを逆様に鉢の中へ植込んだ。そして植木屋から聞き知つた肥料として、大豆と乾鰯とを與へた。

所が、春がたけていつても、蓮の芽はなかなか出なかつた。其の代りに、鉢一面にぎらぎらとした油が浮き、青褐色の苔が泥の面に擴つていつた。そして六月の初頃になつて、小さな蓮の芽が出

だしたけれど、その卷葉が開きかけると、しなしなと横に倒れて、四五寸くらゐの大きさにしかならず、それもやがて縁の方から枯れていつた。そしてたゞ油と水苔とだけが、鉢の中一杯に漂ひ浮かび、泥の中からは、泡が立ち、物の腐爛した臭氣が發散して、清浄な蓮の花も匂もその氣配だに見せないで、いぢけた小さな五六枚の葉が枯れ残つてゐるのみだつた。はじめ私は蓮を盛に太らせるために、大豆を一合ばかりと乾鰯を七八本やつたのであるが、それが餘りに多過ぎて、蓮は肥料負けしてしまつたのである。私は悲しい氣持で、ぼんやり蓮鉢を見守るの外はなかつた。ただ一つ私の心を慰めたことは、盂蘭盆の折、亡父と亡兒との位牌のある佛壇に、その蓮の葉を一枚供へることが出来たことである。

それだけのことを唯一の收穫にして、私はいつしか蓮鉢を忘

れがちになつた。年を越して昨年の春鉢の泥を半ば取換へてやらうかとも思つたが、それもつい不精から時期を過してしまつた。そして暖かくなるにつれて、鉢の中は油ぎつてねちねちして來たが、それと共に一つ二つ蓮の卷葉が出だして來た。強すぎる肥料の泌みた泥土の中にも、根だけは生き残つてゐたものと見える。伸出した葉は、前年と同じやうに小さいぢけたものだが、それだけにまた可憐でもあつた。私はもう、花は勿論大きな葉をも期待せずに、その小さな葉だけで満足した。

七月の末から房州の外海岸へ行つて、一夏を其處で過した。盛に繁茂してゐる蓮田を見ると、自分の貧弱な蓮鉢が思ひ出された。そして九月のはじめ家に歸つて來て、私は少なからず驚かされた。いつの間にか庭の蓮鉢から、相當に大きな葉が七八本も眞直に伸出してゐた。

たゞ悲しいことには、蓮の葉の裏面や柄に、油蟲が澤山群つてゐた。鉢の上の方に桃の一枝がさし出てるて、それから傳播したものらしい。私は惜し氣もなくその桃の枝を切去つて、それを鑿殺してやつた。蓮の葉は勢を得たやうに、青々と茂つていつた。もう餘分の肥料も泥土に吸ひつくされたらしく、水がさつぱりと澄んで、青い藻まで生えてゐて、蓮特有の匂も、氣のせるばかりでなく、實際に感ぜられた。それから霜時になると、枯蓮の趣も十分に見られた。

そして冬を越して、今年の春である。今日彼岸の入に藁の覆ひを取去つてみると、鉢の泥は肥えて黒ずみ、水は冷たく澄返り、所に枯葉の柄が残つてゐる。今に其處から青々とした卷葉が伸出し、それが圓く大きく擴つて、露の雫を宿す頃には、更に花の蕾が伸出して來て、夜明けの光に音を立ててぱつと開くであらう

などと想像すると、私は蓮の臺に坐するやうな清淨な心境を覺えた。それにしても、鉢の中に生き残つてゐるのは、紅蓮であらうか、白蓮であらうか、または普通の食用蓮であらうか、或はその三つ共であらうか。それはこの夏花の開く折の樂として、私はうらかな春日のさす縁側に蹲つて、庭の蓮の鉢の方へ眼をやりながら、フランスの友人が贈つてくれた、蓮の花瓣で卷いた薰高い煙草を、靜かな心でくゆらすのである。(旅人の言)

蓮の香や水をはなるる莖二寸

燕村

蓮池の田風にしらむ葉うら哉

同

橋低く蓮の浮葉の二つ三つ

子規

五 夏の雲

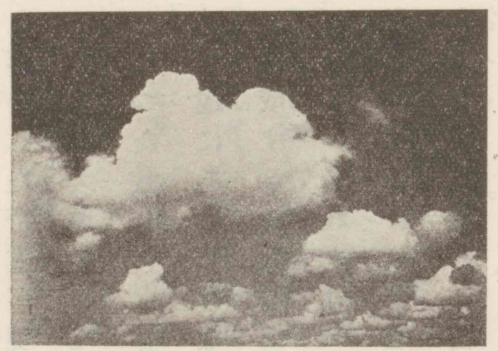
國 富 信 一

紺青の様な海に浮かぶ眞帆片帆を掠めて飛ぶ鷗、空には白い綿の様な雲が、こゝかしこに漂うて居る。夏の空に無くてはならないのが、此の白い雲即ち積雲である。此の雲は我々に一番親しみ深い雲で、夏の空ばかりではない。春でも秋でも又冬でも、天氣さへ極上で、少しぼかぼかする様な日には、いつも和らかに空に浮かんで居る。油畫などに描かれて居る雲の大部分、又は子供の手すさびに描いた雲も、大抵此の雲である。此の雲が斯く普遍的になつた一原因は、前にも述べた様に四季に互つて何時も現れるといふこと、如何にも平和さうに見えること、眞白であることなどに加へて、其の形が略、一定して居る事が注意せらるべきであらう。

國富信一 東京帝國大學理學部出身。中央氣象臺技師。

積雲には形と規模の大小からいつて二種類ある。片々として白雲の團塊が其處此處に浮かんで居るのが、單に積雲と呼ばれるもので、これは雲の厚みがやつと二三十間位、底面は遠くから見ると切取つた様に水平だが、上方は笠の様に丸くなつて居る。明かに、好晴の日に地面が熱せられた結果、それに觸れて居る空氣が上昇して冷却し、雲を生ずる結果である。元來暖かい水分を多量に含んだ空氣が上昇すると、上空へ行くに従つて氣壓が下るので、段々に膨脹する。膨脹すれば其の結果温度は下る。所謂斷熱膨脹といふ操作に依つて冷却し、其の結果、其の空氣中に含まれて居る水蒸氣が凝結して水滴となるのである。であるから水蒸氣から水滴に移る高さ、即ち雲を生ずる高さは、上昇して行つた空氣の温度湿度などに因つて定るもので、従つて同温度にあつて同じ様な度合に水蒸氣を含んで居る空氣は、同じ高さ迄上

昇すれば、一齊に水蒸氣から雲に變る筈である。これが、積雲の底面が略一定して、切取つた様な水平面を示す譯である。所で、上昇して行つた空氣はある高さで雲になつても猶上昇を續けて



積雲

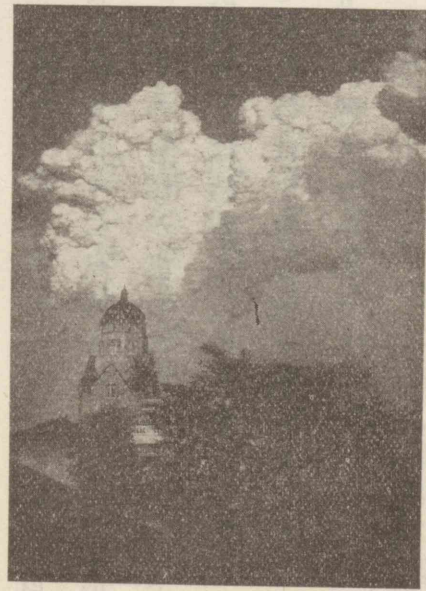
ゆくが、これから先の上昇は、空氣が既に雲といふ我々に見得る姿となつて居るから、其の有様が雲の形から判定できる。換言すれば、積雲の上部がむくむくとして居るのは、上昇氣流の動く形を現したものに過ぎないのである。

積雲の第二種としては有名な積亂雲がある。これは一名を入道雲とか雷雲とかいつて、夏の午後などに現れる積雲の大規模のもので、高さも二里半位迄も上昇するものがある。さうしてその原因は、頗る激

昨年 大正十
二年 九月 一
日

しい上昇氣流に由るものと考へられて居る。

昨年關東地方未曾有の大震災の時、東京及び横濱の空に異常な形をした奇雲が現れたのは、即ち此の積亂雲であつたのである。つまり大火災のため



關東大震災當時の奇雲

に起つた激しい上昇氣流が遂にあのやうな雲を構成するに至つたのであるが、あれだけの積亂雲が出来れば、普通なら非常に激しい雷雨を伴はねばならない筈であるのに、當時少しも降雨を見なかつたといふのはどういふ譯であらうか。これはつまり上昇して行つた空氣中に含まれた水蒸氣量の關係である。つまりあの場

合に上昇して行つた空氣は、火災のために乾燥し切つた空氣であつたので、上空で冷却しても纔かに雲を生じたばかりで、降雨を生ずるだけに多量の水蒸氣を含有しなかつたのであつたと考へられる。

斯様に積亂雲は局部的に異常に熱せられた空氣の上昇に由つて生ずるのであるから、火災などの場合は別として、通常盆地の様を特別に激しく熱せられさうな所に出来勝ちである。従つて積亂雲の生ずる場所は一定して居ると見ても差支ない。例へば東京の附近に出来る積亂雲は、多くは甲府の盆地、日光方面などから来るのに極つて居る様なものである。

積亂雲は斯様に出来る場所が略一定して居る上に、其の形が怪異であるために、頗る人目を引く。昔から入道雲、雲の峯として、詩歌にも俳諧にも非常に多くうたはれて居る。其の二三を擧

杜甫 字は子美。唐の詩人。陶潛 號は淵明。晋の潯陽の人。

夫木抄 夫木和歌集三十六卷。藤田長清の撰。

蕪村 谷口氏。夜半亭と號す。去來 向井氏。芭蕉の高弟。其角 寶井氏。芭蕉の高弟。芭蕉 松尾氏。桃青と號す。

大江丸 大伴氏。蓼太の門人。

げて見れば、詩には、

奇峯突兀、火雲昇、杜甫

夏雲多、奇峯、陶潛

などとあり、又歌には、

みなつきになりぬとみえて大そらにあやしき雲の

峯のいろかな(夫木抄)

とある。更に俳句には、

揚州の津も見えそめて雲の峯蕪村

夕暮や禿げならびたる雲の峯去來

八雲立つこの嶮嶮をくもの峯其角

ひらひらとあく扇や雲の峯芭蕉

など一々枚擧に違がない位である。

又、入道雲の出来る所が一定して居る例としては、

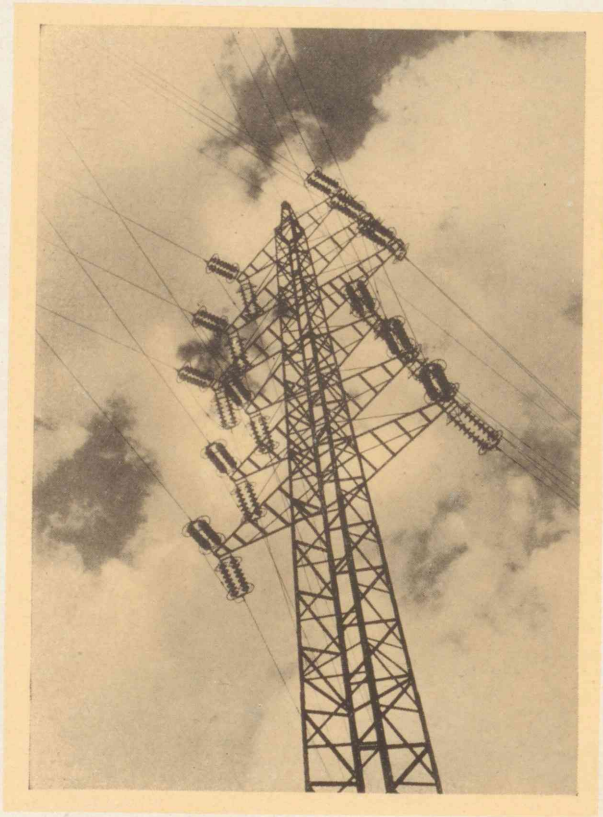
先に立つ丹波太郎や道しるべ

大江丸

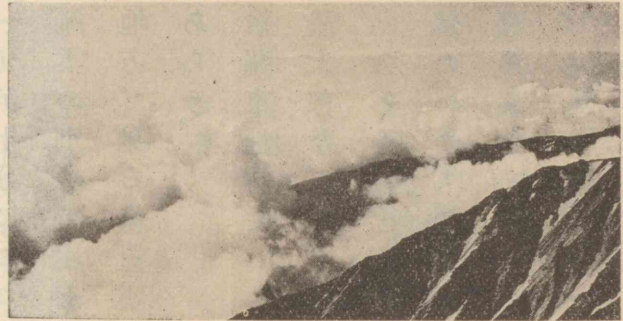
の一句が十分にこれを立證してゐる。茲に丹波太郎といふのは積亂雲の別名で、主として大阪地方で用ひられて居る。つまり大阪地方で見る積亂雲は、おもに丹波地方に出来る所から來たのであらう。

猶關東地方でいふ阪東太郎、九州でいふ比古太郎、近江・越前の信濃太郎なども、やはり同様な原因から來た異名である。積亂雲には猶形から名付けられた別名も少くないので、播磨の「黒ぐも」加賀の「いたち雲」安房の「岸雲」なども異名同雲である。

積亂雲は前にも述べた様に空氣の激しい上昇運動に由つて生ずるものであるが、非常に複雑な上昇徑路を取るために激しい渦動を生じて、あゝしたむくむくとした形を示す一方に、猛烈な上昇運動のために水滴が帯電して、其の結果は雷を生ずる。雷



立　　タ



雲　の　上　山

雲の異名はこれに由つて來たのである。

日本アルプスでも、富士でも、少し高い夏の山の頂上に泊つた人は、誰でも氣付く事である。まだ御來迎には間もある頃に起出でて、山頂から靜かに眠る下界の模様を眺める時、低く線を引いた様に横たはる白雲は微塵だに身ゆるぎさへせぬが、やがて御來迎の一閃と共に、此處、彼處と眠れる谷々から、先づ白雲の躍動が始つて來る。それが日の昇るに従つて激しく、遂にはわが足下をめがけて迄も奔騰する雲が生じて來る。これが高く離れては、物凄きばかりに雲塊重疊と、今に

も崩れ落ちんばかりの勢を見せて昇りゆく様は、到底我等が拙き筆に敘し得らるゝ所では無い。雲の八重垣とはこれをいふのであらう。この壯觀は、只登山者にのみ與へられる自然の雄大な繪巻物である。

然しあの突兀たる雲の峯の頂上が怒濤の如く崩れ落ちる時、下界にあつて見れば、其の頂は横になびいて、貝の舌の様になり、鐵砧の様になり、はては満天を蔽うて眞黒な亂雲となり、雹を降らし、雷をとどろかし、夕立さへも降らすのである。(夏の科學)

海ばらに立つ雲の峯風を無み群るる白帆の上を
はなれず
正岡子規

與謝蕪村俳人。姓は谷口、名は信實。攝津の人。天明三年（二四四三）歿、年七十八。一説に六十八。

六 蕪村の句

與謝蕪村

春の海ひねもすのたりのたりかな
春雨や小磯の小貝ぬるるほど
山もとに米踏む音や藤の花
卯の花のこぼるる露の廣葉かな
絶頂の城たのもしき若葉かな
若葉して水白く麥黄ばみたり
地車のとどろとひびく牡丹かな
涼しさや鐘をはなるる鐘の聲

石工の鑿冷したる清水かな
四五人に月落ちかかるをどりかな
白露や茨の刺にひとつづつ
鳥羽殿に五六騎いそぐ野分かな
山は暮れて野は黄昏の薄かな
蕭條として石に日の入る枯野かな
易水にねぶか流るる寒さかな
斧入れて香におどろくや冬木立

高濱虛子 名は清。俳人。明治七年生。

雨月物語 徳川時代、上田秋成著。

高野山 和歌山縣伊都郡、弘仁七年（一四七六）弘法大師開基。金剛峯寺あり。

奥の院 金剛峯寺々城を山上といひ、その西部を壇上、東部を奥の院といふ。

奥の院は殊に幽邃にて弘法大師廟のある所。

弘法大師 空海。讃岐の人。日本眞言宗の祖。承和二年（一四九五）歿、年六十二。

七 佛法僧

高 濱 虚 子

雨月物語を見た人は、高野山といへば、一番に佛法僧鳥の事を思ひ浮かべるであらう。此の鳥は日本國中二三の名山のほか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に、

閑林獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。

一鳥有聲人有心。聲心雲水俱了々。

とあるやうに、其の啼聲が「ぶつぽふそう」と聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として特にもてはやされてゐる。是に於てか秀吉公の歌といふに、

傳へにし鳥も御法をおこなひのこゑは高野に有明の

月

上田秋成 徳川時代の文學者。文化六年（二四六九）歿、年七十八。豊臣秀次 秀吉の養子。内大臣關白に至る。文祿三年（二五五四）高野山に自刃、年二十八。

といふのがある。公卿僧侶の歌は元より澤山ある。中にも上田秋成は此の鳥に豊臣秀次の幽霊を配して、雨月物語の一章を作つてゐる。其の物語は趣味ある文字として嘗て愛誦したことがあつた。

夕飯の済んだ後、今夜奥の院に行つて佛法僧の啼聲を聞いて來るから提灯を貸してくれたまへ」と給仕の小僧さんにいふと、「畏まりました」と小僧さんは笑ひながら膳を下げて行つたが、いくら待つても來ない。一時間も経つてから「本當に行くのですか」と聞きに來る。勿論本當に行くさ」と答へると、途中で何か出ますよ。」といふ。何が出る、猿でも出るか」と聞くと、新墓から幽霊が出ますよ。」といふ。晝間通つて見た時は大名などの舊い墓ばかりが目についたが、成程中には新墓もあらう。新墓の幽霊位何でもない。」と元氣な事をいつてやる。小僧さんは又薄氣味の悪いやうな笑

土蜘蛛 源頼
光の病床に人
となりて現
れ、頼光を惱
ます。

ひやうをして降りて行つたが、暫くして二つ巴の紋のついてゐる大きな提灯を持つて来る。さうして、幽霊の外に野衾も出るさうです。から、氣をおつけなさい。若し二時間も経つてお歸りがなかつたら、お迎へに行きます。としやれた事をいふ。

小僧さん自身に提灯をつけてくれて、表門は締めてしまつたから、裏口から御案内しませう。と先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに、馬鹿に背が低い。それが大きな提灯を提げてゐるので、少くとも芝居の「土蜘蛛」に出て來さうな恰好だ。下駄を穿いて臺所の横にまはる。廣い臺所には一つ燈がともつてゐるばかりだ。暗やみの中に二三人の小僧さんが、笑ひながら我等を見送つてゐる。それが提灯の光で纔かに見える。

がりがりと音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩疊な裏門のくゞり戸を小僧さんが先に立つてあけてくれた

一の橋 奥の
院の入口なる
溪橋。又大橋
といふ。大師
廟まで二軒。

時、鐵の鎖に軋る音であつた。小僧さんが突出す提灯を受取りながら、友と二人で表に出る。表は暗い。星はあるが、纔かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提灯を便りに其の白い土塀に沿うて、表通りの奥の院道に出る。

門前の數珠屋も、もう戸を下してゐる。一の橋を渡ると、眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木が襖の如く連なつてゐる。其の左右の襖で立て切つた中に、帯のやうに幅の狭い空が見える。其の空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提灯の光で纔かに足許を探つて歩く。晝間は氣がつかなくかつたが、縦横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに隨つて隆起して、終に杉の大木に集つてゐる。友は提灯をさし上げて、其の杉の幹に押しつ

けるやうにして歩く。友が三間ばかり歩いて、まだ杉の半面を照らし盡くさぬ。夜の杉は大ききのわからぬ巨人の如く突立っているのである。

寝鳥の立つ音がする。見ると、提灯の上から圓筒の如く圓い光が空中に射出されて、それが高い高い杉の梢を彷徨うてゐる。寝鳥が泡を食ふのも尤もだ。

歩きながら、友に雨月物語の話をする。墓原の中に、裸火らしい火が二つともつてゐる。何處やら心細くなる。かういふ時に、野衾が道を塞ぐだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に、薄ぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと氣にしながら行くと、突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がかゝつてゐる。

向うからふらふらと提灯が一つ来る。急に見えなくなるのは

釣狐 狂言の曲名。
白藏主 狐を釣る獵師の叔父。

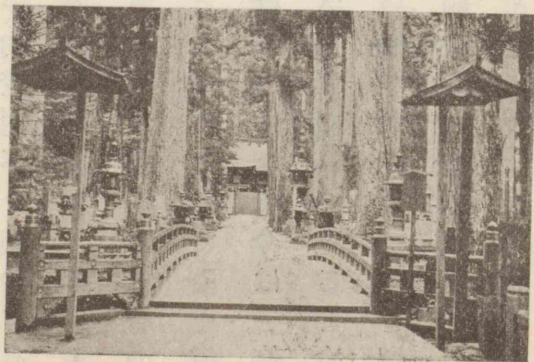
御廟の橋 弘法大師廟の前を流る、玉川に架したる橋。

燈籠堂 大師堂の禮堂。又拜殿といふ。信者より寄進せし數百の燈籠を納む。

杉の木に隠れるのであらう。すぐまた現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ様によく見ると、釣狐の狂言に出る白藏主に似てゐる。

行手に燈籠らしい灯が三つともつてゐる。近寄つて見ると御廟の橋だ。友が橋の上から提灯をつり下げて、水面を照らして見る。玉川の水は火を受けてちらちらと流れてゐる。燈籠堂はもうすぐ其處にある筈だが、眞暗でそれらしいものは見えぬ。

怪しみながら近寄つて見ると、すっかり四周の藪を下して、寂然として寝靜まつてゐるやうだ。數百の燈籠のともり連なつてゐる夜の景色は、淋しくも嚴かであら



御廟橋より萬燈籠堂を望む

うと思つて樂にしてゐたのに、これでは唯眞黒な大きな建物を
見るばかりで物足らぬ。燈籠堂に沿うて御廟の前に出る。御廟の
前も眞暗だ。唯廟前に左右六箇の小さい釣燈籠がともつてゐる。
其の光で纔かに御廟の屋根と、二三本の杉と、線香立とが見える。
此の線香立には、晝間見たときは煙が雲の如く渦卷いて居つた。
其の灯の中に數珠をくすべたり、鈴をくすべたりしてゐた信者
が、今は一人も見當らぬ。人間が居らぬばかりでなく、今は一條の
煙も昇つて居らぬ。提灯を其の中に突込んで覗いて見ると、冷た
くなつた灰の中に、線香の燃え滓の赤い紙が四五本残骸を留め
て居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立だと思つたが、寂然
として静まりかへつたところを見ると、愈々偉大な線香立である。
燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて縁に置か
れた提灯の灯が、心細さうに瞬いてゐる。遠方で鉦を叩くやうな

音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうな音だ。方角は御廟の
後に當る。そんな方に寺はない筈だが、不思議だと思ふ。其の鉦の
音に聴きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたましい啼聲が
起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帯びた聲だ。襟元から手
を突込んで背なか中を搔きまはされたやうな氣持になる。
鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが、今の啼聲は眞
平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天
狗のやうな嘴をした、鬼のやうな手をしたやつで、忽ち空中から
落下し來つて提灯をさらつて行くやうなことはあるまいかと
氣になる。氣のせみか、提灯の灯は一層心細さうに瞬いてゐる。
小さい咳拂が聞える。おやと思ふうちにまた一つ聞える。其の
邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に一寸した明りが
ある。此處は晝間線香などを賣つてゐた處であるから、すぐに番

人の部屋と想像がつく。試に其の傍に行つて、もしもし。」と呼んで見る。「へい。」と返事をする。「一寸伺ひますが、あのおそろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。あれは鳥ぢやない、獣です。」といふ。「へい、何といふ獣です。」と聞くと、野衾というて、蝙蝠のやうな、鼯のやうな、妙な恰好をした獣です。」といふ。あれが野衾かと合點が行く。それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれは何處ですか。」と聞く。番人は一寸黙つてゐたが、あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

鉦の音かと思つてゐたのが、鳥の啼聲であつたのは意外であつた。殊にそれを聞かう爲に來た佛法僧であつたのは愈、意外であつた。あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で、二人とも耳を傾けた。やはりかんかん、かんかん、と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、かんと響く前に、ぶつといふ低

い音が聞える。ぶつと低く響いてから、かんと高い冴えた音が響く。つまりぶつかん、ぶつかんと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くとあるが、雨月物語には佛法といふ字にわざわざ「ぶつばん」と假名が振つてあつて、ぶつばん、ぶつばんと鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の啼聲はぶつかん、ぶつかんと聞えるが、先づ、雨月物語のぶつばんに近いやうだ。妙なもので、初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だが、初め鉦の音と聞いた時は、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を聯想したが、生き物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に潤のある事に氣がつく。番人が、大概夜中の二時か三時にならぬと鳴かんのに、今晚は宵の口から頻りに鳴いてゐた。」といふ。さういふ内にも絶えずぶつかん、ぶつかんと聞える。普通の鳥とは餘程違

御影供 大師
の忌日にその
畫像をかゝげ
て供養する法
會。

つてゐる。法の御山の靈鳥として恥づかしからぬ不思議な鳥だ。古來幾多の詩歌がこれを持てはやしたのも尤もだ。私は嘗て高野の山の靈山である事は、奥の院道の杉並木で證據立てられるといつたが、否々杉は物かは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。

見ると、遙か彼方の縁に置かれた提灯の灯も今は靜かにもつてゐる。

番人は淋しい燈籠堂の夜陰に偶、話相手を得たので、問ひもせぬのに、いろいろ話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、中にも此の燈籠堂で焚く油は夥しいことで、月に一石から二石の間を往來してゐる。殊に三月二十一日の御影供の時は、一石の油を焚くといふ事や、貧の一燈の燈は信者の所望によつて線香に移してやる。それを北海道や九州あたりまで持つて歸る。中には途

中で消えたといふので、大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは面白かつた。

ふと氣がつくと、佛法僧は何時の間にやら鳴かぬやうになつてゐた。唯野衾が時々荒膽をひしぐやうな啼聲をする。

歸途につく。御廟の橋にかゝつた時、友が、また鳴くといふ。

向うの墓原を縫ふ様に、提灯が一つ來る。女が三人に男が一人「南無大師遍照金剛」と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

(十五代將軍)

水向地藏
廟の橋の東の
傍に在り。

湧き起る法の諸聲秋の風 虚子

提灯の明らかなる露の道 同

草摘みし今日の野いたみ夜雨來る 同

具行 源師行の子。後醍醐天皇に仕へ、北條討伐を謀り、元弘二年(一九九二)近江にて殺さる。俊基 藤原種範の子。元弘二年鎌倉にて斬らる。資朝 藤原俊光の子。元弘二年佐渡にて斬らる。仁和寺 京都市右京區御室。

八 阿新丸

さるほどに、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝、各死罪に行はるべしと評定一途に定りて、まづ去年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、その國の守護本間山城入道に下知せらる。

このこと京都に聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言、その頃は阿新殿くまのどのとて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞きて、今は何事にか命を惜しむべき。父とともに斬られて冥途の旅の伴をもし、また最後の御有様をも見奉るべし。とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、佐渡とやらんは人も通はぬ怖ろしき島と

こそ聞ゆれ。日數を経る道なれば、いかにしてか下るべき。その上汝にさへ離れては、一日片時も命存たがふべしとも覺えず。と、泣悲しみて止めければ、よしや伴なひ行く人なくば、いかなる淵瀬にも身を投げて死なん。と申しける間、母いたく止めなば、又目の前に憂き別もありぬべしと思ひ侘びて、力なく今までたゞ一人附副ひたる中間を相副へて、遙々と佐渡國へぞ下されける。

路遠けれど乗るべき馬もなければ、履きも習はぬ草鞋に菅の小笠を傾けて、露分けわくる越路の旅、思ひやるこそあはれなれ。都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乗りて、ほどなく佐渡國にぞ着きにける。人してかうといふべき便もなければ、自ら本間が館に至りて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立ち出でて、この内への御用にて御立ち候か、また如何なる用にて候ぞ。と問ひければ、

阿新殿「これは日野中納言の一子にて候が、近頃斬られさせ給ふべしと承りて、その最後の様をも見候はんために、都より遙々と尋ね下りて候。」といひもあへず、涙をはらはらと流しければ、この僧心ありける人なりければ、急ぎこのよしを本間に語るに、本間も岩木ならねばさすがあはれにや思ひけん、やがてこの僧を以て持佛堂に誘ひ入れて、踏皮行纏ぬがせ、足洗ひて、疎かならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿これを嬉しと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや。といひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なかなかよみぢの障ともなりぬべし。また關東の聞えも如何あらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔たりたるところに置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行末も知らぬ都に如何あらんと思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、

浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやりて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたるところに、堀ほり廻らし、塀塗りて、行通ふ人も稀なり。情なの本間が心や、父は禁牢せられ、子は未だ幼し。たとひ一所に置きたりとて、何程の怖畏かあるべきに、對面をだに許さず、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、亡からん後の苔の下、思ひ寢に見ん夢ならでは、相見んこともありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそあはれなれ。

五月二十九日の暮ほどに、資朝卿を牢より出し奉りて、遙かに御湯も召され候はぬに御行水候へ。」と申せば、はや斬らるべき時になりにけりと思ひ給ひて、嗚呼、うたてしきことかな。我が最後の様を見んために、遙々と尋ね下りたる幼きものを一目も見ず

五月二十九日
元弘二年

五蘊 色・受・
想・行・識。
四大 地・水・
火・風。

して果てぬることよ。とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につけて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押しひ給ひけるが、人間のことに於ては頭燃を拂ふ如くになりぬと覺りて、たゞ綿密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、こゝより十町ばかりある河原へ出し奉り、輿昇きすゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上ウツに居直りて、辭世の頌を書き給ふ。

五蘊假成形

四大今歸空

將首當白刃

截斷一陣風

年號月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし。御首は敷皮の上に落ちて、軀シカラはなほ坐せるが如し。このほど常に法談なんどし給ひける僧來りて、葬禮形の如く取營み、空しき骨を拾ひて、阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、

高野山 和歌
山縣伊都郡
奥の院 高野
山上の東部
納骨所あり。

取る手もたゆく倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見ることよ。と泣悲しむも理なり。

阿新未だ幼稚なれども、健氣なる所存ありければ、父の遺骨をばたゞ一人召使ひける中間に持たせて、まづ我より先に高野山に參りて、奥の院とかやに納めよ。とて都へ歸し上せ、我が身は勞ることあるよしにて、なほ本間が館にぞ留りける。これは本間が情なく父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日經けるほどに、阿新晝は病のよしにてひねもす臥し、夜は忍びやかに抜け出て、本間が寢處なんど細々に窺ひて、隙あらばかの入道父子が間に一人さし殺して、腹切らんずるものをも思ひ定めてぞ狙ひける。

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎黨どもも皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸よと思ひて、本間が寢處の方を

忍びて窺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢處を替へて
いづくにありとも見えぬ。また二間なる處に燈の影の見える
を、これは若し本間入道が子息にてやあるらん、それなりとも討
ちて恨を散ぜんと、抜け入りてこれを見るに、それさへ爰にはな
くして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふものぞたゞ一人
臥したりける。よしやこれも時にとりては親の敵なり、山城入道
に劣るまじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も
持たず、たゞ人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明かなれば、
立寄らば頓て驚き合ふこともやあらん、と危みて、左右な
く寄り得ず、如何せんと案じ煩ひて立ちたるに、折節夏なれば、燈
の影を見て、蛾といふ蟲の數多明障子に取付きたるを、すはや究
竟のことこそあれと思ひて、障子を少し引きあげたれば、この蟲
數多内へ入りて、頓て燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三

郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕元にありて、主はいたく
寝入りたり。まづ刀を取りて腰にさし、太刀を抜きて胸元にさし
當てて、寝たるものを殺すは死人をさすに同じければ、驚かさん
と思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚くと
ころを、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛
さし切りて、心靜かに後の竹原の中にぞ隠れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されて、あつ。といふ聲に番衆ど
も驚き騒ぎて、火を點してこれを見るに、血のつきたる小さき足
跡あり。さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へ
はよも出でじ、搜し出して打殺せ。とて、手に手に松明を點し、木
下、草の蔭まで、残るところなくぞ搜しける。阿新は竹原の中に隠
れながら、今はいづくへか遁るべき。人手に掛らんよりは、自害を
せばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今はいか

にもして命を全うして、君の御用にも立ち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣・孝子の義にてもあらんずれ。若しやと一まづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、口二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。さらば、これを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさらさらと登りたれば、竹の末堀の向うへ靡き伏して、やすやすと堀をば越えてけり。夜ははまだ深し。湊の方へ行きて、船に乗りてこそ陸へは着かめと思ひて、迎る迎る浦の方へ行くほどに、夜もはや次第にあけ離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隠さんとて日を暮し、麻や蓬の生茂りたる中に隠れるたれば、追手どもと覺しきものども、百四五十騎馳散りて、若し十二三ばかりなる兒や通りつる。」と、道に行きあふ人毎に問ふ音してぞ過ぎ行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、そことも知らず行くほどに、孝行の志を感じて、佛神擁護の陣またじをやめぐらされけん、年老いたる山伏一人行き逢ひたり。この兒の有様を見て痛ましくや思ひけん、これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ。」と問ひければ、阿新事の様をありのまゝにぞ語りける。山伏これを聞きて、我この人を助けずば、只今のほどにかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乗せ奉りて越後越中の方まで送りつけ進らすべし。」といひて、足たゆめばこの兒を肩に乗せ背に負ひて、程なく湊にぞ行き着きける。

夜明けて、便船やあると尋ねけるに、折節湊の内に船一艘もなかりけり。如何せんと求むるところに、遙かの沖に乗り浮かべたる大船、順風になりぬと悦びて、檣を立て、篷を捲く。山伏手を舉げて、その船これへ寄せてたび給へ。便船申さん。」と呼ばはりければ

聲を帆にあげて「秋風に聲を帆にあげて来る船は天の戸渡る雁にぞありける」
(古今集)

越後の國府 國府とは國司の廳のありし所。越後の國府は和名抄に「中頸城郡に在り」とあり。太平記 四十卷。作者不詳。後醍醐天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年に至る五十餘年間の争戦記。

も、曾て耳にも聞入れず、船人聲を帆に上げて湊の外へ漕出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結びて肩にかけ、沖行く船に立向ひて、いらたか數珠をさらさらと押揉みて、明王の本誓誤らずばその船此方へ漕返してたばせ給へ。」と跳り上り跳り上り肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈、神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄かに惡風吹來りて、この船忽ち覆らんとしける間、船人どもあわてて、山伏の御坊、まづ我等を御助け候へ。」と、手を合はせ、膝を屈め、手に手に船を漕戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛下りて兒を肩に乗せ、山伏の手を引き、屋形の内に入れたれば、風は又元の如くに直りて、船は湊を出でにけり。
その後、追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬を控へて、あの船止れ。」と招けども、船人これを見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船はその日の暮ほどに、越後の國府にぞ着きにける。(太平記)

九 笛の音

熊谷次郎直實 平貞盛の後裔。源賴朝の臣。後法然上人に投じて弟子となる。

さる程に一の谷の軍やぶれにしかば、武藏の國の住人熊谷の次郎直實、平家の公達の助船に乗らんとて汀の方へや落ち行き給ふらん、あつばれよき大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝつて、汀の方へ歩まする處に、こゝに練緯に鶴縫うたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、金づくりの太刀を佩き、二十四さいたる斑生の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍置いて乗つたりける武者一騎、沖なる船を目にかけ、海へさつと打入れ、五六段ばかりぞ泳がせける。
熊谷、あれはいかに、よき大將軍とこそ見參らせて候へ。まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。かへさせ給へ、かへさせ給へ。」と、扇をあげて招きければ、招かれて取つて返し、汀に打上らんとし

給ふ所に、熊谷波うちぎはにておしならべ、むずと組んでどうと
落ち取つておさへて首をかゝんとて、兜をおし仰けて見たりけ
れば、薄化粧して鐵漿黒なり。わが子の小次郎が齡ほどして、十六
七ばかんなるが、容顔まことに美麗なり。そもそもいかなる人に
てわたらせ給ひ候やらん、名乗らせ給へ、助け參らせん。」と申しけ
れば、まづかういふ和殿は誰ぞ。「ものその數にては候はねども、武
藏の國の住人熊谷の次郎直實。」と名乗り申す。さては汝が爲には
よい敵ぞ。名乗らずとも、首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ。」と
ぞのたまひける。

熊谷あつばれ大將軍や、この人一人討ち奉りたりとも、負くべ
き軍に勝つべきやうなし。また助け奉りたりとも、勝つ軍に負く
る事もよもあらじ。今朝一の谷にて、わが子の小次郎が薄手負う
たるをだにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞

土肥 土肥實
平。頼朝の臣。
梶原 梶原景
時。頼朝の臣。

き給ひて、さこそは嘆き悲しみ給はんずらめ。助け參らせん。」とて、
後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎ばかりで出て來る。熊谷涙
をはらはらと流して、「あれ御覽候へ、いかにもして助け參らせん
とは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞の如くに充ち満ちて、よも遁
し參らせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかけて奉つて、後の御
孝養をも仕り候はん。」と申しければ、たゞ何さまにも、とうとう首
を取れ。」とぞのたまひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに
刀を立つべしとも覺えず。目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に
覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く首をぞか
いてげる。

「あはれ弓矢取る身ほど、口惜しかりける事はなし。武藝の家に
生れずば、何しにたゞ今、かゝる憂目をば見るべき。なさけなうも
討ち奉つたるものかな。」と、袖を顔におし當てて、さめざめとぞ泣

經盛 平忠盛の子。
忠盛 貞盛五世の孫。清盛の父。

平家物語 異本多し。普通は十二卷に劔卷・灌頂卷二卷を加ふ。平家の勃興より滅亡までを記す。作者不詳。

きゐたる。首を包まんとて、鎧直垂をといて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。あないとほし、この曉、城の内にて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時味方に東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛もつ人はよもあらじ。上臈はなほもやさしかりけるものを。とて、これを取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば修理の大夫經盛の乙子。大夫敦盛とて、生年十七にぞなられる。それよりしてこそ熊谷が發心の心は出て來にけれ。

件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽の院より下し賜はられたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによつて、持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。狂言・綺語のこゝとわりといひながら、遂に讚佛乘の因となるこそあはれなれ。

（平家物語）

10 男性美

笹川臨風

何をか男性美といふ。氣象の天空海闊なるにあり、勇快果斷なるにあり。秀吉曰く、我に謀反するものはよもあるまじ。我ほどの主はあるまじきものを。と。秀吉は男性美を發揮したる一人なり。彼の度量は大きく、胸は廣かりき。能く清濁併せ吞むの慨ありき。小牧山の役、秀吉、千利休の茶會にあり。戰起ると聞くや、勇快果斷、そのまま立ち上り、尻をまくりて、えいやえいやとて出陣せり。賤が岳の戰には、疾風迅雷の如く進軍し、須臾にして金瓢の馬表、岳麓に現れ、佐久間玄蕃をして進退度を失はしめたり。

男性は義侠心あるべきなり。然諾を重んじ、他人の急に走り、利害の打算以外に面白き氣象あらざるべからず。往時我が國に男伊達といふものありき。多くは市井の徒にして、中には無頼漢も

笹川臨風 名は種郎。歴史學者。文學博士。明治三年東京市に生まる。
小牧山 愛知縣東春日井郡。天正十二年(二二四四)ここに秀吉と家康と戦へり。
千利休 名は宗易。千家流茶道の祖。天正十九年(二二五一)歿。年七十。
賤が岳 滋賀縣伊香郡。天正十一年(二二四三)ここに秀吉と柴田勝家と戦へり。
佐久間玄蕃 名は盛政。柴田勝家の臣。

なきにあらず。その道德觀も偏頗にして、識見も高からざりしが、その勇氣ありて水火をも辭せざる心意氣に至りては、誠に欽すべきものありき。威武に屈せず、權貴を恐れず、自家の利益を犠牲にして、他を濟ふ氣魄に至つては、また江戸時代の名物たるに恥ぢずと謂ふべし。

男性は能く責任を知る。事を曖昧模糊に附するは男子の爲すべき所にあらず。人の臣としては人の臣たる責任を知り、人の將たらば人の將たるべき責任を知る。學生としては學生の責任を知り、子としては子の責任を知る。學校の規則を守り、奮勵して向上の途につく、これ學生の責任なり。親を安心させ、父母をして憂を抱かしめざるやうにす、これ子としての責任なり。すべての人が皆その責任を知らば、國運は隆隆として旺なるべく、社會の文化は駁駁として進むべし。野球、庭球の如き、又漕艇の如き、各人そ

の責任を知つてこれを盡すを以て、その遊技に統一あり興味あり。若し個個勝手の事を爲して、その責任を蔑にせば、到底行はるべきものにはあらず。遊技には獨り責任を知りて、その他には責任を忘れんとするが如きは、思はざるの甚しきものなり。

男性の美なるは常に後暗からざるにあり。後暗きものはとかくに隠れんとし、左顧右眄して、敢て進まざるなり。男子は公明正大皎皎として白日の如くなるべし。自ら潔きものは進むに勇あり、事を爲すに恐るる所なし。孟子曰く、自反而不縮、雖褐寬博、吾不憚焉。自反而縮、雖千萬人、吾往矣。と。人誰か過なからん、過を悔ゆるが男らしき所にして、男性美の存する所なり。古聖人はいへり、過則勿憚改と。また曰く、君子過也如日月食、と。非を遂げ過を隠しおほせんとするは、畢竟自ら難地に踏み込んで、常に後暗き思をなすものなり。過あらば直ちにこれを悔い、悔いてこれを改むるを

自反而云々
孟子公孫丑篇
に出づ。
古聖人 孔子
を指す。
過則勿憚改
論語學而篇に
出づ。
君子過也如日
月食 論語子
張篇に出づ。

勇ありとなす。過は日月の蝕するが如く、浮雲の翳すが如し。これを改むれば、また赫赫として光明あり。

男性美はその男らしきによりて現る。英雄といひ、偉人といひ、君子といふ、皆男性美を發揮したるによりて、他の渴仰を受くるなり。

古の氣慨あるもの、識見あるものは、自ら稱して大丈夫といへり。大丈夫とは、ますらをなり、男子なり、眞男子なり。最も能く男性美を發揮するものをいふ。自ら大丈夫と信ずれば、時に遇ふと遇はざると、運と不運とは皆問ふ所にあらず。自家が信ずる道に進み、その所信を貫徹するに於て、最も勇あり斷あるなり。余は今の青年が常に自ら大丈夫を以て任じ、その男性美を發揮せんことを切望せざんばあらず。

彼の蒼たるものは天、我等が住める大地すら、既に滄海の一粟

彼の蒼たる云
云 詩經に出
でたる語。

に過ぎず。況や我が生の須臾なるに於てをや。然れども、その須臾なると、その滄海の一粟たるとは問ふを要せず。男性美は宇宙に於ける一奇觀たるべきなり。感化は永遠なり。男子の事業は悠久に互りて渝らざるなり。我等は男子と生まれたるを誇とす。男子にして男子らしからずんば、寧ろ男子たらざるに若かず。既に男子として生まれたる以上は、男性美を發揮せざんば、男子としての生まれがひなきなり。

男子としては眞男子たるべし。大丈夫たるべし。人の禪を以て相撲を取る勿れ。我が力を頼みとし、我が生の眞面目を發揮し、我が事業をして久遠の事業たらしめよ。一時は花の如し、永遠は果實なり、種子なり。(男性美)

國木田獨歩
名は哲夫。文
學者。明治四
十一年歿、年
三十八。

二 非凡なる凡人

國木田獨歩

僕の子供の時からの友人に桂正作といふ男がある。今年二十四で、今は横濱の或る會社に技手として雇はれ、専ら電氣事業に従事して居るが、先づ此の男ほど類の變つた人物はあるまいかと思はれる。

非凡人ではない。けれども凡人でもない。さりとして偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人といふのが最も適評かと僕は思つてゐる。

僕は知れば知るほど、此の男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つたところで、秀吉や、ナポレオンや、其の他の天才に感心するのとは違ふ。此の種の人物は千百歳に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは、平凡なる社會が常に産出し

豊臣秀吉 天
文六年尾張國
中村に生る。
慶長三年(一
二五八)歿、
年六十三。

ナポレオン

Napoleon
(1769—1821)
フランス
の英雄。

得る人物である。又、平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから、桂のやうな人物が一人殖えれば、それだけ社會が幸福になるのである。僕が桂に感心するのは、此の意味に於てである。又僕が桂を非凡なる凡人と評するのも、此の故である。

僕等が未だ小學校に通つてゐる時分であつた。或る日、其の日は日曜で、僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戦争の眞似をして、我こそ秀吉だとか、義経だとか、十三四にもなりながら馬鹿げた腕白を働いて大あばれにあばれ、遂に喉が渴いて來たので、山の直ぐ麓にある桂正作の家の庭へ裏山からどやどやと駈下りて、案内も乞はずいきなり井戸端に集つて、われがちにと水を汲んで飲んだ。

すると二階の窓から正作が顔を出して、此方を見て居る。僕はこれを見るや、來ないかと呼んだ。けれども彼は平常にない眞面

源義經 幼名
牛若丸。文治
五年(八四一
九)衣川の戦
に自害、年三
十一。

目くさつた顔つきをして、頭を横に振つた。腕白の方でも人並の
ことをしてのける桂正作が、不思議に今日は出て来ないので、僕
等も強いては誘はず、其のまゝ又山に駆登つてしまつた。

騒ぎくたびれてみな散々に我家へ歸り、僕は一人桂の宅に立
寄つた。黙つて二階へ上つて見ると、正作は「テーブル」に向ひ、椅子
に腰をかけて、一心に何か読んでゐる。

尤も、「テーブル」といつても、粗末な日本机の兩脚の下に繼臺を
した品物で、椅子も足繼あしつぎの下に箱を置いただけのものである。け
れども正作は眞面目に此の工夫をしたので、學校の先生が日本
流の机は衛生に悪いと言つた言葉を成程と感心して、直ぐこれ
だけのことを實行したのである。そして其の後常に此の椅子・テ
ーブルで彼は勉強して居たのである。其のテーブルの上には教
科書其の他の書籍を丁寧に重ね、筆墨の類まで決して亂雑に置

いてはない。彼は日曜の好い天氣であるにも關はらず、何の本か
脇目もふらずに読んで居るので、僕は其の傍に行つて、何を讀ん
で居るのだ。と言ひながら見ると、洋綴の厚い本である。

「西國立志編だ。」と答へて顔を上げ、僕を見た其の眼ざしは未だ
夢の醒めない人のやうで、心はなほ書籍の中にあるらしい。

「面白いかね。」

「うん面白い。」

「日本外史と何方が面白い。」と僕が問ふと、桂は微笑を含んで、漸
く我に復り、いつもの元氣のよい聲で、

「それやあ此の方が面白いよ。日本外史とは物が違ふ。昨夜僕は
梅田先生の處から借りて來てから讀みはじめたけれども、面白
くて止められない。僕は如何しても一冊買ふのだ。」と言つて、嬉し
くて堪らない風であつた。

西國立志編
スマイルス著
「セルフヘル
プ」の譯本。
英米人の立志
傳。

日本外史 頼
山陽の著。源
平二氏より徳
川氏に至る武
家の漢文歴
史。二十二卷。

其の後桂は遂に西國立志編を一冊買ひ求めたが、其の本といふのは粗末至極な洋綴で、一度讀み了らない中に既にばらばらになりさうな代物ゆゑ、彼はこれを丈夫な麻絲で綴直した。

此の時桂も僕も數へ年の十四歳であつた。桂は一度西國立志編の美味を知つて以後は、何度此の書を読んだか知れない。殆ど暗誦するほど熟讀したらしい。そして今日と雖も常にこれを座右に置いて居る。

げに桂正作は活きた西國立志編と言つてよからう。桂自身も言つて居る、若し僕が西國立志編を讀まなかつたら如何であつたらう、僕の今日あるのは全く此の書のお蔭だ。」と。

西國立志編を讀んだものは洋の東西を問はず幾百萬人あるか知れないが、桂正作のやうに、余を作りし者は此の書なり。」と明言し得る者が果して幾人あるだらう。

小學校を卒業するや、僕は縣下の中學校に入學して、暫く故郷をはなれたが、正作は家の都合でさういふわけにゆかず、周旋する人があつて某銀行に出ることになり、給料四圓か五圓か、某町まで二里の道程を朝夕往復することになった。

間もなく冬期休暇になり、僕は歸省の途についた。故郷近く來ると、五六間さきを、古ぼけたトンビを着、古ぼけた手提カバンを持つて、靜に登りつつある少年がある。其の姿が如何にも桂正作に似て居るので、桂君ぢやないか」と聲を掛けた。後を振り向いて破顔一笑したのはまさしく正作であつた。

「冬期休暇になつたのか。」

「どうだ、君は未だ銀行に通つてるか。」

「うん、通つてゐるけれども少しも面白くない。」

「どうして。」と僕は驚いて聞いた。

Thomas Edison (1847-1931) エヂソン
 George Stephenson (1781-1848) スティブンソン
 James Watt (1736-1819) ワット
イギリス人。蒸気機関の發明者。

「どうしてと言ふ譯もないが、君なら三日と辛抱が出来ないだらうと思ふ。第一銀行業からして、僕の目的ぢやないのなもの。」

「何が君の目的なのだ。」

「工業で身を立てる決心だ。僕は毎日此の道を往復しながら色色考へたが、發明に越す大事業はないと思ふ。」

ワットやスティブンソンやエヂソンは彼が理想の英雄である。そして西國立志編は彼の聖書である。僕の黙つて頷くを見て、正作は更に言葉をつぎ、

「だから僕は來春は東京へ出ようかと思つて居る。」

「東京へ？」と驚いて問ひ返した。

「さうさ東京へ。旅費はもう出來たが、彼地へ行つて三月ばかり食へるだけの金を持つて居なければ困るだらうと思ふ。だから僕は父に頼んで、來年の三月までの給料は全部僕が貰ふことに

した。だから四月早々出立するだらうと思ふ。」

桂正作の計畫は總て此の筆法である。彼は随分少年にありがちな空想を描くけれども、計畫を立ててこれを實行する上に於ては、少年の時から今日に至るまで少しも變らず、一定の順序を立てて、一步一步と着々實行して、遂に目的通りに成就するのである。無論これは西國立志編の感化でもあらうけれども一つには、彼の性情が祖父に似て居るからだと思はれる。彼の祖父の非凡の人であつたことを今こゝで詳しく話すことは出來ないが、其の一つを言へば、眞書太閤記三百卷を寫すのに、十年計畫を立てて遂に見事に寫し終つたことがある。僕も桂の家でこれを實見したが、今でも其氣根の大きいなるに驚いて居る。正作は確に此の祖父の血を受けたに違ひない。若くは此の祖父の感化を受けただらうと思ふ。

途上種々の話で吾々二人は夕暮に歸宅し、其の後僕は毎日のやうに桂にあつて互に將來の大望を語り合つた。冬期休暇が終り、僕が中學校の寄宿舎に歸るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて來た。そして言ふには、今度會ふのは東京だらう。三四年は歸郷しない積りだから」と、僕も其の積りて正作に別を告げた。明治二十七年の春、桂は計畫通りに上京し、東京から二三度手紙をよこしたけれども、何時も無事を知らせるばかりで、別に着京後の様子を告げてない。又故郷の者も、誰もどうして正作が暮してゐるか知らない。父母すら知らない。ただ何人も疑はないことが一つあつた。曰く桂正作は何等かの計畫を立てて、其の目的に向つて着々歩を進めて居るだらうといふ事實である。僕は三十年の春上京した。そして宿所が定まるや、早速桂の住所を訪ねた。此の時二人は既に十九歳であつた。

築地 東京市
京橋區。

午後三時頃であつた、僕は築地某町を隅から隅まで探して、漸くのことて桂の住家を探し當てた。とある横町の、貧しげな家ばかり並んで居る中に挟まつた九尺間口の二階屋、其の二階が、活ける西國立志編君の巢である。

「桂君といふ人が貴方の處にゐますか。」

「へい、いらつしやいます。あの書生さんでせう。」といふ挨拶、聲を聞きつけてみしみしと二階を下りて來て、「やあ」と現れたのが、一別以來三年逢はなかつた桂正作である。

足も立てられないやうな汚い疊を二三枚歩いて、狭い急な梯子段を登り、通された部屋は六疊敷、煤けた天井が低く頭を壓し、疊も黒く壁も黒い、けれども黒くないものがある。それは書籍である。

桂ほど書籍を大切にすることは少い。彼は如何なる書物でも

決して机の上や座敷の眞中に放置するやうなことはしない。かう言ふと桂は書籍ばかりを大切にするやうだけれど、必ずしもさうでない。彼は身の周りのもの總てを大事にする。見るに机も可なり立派で、書籍箱も左まで黒くない。机の上を見ると、教科書用の書籍その他が例の如く整然として重ねてある。其の他周囲の物總てが、皆其の處を得てきちんとして居る。彼は例の如く、最も快活に胸臆を開いて語つた。僕の問ふがままに、上京後の彼の生活をば、恥ぢもせず、誇りもせず、平易に、率直に、詳しく話して聞かせた。

彼ほど虚榮心の少い男は珍しい。其の境遇に處し、其の信ずる處を行うて、それで満足し、安心し、そして勉勵して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことをして、運命に安んじて、しかも運命を開拓しつゝ、進んで行く。僕は聞いて

て居る中にも、益々彼を尊敬する念を禁じ得なかつた。彼は計畫通り三ヶ月の糧を蓄へて上京したけれども、坐してこれを食ふ男ではなかつた。何が面白い職を得たいものと、先づ東京中を足に任せて遍巡り歩いた。

日清の間が切迫して来るや、彼は直ぐ新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。

かくて其の年も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手学校の夜學部に入學し得たのである。

かつ問ひかつ聞いて居る中に夕暮近くなつた。

「飯を食ひに行かう。」と桂は突然言つて、机の抽斗から手早く藁口を取出して懐へ入れた。

「何處へ。」と僕は驚いて訊ねた。

「飯屋へさ。」と言つて正作は立ちかけたので、

「いや飯なら僕は宿へ歸つて食ふから心配しないはうが可いよ。」

「まあそんなことを云はないで一所に食ひ給へ。そして今夜は此處に泊り給へ。まだ話が澤山残つてゐる。」

僕も其の意に従ひ、二人して宿を出た。路の二三町も歩いたが、桂は其の間も愉快に話しながら、國元のことなど聞き、今年の中に一度故郷に歸りたいなどいつてゐた。けれども僕は桂の生活の模様から察して、三百里外の故郷に往復することの、到底いふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず、歸れたら一度歸つて父母を見舞ひ給へ位の軽い挨拶をして置いた。

「此處だ。」と言つて、桂は先に立つて繩暖簾を潜つた。僕は喫驚して暫時ためらつて居ると、内から、
「おい君」と呼んだ。しかたが無いから入ると、桂は程よき場處に

陣取つて、笑みを含んで此方を見て居る。見まはすと、桂の外に四五名の労働者らしい男が居て、長い食卓に着いて、飯を食ふ者、酒を飲むもの、殊の外靜肅である。

「僕は三度三度此處で飯を食ふのだ。」と桂は平氣で言つて、君は何を食ふか。何でも出来るよ。」

「何でもい、僕は。」

「さうか、それでは。」と桂は女中に向つて二三品命じたが、其の名は符蝶のやうで僕には解らなかつた。暫くすると、刺身煮肴煮、汁などと飯を盛つた茶碗に香物が出た。

桂はうまさうに食ひ始めたが、僕は何となく汚らしい氣がして食ふ氣にならなかつたのを、無理に食ひ始めると、思はず涙が込み上げて來た。あゝ此の飯は、此の有爲なる、勤勉なる、獨立自活して自ら教育しつゝある少年が、労働して儲け得た金で、心から

の馳走をして呉れる好意だ。それを何ぞや不味さうに食ふとは。桂は此處で三度の食事をするではないか。これを厭々ながら食ふ自分は彼の竹馬の友といはれようか、さう思つて僕は思はず涙を呑んだのである。そして僕は急に胸がすがすがして、桂と共に美味く食事をして、繩暖簾を出た。

其の夜は、二人で薄い布團の中に、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷のことや、他の友のことや、將來の望を語り合つた。

其後の桂と僕とは互に往來して居たが、早くも其の年の夏期休暇が來た。すると一日、桂が僕の下宿に來て、

「僕は故郷へ歸つて來ようかと思ふ。實はもう決めて居るのだ。」といふ。

「それはいゝけれども君……」と僕は直ぐ旅費等のことを心配

して口を開くと、實は金も出來て居るのだ。三十圓ばかり貯蓄してあるが、往復の旅費と土産物とで二十圓有つたら可からうと思ふ。三十圓すつかり使つてしまふと後で困るからね。といふのを聞いて、僕は今更ながら彼の用意のほどに感じ入つた。彼の話に依ると、二年前から歸省の計畫を立てて、其の積りで貯金してゐたとのこと。

そこで僕も大に喜んで彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、母や、弟や、親戚の女、子供を喜ばすべく、欣々然として新橋を立つた。

翌三十一年に彼は目出度く學校を卒業し、電氣部の技手として、横濱の會社に給料十二圓で雇はれた。其の後今日まで五年になる。其の間彼は何をしたか。たゞ其の職分を忠實に勤めただけか。さうではない。

彼は大きいなる事をして居る。彼には弟が二人あつて、二人とも手に行かない突飛者、一人を五郎と云ひ、一人を荒雄といふ。五郎は正作が横濱の會社に出たと聞かぬや、國元を飛び出して、東京に來た。正作は五郎の爲に所々奔走して、或は商店に入れ、或は家僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處を逃出してしまふ。正作は根氣よく世話をしてゐたが、遂に五郎を自分の傍に置き、種々に訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀ませ、そして工手學校に入れてしまつた。僅かの給料で自ら食ひ、弟を養ひ、三年の間、辛苦に辛苦を重ねた結果は三十四年に至つて現れ、五郎は技手となつて今は東京芝區の某會社に雇はれ、眞面目に働いて居る。荒雄も亦た國を飛び出した。今は正作と五郎と二人で、此の弟の教育に苦心して居る。

今年の春であつた。夕暮に僕は横濱野毛町に桂を訪ねると、宿

の者が「桂さんは未だ會社です。」と言ふから、會社の様子も見たく、其の足で會社を訪うた。桂の仕事をしてゐる場處に行つて見ると、一本の太い鐵柱を擁して數人の人が立つて居て、正作は一人、其の鐵柱の周圍を幾度となく廻つて、熱心に何事かして居る。最早電燈が點いて、白晝の如く此の一群の人を照して居る。人々は黙して正作のするところを見て居る。器械に狂ひの生じたのを正作が檢分し、修繕してゐるのらしい。

桂の顔、様子。彼は無人の地にゐて、我を忘れ、世界を忘れ、身も魂も、今其のなしつゝある仕事に打込んで居る。僕は、桂の容貌のかくまでに眞面目なのを見たことがない。僕は一種莊嚴の感に打たれて、思はずそこにたゞずんだ。(獨歩全集)

島本赤彦
本名久保田俊彦。歌人。大正十五年歿、年五十一。

去年 大正六年。

二 暴 風

島 本 赤 彦

去年九月三十日夜の暴風雨には、予はF君と共に夜明けまで二階の雨戸を押してゐた。風の正面に立つ戸は五枚である。その一枚が外れて風が二階から侵入したら、自分の家はもう助からぬと思つてゐた。二人の手では、五枚のうち四枚しか押すことが出来ぬ。それも、時々大きなのが突き當つて來ると、二枚づつ受持つてゐる二人の力が、最も危い中央の一枚に集中されねばならぬ。危い戸は弧をなしてこちらに吹き撓められる。その弧の頂點を精一杯に押し返さうとする力の次第に弱くなる時、予は運命を心に感じ始めてゐた。

下には妻や子供が逃仕度をして土間に立つてゐる。二階から聲が掛らねば、一步も外へ出てはならぬと命令を下してあるの

である。逃げ出すべき命令を下さうか、下すまいかと思案

風の刻々に吹きつゝのる戸に向つてゐた予は、口中

乾いてゐた。予はかういふ中にも幾分

たのと、家族の恐怖心を少し

よつて、戸を押し

いてゐる

翌

一枚の
くるのであ

これを余の日常

私の求める寫生は、嵐の中の
とすることである。即ち物及び現象の中核
その性命を捉へようとするものである。それはやがて
自身の性命を捉へようとするところでもある。ちやうど一

を押すことが、一つの家屋を支へることであり、更に一家族の生
命を支へることであつたのと相違する所はないのである。

寫生を以て、單に物及び現象を寫すに止まるものとするのは、
未だ深く寫生に没頭せぬ人の起しやうい考へである。歌の題材
が人事であるか自然物であるかといふ如きは、何等重要な區別
を劃すべき意義を有する問題ではない。寫生の眞義は、人事につ
いても自然物についても、常にかくの如き一枚の戸を捉へんと
するにある。更に精しく言へば、一枚の戸が風に吹き撓ふ、弧の頂
點を捉へんとするにある。頂點を捉へ得て、しかもその頂點を支
へる力が不足する時、我々はこゝに始めて眞の恐怖を感じ、全人
的の苦悶に直面するのである。(赤彦全集)

吉江喬松 文學博士。早稻田大學教授。文學部長。明治十三年生。

一三 丘の上

吉江喬松

小松と薄と矮い灌木の藪とのつゞいてゐる丘の上へ來て、私はその藪の茂みの中に身を置いた。

丘は幾つかの巖をなして、背後に繞る連峯の中軸から分れて平野の上へ迫つてゐる。その巖と巖との間には小さな幾つかの谿が出来てゐて、その中には蒼黒い藪壘の下をくゞつて行く小流や、急な傾斜をした桑畑や、小松の原や、焼跡の草原などがつゞいてゐて、農夫の作小屋の一つ二つが目にはひる。一つの丘の上へ來て見ると、谿を隔てて幾つかの丘の頂が背比べてもしてゐるやうに立つてゐる。

八月下旬の日の光、眞晝頃のことと、焙りつけるくらゐに暑さうだが、その光を亂して、折々谿の中から冷たい大氣の流が、ひそ

かに肌膚へ忍びよる。

縁の狭い帽子は顔へ當る日の光を遮るけれど、背から肩から胸から、一面に容赦なく照りつけるのをそのままに、私は藪の中へ足を投出して、ちつと身を縮め、胸を抑へて、心臓の鼓動の靜まるのをまつてゐた。

耳もと近くで、すういすういと薄の葉が擦れ合つて、かすかな音を立ててゐる。藪の根元で、蟲の聲が時々起つて、また細く消えて行く。

俯向いてゐる領元から、日がじりじりと喰入つて、痛いくらゐにも思はれる。けれど、その光が私の皮膚の細かな毛穴の一つ一つから、奥深くさし込んで、疲れて濁つた私の血は、それがために鮮かな紅にかはつて、勢よく運行しだすやうに思はれる。寧ろ胸を開いて此の光を胸臆へ吸込みたい。兩手を開いてこの光を抱

きたいたぎり落つる日の光の力を血管の中へ呼び入れたい。明るい光が體軀の中を照らしたらば、ぼろ紙のやうな私の皮膚には、弾力が増して來はしまいか。生々とした活力がほしい。爽かな山地の空氣と日光とは、疲勞した私をまた生かして呉れるのではあるまいか。

ごうごうといふ物の響が、ふと私の背後に起つた。消えるでもなく、始るでもなく、空中にたゆたつてゐる。

ふり返つて見ると、それは赤松の林だ。樹上に高く風がからんで吹去らない。薄紅の鱗をつけたやうな松の樹幹が幾本も眞直に立つてゐて、頭だけを動かしてゐる。日は上からその葉の茂みを洩れて、地上に縞を織る。樹の根を繞つて、薄紫の草花が微かに咲いてゐる。ごうと吹いて來る風につれて、かすかではあるが松の香が漂ふ。眞晝の日の光を受けて、樹幹から洩れる松脂の匂、

山地の健康を思はせるその香が、空中に漂つてゐる。

平原地の林の中をいかにさまよひ求めても聞くことが出来ない幽久の響、松の樹のこの單純林の奏する樂の音の中には、遠い昔からの山地の歴史が織込まれてゐる。一簇の老樹の林のある中には、必ずいくらかの古墳がある。苔さびた匂と松脂の香とは一つになつて、その風の中に漂つてゐる。

細長い薄の葉と、鼠さしのこまかい針のやうな葉とが、入亂れた影を私の手の上へ落して、折々ゆれてゐる。私は自分の手の上にゑがきだされたこの微細畫を壊すまいと、ちつと其の影の亂れつ寄りつするのを見つめてゐた。じつじつと思ひ出したやうに、蟲がまた薄の根元で鳴き出す。冷たい風が藪の中を這ふやうに寄せて來る。

ふと藪の中から顔を上げて向うを見渡した。谿を隔てて桑畑

が稻田と同じ緑色をしながらも、濃淡のけぢめをつけて近く輝いてゐる。その中に鎮守の森と、地主の家の森とが島のやうに點在してゐる。——見渡しのきく野は、四五里を隔てて、そのさきに國境の連峯が鐵壁のやうに空を劃して立ちつゞいてゐる。

穂高の群峯が他よりも秀でて、連峯の上に高く聳えてゐる。鋼鐵でも張つたやうな八月空を突裂いて立つてゐる連峯、その峯の間に消え残る雪の條は、白く閃めて中空に反射してゐる。それより北につゞいて、幾多の連山が果てなき山の深さを見せて、遠く走つてゐる。幾度見ても目醒めんばかりの山の姿だ。亂れた心を静め、動ずることなき深さを胸に据ゑつけて呉れる。山と空とを劃する、力の籠つた、しかし、なだらかな微妙な一線、それをちつと見つめてゐると、一種の微動が絶えずそこから起つて、四方へ散るやうに思はれる。日の光と物の響と、そしてこの音なき山

頂の波動とは、一つの混成したリズムをなして、山地の晝に爽かな生々とした調子を與へてゐる。

私の體内の血は、今こそ順調に動いてゐるぞといふやうに、強く胸をめぐる、はつきりした明るい心持、生々とした感じが五體を引きしめる。

びいつびいつと鋭い鳴聲を立てて、渡鳥の一群が丘の出鼻の櫟林の一角から、下の平らな桑畑の上を横切つて、向うの丘の一端へ消えて行つた。幾千羽群れて行く小鳥の羽は、光の波を翻し、煽り立て、光と陰とを隈どつて、我後れじと争つて舞つて行く。ぱつと高く丘の上を乗越えたかと思ふと、もうその群の姿は向うへ見えなくなつた。鶉の一群だ。時立てたばかりの大根の種子をあさり、出初めたばかりの粟の穂を求めて歩く渡鳥の群だ。身を隠す林があれば、忙はしげにその中へむぐり込み、畑の獲物を見

つけると、競つて舞ひおりの漂泊者の群集だ。光の中にくゞつて
ある冷たい大氣の流動に促されて、あわたゞしい姿をして、彼等
は丘を越え、畑をあさつて舞つて行く。

頭上の松の響も、谿の中の流の音も、藪疊の上を走る冷たい風
も次第に高くなつて來た。静かな山地の眞晝は、今一時、秋來る前
に、その鮮かな働きを見せてゐるのだ。

私はいつまでもいつまでも丘の頂に身を埋めてゐた。

(若き自然)

空は萬人の爲に存在する。空は甚だ美しいが、人の心の日常
の糧として、美し過ぎることもなければ、良過ぎることもな

い。空はそのあらゆる作用に於て、常に人の心を慰め、高め、又
これを鎮め清めて、その汚濁を洗ひ去るに適してゐる。

(ラスキーン)

島崎藤村 名
け春樹、文學
者、明治五年
生。

四海

島崎藤村

船は印度の南端を過ぎた。時とすると驟雨が印度洋へ來た。そ
れがわれわれの甲板へ吹込んだ。合奏のやうな海の音も聞えた。
雨後は殊に蒸暑い。白い熱を帯びた雲が行手の空に起つて、そこ
にあるものは永遠の眞夏かと疑はせた。コロomboの近海に見て
行つた漁船の影も隠れた。

ふと、波の間に一隻の汽船が見えた。われわれの甲板からその
汽船を認めたものは、いづれも欄のところに立つて眺めた。

「あ、日本の船ぢやないか。」と、私は自分で言つて見た。その二本の
檣で、その一本の煙筒で、われわれの乗船に比べると、自ら構造を
異にしたその黒い船の形で。

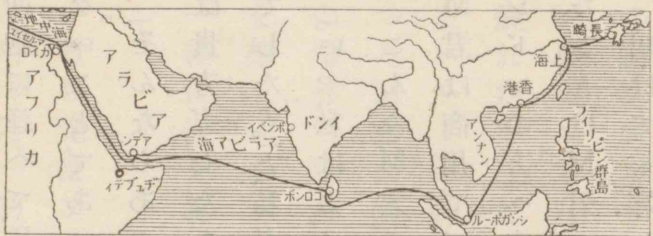
私は艦の方の太い綱の積んである甲板へ走つて行つた。そこ

コロombo
印度の南
方、上な
るセイロ
ン島の首
都。

マルセイユ
佛蘭西の
南、地中海に面する港。
Marseilles
郵船會社、日本郵船會社の便乗したる佛蘭西の汽船。

シンガポール
馬來半島の最南端にあり。

から船を望まうとした。神戸出發以來われわれの船と前後して、マルセイユへ向ふ郵船會社の汽船があつたから、波間に見るのもその船らしく思はれた。貨物を積むことが割合に少くて速力の多く出るエルネスト・シモンは見る間にその船に追付いた。遠く離れて來た故國を一つの船にして見せてくれるやうなその形が、恰も繪卷物のやうにして私の眼前にあつた。私は青く光る波を隔てて、向うの甲板に集る人の影までも望むことが出來た。果してそれが同胞であるや否やを見定めることは出來なかつたけれども、私はしきりに自分の帽子を振つて見た。間もなく、エルネスト・シモンは、その船を後に残して進んで行つた。遠く後方に残して、海はまた砂漠のやうな空虚に返つた。鳥一羽、船一隻、何一つ私の眼に入るものは無かつた。われわれの船がシンガポールを離れた頃は、まだそれほどにも思はなかつた。



がいよいよ印度の南端も過ぎ、コロomboもはや後方になつた時、何となく私も心寂しさを感じて來た。故國の消息が絶えたことも既に二十二日であつた。船はアラビアの海へ入つて行つた。そこには油を流したやうな海があつた。どろりとした青い波は幾趣幾様かの渦と皺と紋とを描いて見せた。白い雲の影は海に映るほどの日で、その静かさは熱帯らしい静かさであつた。どうかすると波間に群れ飛ぶ銀色の飛魚をも見て行つた。未だ曾て望んだこともないやうな夕陽に燃える火の海をも見て行つた。

失禮ですが、私はMといふものです。コロomboからこの船に乗つて參つたものです。と、私の側へ來て、名刺をく

れた日本の絹商があつた。こんな外國人ばかりの中で、珍らしい
同胞に逢へて、國の言葉で話が出来ようとは、全く私も思ひがけ
ないことであつた。

「そんなら、あの食堂の側の廊下で荷物を開けていらしたの
は貴方でしたか。失禮しました。私は日本の方だとは思ひませ
んでしたよ。」と、私があからさまに言ふと、M君は快活に笑つて、

「いや、私はよく支那人に間違へられます。」

こんなM君の心易い調子がいかにも旅慣れた人らしかつた。
M君は商用でボンベイからインドの地方を旅して、これからロ
ンドンの方へ向ふといふ人であつた。私をフランス船に見つけ
たことはM君に取つても意外であつたらしい。

明けても暮れても私が眺めて行つたものは海だ。風のある日
は濃い藍色の波の間に白波の碎けるのが涼しく見えるやうな

海を。日光の烈しい日はまた波から来る青い青い反射がまぶし
く眼を射るやうな海を。ある時は支那生活の話をするドクトル
の側で。ある時は宗教の比較に来るスペイン人の側で。ある時は
疲れたやうな悲劇役者の側で。ある時は老技師が紹介してくれ
たバリーの紳士の側で。私はまた多くの時を上甲板の方に陣取
つたM君の側で送つた。朝の甲板の水掃除がすんで、まだ板の間
の濡れて居る頃には、私も素足で冷々と眼のさめるやうな心持
を楽しみながら、そこへ朝衣のまゝで歩き廻りに来る隠居とも
一緒に海を眺めた。

日の光はアラビアの海に満ちて居た。人を避けて私は海を見
に行つた。一切を忘れさせるものは海だ。躍れ。躍れ。海よ、躍れ。舷に
近く白い大きな花輪を見るやうなのは、われわれの船の起す波

の泡であつた。忽ちその泡が近い波の上へ擴つて行つて、星のやうに散亂れて、やがて、痕跡も無く消えて行つた。私は遠く青く光る海の彼方に、無数の魚の群かとも思はれる波の動搖をも認め、條理もなく、筋道もない海、先蹤もなく、標柱もない海、豊富で、しかも捉へることの出来ないやうな海、何處を出發點とも、何處を結末とも言ひ難いやうな海、私の眼に映るものは、唯日の光であつた。波の背に反射する影であつた。藍色の波の上に浮揚つて、やがて消えて行く泡であつた。波と波と相撃つて時々揚る水煙であつた。光と、熱と、波とは殆ど一つに溶けあつて、私は自分の身體までその中へ吸はれて行く思をした。

大船の心安さ。私は波打際の砂の上に身を置くやうな、海から離れた心持をもつて、しかも岸から窺ふことの出來ない海の懷をまのあたりに近く見て行つた。巻きつゝある。開きつゝある。湧

きつゝある。起りつゝある。奔りつゝある。放ちつゝある。延びつゝある。狂ひつゝある。亂れつゝある。競ひつゝある。溢れつゝある。醸しつゝある。流れつゝある。止りつゝある。轉びつゝある。陥没りつゝある。渦巻きつゝある。波は波の中に滑り入りつゝある。揺れつゝある。震へつゝある。觸れつゝある。撃ちあひつゝある。混りあひつゝある。逆立ちつゝある。連なりつゝある。續きつゝある。われとわが身を恣にしつゝある。

長い廊下のやうな甲板から眺めると、少し斜になつた欄の線が、あたかも遠い水平線と擦れ擦れになつて、あるひは水平線の方が高くなつたり、あるひは欄の線の方が高くなつたりするやうに見えた。どうかすると、青い深い海はその板の間まで這上つて來るやうにも見えた。——波の動搖に身を任せてゐた私のすぐ足許まで。

Africa
アフリカ

Jibuti
の東北
岸。紅海
の入口。
佛領。

チュブテイ
アフリカ

赤黒い禿山を望むやうな、ところどころに石の質の現れた、荒寥としてしかも乾き切つた、死の島とも呼んで見たい幾つかの島の影が海の上に現れた。われわれの船では、乗客は皆甲板の上に總立ちに立つた。早速雙眼鏡を取出したのもあつた。

「アフリカが見えて來ましたぜ。」と、傍に立つM君が私に言つた。全く知らない人達の中に入つて來た私も、どうやらアフリカの海岸に近い處まで漕付けることが出來た。航海の季節によつてはなかなか骨が折れると聞くアラビアの海をも、さほど熱苦しい思もせず通過して來た旅の幸を祝つた。チュブテイ——アフリカの一角にある佛領の港——へ石炭を積み寄るといふ前の晩は、船では盛な晩餐會があつた。われわれの食堂も港毎に客の數を増して、チュブテイに着く頃には五十人を越して居

Aden
(Babel-Mandeb)
を扼する
紅海の口
海峽。正
しくはバ
ブル
マンド
ブ海峽とい
ふ。

アデンの海峽

た。皆互に盃をあげ、かちりと觸合はせ、航海の無事を祝ふためにフランスの葡萄酒を飲んだ。陸を待受ける待遠しさが皆の心にあつた。翌日の午後になつて、初めてアフリカの陸らしいものが見えて來た。船は水蒸氣の多い、風の多い、白い光の満ちた海に入つて行つた。赤く禿げたアフリカの沿岸が次第にはつきりと現れて來た。人々は旅に疲れ、朝のうちに來た涼しい雨に疲れ、早くチュブテイの港へと願つて居た。

チュブテイはアデンの海峽を隔てて、丁度あの英領の港と相對した位置にある。そこまで行くと、何となくスエズも近づいた氣がする。尻毛と腹の白い海の鷗がわれわれの船に近く飛んで來て鳴いた。小船を漕いで近寄つて來る土人もあつた。白い駝鳥の羽根、煙草小刀、槍、土人の齒を白くする楊枝の類を賣りに來る

英領の港
デン港をいふ
スエズ
紅海の北
端スエズ
運河の入
口。
アビシニヤ
アフリカ
の東北隅
にある獨
立國
Abyssinia

手合が、小船から船梯子を傳つて、われわれの甲板の方へ上つて
來た。一口に土人とは言つても、こゝのはアビシニヤ人だ。忽ちわ
れわれの周圍は、白や赤の布の頭巾や、熱い感じのする腰卷や、恐
ろしく光つた眼や、氣味悪く巻き縮れた髪や、アンナンでもイン
ドでも見られなかつたほどの、黒いと言つても黒い皮膚の人達
で満たされた。

「黒鬼はこゝから來たものだ。」とは例のM君の戯語である。

一方にアフリカ、一方にアラビア、その二つの陸の間を進んで
行つて、夜が明けた頃は、水蒸氣が多かつた。その日は午後から殊
に冷々とした。子供を連れた母親は幼いもののために薄い肩掛
を取出すほどの陽氣であつた。紅海の一日はこんな風に涼しく
もあつたが、また身の置きどころも無いやうな、暑熱の堪へ難い

Egypt
エジプト
アフリカ
の東北に
ある國。

日も來た。私は風の無い海の上に、遠く光る河のやうな波の反射
を望んで行つた。動搖して定りの無い波の岡、波の谷、波の小山を
も望んで行つた。波と波との私語をも聞いて行つた。急に涼しい
風が満ちて、しかも平かに穩かな海をも見て行つた。

一日は一日より涼しくなつて行つた。スエズも次第に近づい
たといふ頃は、急に外套を取出して夏服の上に重ねるものすら
あつた。氣の早い人々はマルセイユの港に着いた時の下相談な
どを始めて、見物、宿泊、それから食事の仲間に加はることを、私の
ところまでも勧誘に來た。

さびしい一軒屋のやうな燈臺が見えて來た。紅海の領分も漸
く狭く盡きて來た。エジプトの岸の方を見ると、白く黄ばんだ日
あたりの中に、小さな村落らしい人家も望まれた。そのあたりに
は樹木も何も無かつた。もうスエズも近づいた。

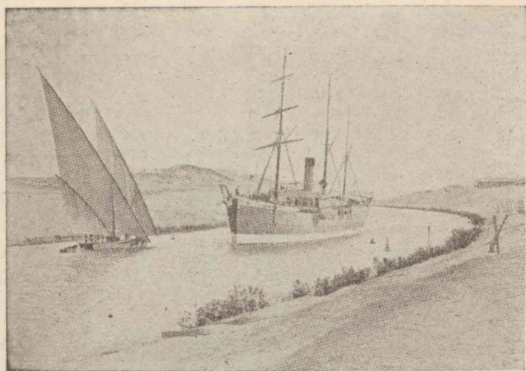
エルサレム
 地中海の
 東方、ア
 ラビヤの
 北方にあ
 るパレス
 テナの首
 都。

ヨット
 快走艇。
 軽快な小
 形西洋帆
 船。

海は微笑んだ。明るい海があつた。やはらかい海があつた。少し
 黄味を帯びて、しかも底青く透きとほるやうな、泳いでも見たい
 海があつた。長い船旅の疲労を身に感じながら、日に焼け潮風に
 吹かれつゞけて行つて、國を出た日から數へると三十一日目で、
 漸く私はスエズの港に辿り着いた。

船へはエルサレムの畫帖を賣りに来る土人もあつた。そここ
 こに赤い土耳其帽や白い布の頭巾などの見られる碇泊中の混
 雑の中で、私はM君と一緒に甲板の欄の方へ行つた。そこに二人
 で手を置いて眺めた。黄ばんだ明るい波の動搖は言ふに言はれ
 ぬ快感を興へた。白い鳥の翼をひろげたやうなのは、ヨットのや
 うに軽い古風な帆船だ。桃色、灰色、白などの雅致のある色彩を並
 べて塗つた船の一つがエジプト人を乗せて、われわれの眼前を

Port-Said **ポ**
 ートセツ
 スエズ運
 河の北口
 にある
 港。



スエズ運河

近く通り過ぎた。

「古代のエジプト人などが商品を積んで往來したのも、この海
 でせうね。M君はさすがに商人らしく
 遠い昔を偲ぶやうに言つた。

スエズの運河へ。翌朝早く、われわれ
 の船は、港を離れた。そして名高い堀割
 の入口にさしかゝつた。乗客は皆勇み
 立つた。もうそこまで行けば、ポートセ
 ッドに行つたも同じやうなものだ。こ
 の喜が單調な船の動搖に倦んだ人々
 の顔に讀まれた。運河の兩岸は呼べば
 答へるほどの位置にある。十三ほどある船着場の一つ一つが順
 に静かにわれわれの眼前に展げた。時とすると船は湖水の中を

通りぬけて、また堀割を徐々と進んで行つた。若葉に包まれた人家も見えた。遠く砂原續きの丘陵の起きたり伏したりして居るところどころに、僅かに短い草や灌木を見るやうな、兩岸の眺望は私の疲勞を忘れさせた。私はエジプトの岸の見える方へも行き、アラビアの岸の見える方へも行つた。白く黄ばんだ砂まじりの土の上に、駱駝を牽いて來て休んでゐる土人の影も見て行つた。不思議にも日はそれほど熱くなかつた。ある船着場まで行つた。丁度國の方で春先の摘草にでも行く頃の日あたりをそこに見つけた。ある船着場まで行つた。綿のやうに浮かんで居る白い雲の形までが、何となく故國の方の空に似て來た。船がポートセッドへ行つて着いた頃は、もう一度私は離れて來た國の方の氣候にめぐりあつた。(海へ)



海

佐々木信綱
文學博士。明
治五年生。

松阪 三重縣
飯南郡。

本居舜庵 名
は宣長。鈴の
屋と號す。國
學者。享和元
年(二四六一)
歿、年七十二。

岡部先生 名
は眞淵。縣居
と號す。國學
者。明和六年
(二四二九)
歿、年七十三。

一五 燈 火

佐々木 信綱

時は夏の半ば、いやとこそせとのどやかに唄ひ連れゆく御伊勢
参りの群も春先程には騒がしからぬ、伊勢松阪なる日野町の西
側、古本の老舗柏屋兵助の店先に、「御免」といつて腰をかけたのは
本居舜庵といふ魚町の年若い小兒科醫であつた。醫師を業とは
してゐるものの名は宣長といつて、皇國學くわこくがくの書かみやら、漢籍やらを
常に買ふ、この店の常華客であるから、主人は笑ましげに出迎へ
たが、手をうつて、「あゝ、残念なことをしなされた。あなたがよく名
前をいつておいてになる江戸の岡部先生が、今の先、若いお弟子
と供を連れてお立寄りになつたに。」といふ。舜庵はいつものゆつ
くりした調子とは違つて、「先生がどうして此處へ。」とあわたゞし
く問ふ。

田安様 田安宗武。徳川吉宗の二子。國學を好み、歌をよくす。明和八年(二四三一)歿、年五十七。

垣鼻村 現在三重縣飯南郡松阪町。

二見が浦 三重縣度會郡。日和見山 三重縣志摩郡鳥羽町の西北にある丘。名勝。

主人は、何でも田安様の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸途に參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつたところ、少しお足に浮腫けづみが出たとやらで御逗留。今朝はもうお宜しいので、御出立の途中、何か古い本は無いかと、暫くお休みになつて、參宮にお出かけになりました。[舜庵、それは残念なことである。どうかしてお目にかゝりたいが。]跡を追うてお出でなされませ、追付けませう。」と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聴取つて跡を追うた。

跡を追うて、松阪の市街を離れ、次の宿なる垣鼻村かきばなの先まで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すこすご我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衛士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松阪の本陣新上屋に宿つた。若

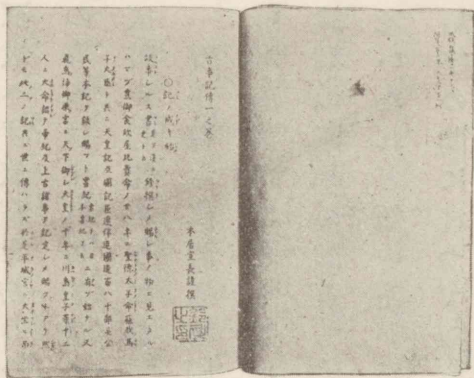
春郷 江戸の歌人。明和五年(二四二八)歿、年三十。春海 織錦齋又琴後翁と號し、歌文を能くす。文化八年(二四七二)歿、年六十六。冠辭考 枕詞を集め、五十音順に配列して、各箇に註釋説明を加へたるもの。萬葉考 萬葉集の卷一・卷二・卷三・卷十一・卷十二・卷十四の六卷を註したるもの。有徳公 八代將軍徳川吉宗の諡。契沖 大阪の

し歸途に又泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」と頼んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛りで、早くも別室にくつろいでゐた。衛士は仄暗い行燈の下に於て舜庵を引見した。賀茂縣主眞淵、通稱岡部衛士は、當年六十七歳、その大著なる冠辭考、萬葉考なども既に成り、將軍有徳公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、其の名噴々たる一世の老大家である。年老いたれど、頗ゆたかな此の老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸はなつてゐる才氣を溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年、而も彼は二十三歳の時京都に遊學して醫學を學び、二十八歳にして松阪に歸つて醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深

僧、圓珠庵と
號す。國學者。
元祿十四年
(二三六一)
歿、年六十二。

かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。老學者



宣長筆古事記傳

は若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた。我も固より神典を解きあきらめんと志であつたが、それにはまづ漢意（かろこころ）を清く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の詞を得た上でなければならぬ。古の詞を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故自分は専ら萬葉を明らめて居た間に、かくも年老いて、殘の齡いくばくも無くなつてしまつた。御身は年盛でゆくさきが長いから、怠らず勉めさへ

すれば、必ず成し遂げられるであらう。併し世の學に志す者はとかく低いところを経ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出来ぬのである。此の旨を忘れず、心にしめて、まづ低いところをよく固めて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆鎖され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道のいづこを踏むとも覺えず、中町の通りを西に折れ、魚町の東側なる我が家の潜り戸を這入つた。鄰家たる桶屋の主人は律義者で、いつも遅くまで夜なべをして居る。今夜もとんとんと桶の籜を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

舜庵はその後江戸に便りを求め、その翌年の正月、村田傳藏が

村田傳藏 眞
淵の門人。坂
大學の通稱。

寶曆十三年
後櫻町天皇の
御代(二四二
三)

中にはひつて、名簿を捧げ、うけひごとをしるして、縣居の門人録に名を列ねる一人となつた。爾來松阪と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答へた。門人とはいへ、その相會うたことは僅かに一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯南郡松阪中町なる新上屋の行燈の光は、かく相語つた老學者と若人とを照らした。而もその仄暗い燈火は、わが國文學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。(賀茂眞淵と本居宣長)

神風の伊勢の海による波の、とこしへにかく

しもがと、はろばろにをろがみて、わがたのみ

仕へまつりし、賀茂のうし、そのうしはや。

宣長

一六 玉勝間鈔

本居宣長

玉勝間 十五
卷。本居宣長
の隨筆。
本居宣長 國
學者。鈴屋と
號す。賀茂眞
淵の門人。享
和元年(二四
六一)歿、年七
十二。

近き世學問の道開けて、大かた萬づのとりまかなひ、さとく、賢くなりぬるから、とりどりに新たなる説を出す人多く、その説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、いまだよくも整はぬほどより、われ劣らじと世に異なる珍らしき説を出して人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。その中には、随分によろしきことも稀には出でくめれど、大方いまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらむ、勝たむの心にて、かろがろしく、前後しりをもよく考へ合はさず、思ひよれる儘に打出づる故に、多くはなかなかなるいみじき僻事のみなり。

すべて新たなる説を出すはいと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よく確なるよりどころをとらへ、いづくまでもゆき通

りて、たがふところなく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、ほど経て後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

おのれいしへん古典を解くに、師の説とたがへる事多く、師の説のわろきことあるをばわきまへいふ事も多かるを、いとあるまじき事と思ふ人多かめれど、これ即ちわが師の心にて、常に教へられしは、後によき考への出てきたらむには、必ずしも師の説にたがふとてな憚りそ。となむ教へられし。こはいとたふとき教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。

大かた古を考ふること、さらに一人二人の力もて悉くあきらめつくすべくもあらず。又よき人の説ならむからに、多くの中に

は誤もなどかなからむ。必ずわろき事もまじらてはえあらず。そのおのが心には、今は古の心悉く明かなり、これをおきてはあるべくもあらずとおもひ定めたることも、おもひの外に又人のことなるよき考へも出てくるわざなり。あまたの年を経るまに、まに、さきざきの考へのうへをなほよく考へきはむるからに、つぎつぎに詳しくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、かならず泥み守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるに舊きを守るは、學問の道にはいふかひなきわざなり。

又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いとも畏くはあれど、それもいはざれば、世の學者その説に惑ひて、長くよきを知る期なし。師の説なりとして、わろきを知りながらいはず、包みかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み、古を思ひて、ひたぶるに道の

明かならむことを思ひ、古の意の明かならむことをむねと思ふが故に、私に師を尊むことわりの缺けむことをば、えしも願みざることあるを、なほわろしと譏らむ人は譏りてよ。そは詮方なし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ、古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これ即ちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。

そはいかにもあれ、吾にしたがひて物學ばむ輩も、わが後に又よき考へのいできたらむには、必ずわが説にな泥みそ。わがあしき故をいひて、よき考へをひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明かにせむとなれば、かにもかくにも、道を明かにせむぞ、吾を用ふるには有りける。道を思はて徒らにわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

物學ぶともがら、物知り人にあひて物問ふに、ともすれば、まづ古書の中にもよに難き事として、誰も説き得ぬふしをえり出でて問ふならひなり。難きことをまづ明らめまほしく思ふも學者のなべての心なれども、然らば易き事どもは皆よく明らめ知れるかと試むれば、いと易き事どもをだに未だえよくもわきまへず。さるもの、さし越えてまづ難きふしを明らめむとするは、いとあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて心もとめぬこと、に、思ひの外なる僻心得の多かるものなれば、まづたやすき事を幾度もかへさひ考へ、問ひも明らめて、よく得たらむ後にこそ難きふしをば思ひかくべきわざなれ。

よろづよりも、手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ、學問などする人は、ことに手悪しくては心おとりのせらるゝを、それ何

かは苦しからむといふも、一わたりことわりはさることながら、
なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。

宣長いと拙くて、常に筆とるたびに、いと口惜しういふかひな
くおぼゆるを、人の請ふまゝに、面なく短冊一ひらなどかき出
て見るにも、我ながらだにいとかたはに見苦しう、かたくななる
を、人いかに見るらむと恥づかしく胸痛くて、若かりしほどにな
どて手習はせざりけむと、いみじうくやしくなむ。

昨日は今日のむかしにて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の
中をつくづくと思へば、あはれわが世もいくほどぞや。手を折り
てかぞふれば、はやみそぢにもあまりにけり。命長くて七十八十
生けらむにだに、早くなかばは過ぎぬるよと思へば、まだ世ごも
れるやうなる身も、ゆくさきほどなきこゝちのして心ほそくぞ

おぼゆる。かくのみはかなく、こゝろなき木草鳥けだもののおな
じつらに、なにすとしもなくあかし暮しつゝ、生けるかぎりの世
をつくして、いたづらに苔の下に朽ちはてなむはいとくちをし
く、いふかひなかるべきことと思ふにも、よろづにいたりすくな
くつたなき身にしあれば、何事をし出でてかは世の人にもかず
まへられ、なからむ後の世、朽ちせぬ名をだにとゞめましと、いと
ど人に似ぬおろかさへ取りそへてぞ、かなしくこゝろ憂かり
ける。さりとはた身をえうなきものにはふらかしはつべきに
しもあらず。かくのみつたなくおろかなるこゝろながら、何わざ
にまれおこたりなく、わざと心に入れてつとめたらむには、つひ
にはひとつゆゑづけて、なのめにし出づるふしもなどかはな
らむと、あいなのだのみにかゝりてなむ。

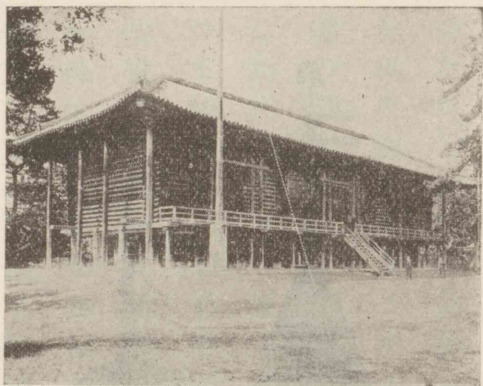
一七 正倉院

藤代 禎輔

藤代禎輔 文學博士。昭和二年歿。年六十一。
正倉院 木造の倉庫。大佛殿の北。聖武天皇の御遺物。其他の貴重物品を蔵む。御蟲干は現在に多く十一月に行はる。
興福寺 法相宗の本山。奈良市公園の地内にあり。
猿澤の池 興福寺の南崖下にあり。
春日神社 官幣大社。春日野にあり。
手向山八幡宮 東大寺の鎮守神。同寺の東約五五〇米。

秋十月、正倉院の御蟲干で、御物の拜觀が出来ると聞いて出掛けた。京都からなら、日歸りて樂に行けるのであるが、少し外にも見物したい所もある。前日から行つて一晩泊ることにした。夜、奈良の町を歩いて見ると、至極靜かだ。對山樓から興福寺を抜けて、猿澤の池へ出るまで、人一人にも出遇はぬ。鹿の聲が聞えるかと耳を澄まして居たが、どうした譯か、毫も聞えなかつた。翌朝五時半に起出て、春日の森を散步した。すると、今朝は鹿の聲が彼方此方であらう程聞えた。春日神社は修繕中で中に這入れないから、玉垣の外から遙拜し、手向山八幡宮、三月堂、二月堂、鐘樓、大佛殿と順次に見物して、一先づ旅宿に歸り、朝餉を濟ませてから正倉院に出向いた。

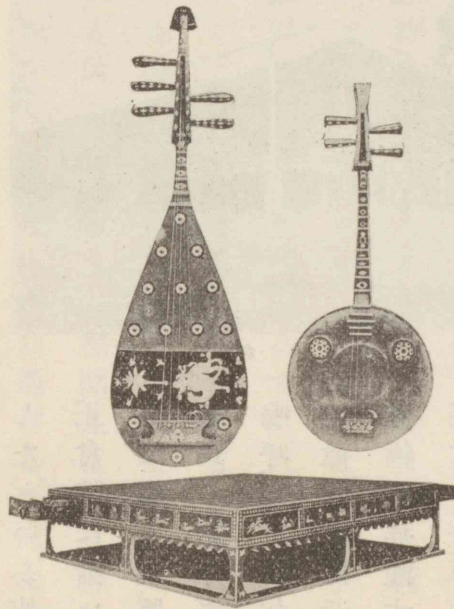
三月堂 東大寺所屬の堂。額索院又は法華堂等と呼ぶ。
二月堂 三月堂の背後にある。
鐘樓 東大寺の鐘樓。
大佛殿 東大寺の本堂。本尊の大佛（盧舍那佛）を安置す。
轉害門 一に碾礮門に作る。東大寺の北西隅の門。
某將軍 陸軍大將乃木希典。



正倉院

平城舊都一條大路に當る轉害門、又の名景清門を抜けて、大佛供養の時、惡七兵衛景清が此の門に潛んで、將軍賴朝を討たうとしたといふ傳説を思ひ出し、間もなく正倉院に着いて控室に上ると、雷名四海に轟く某將軍が來て居られる。博物館長の紹介で、將軍に名のりを揚げる。嗚呼、今日は如何なる吉日ぞ。此の世界の偉人と御近附になり、驥尾に附して御物を拜觀するの榮を得るとは。頓て係官の先導で拜觀を始めた。先づ立派に螺鈿の裝飾を施した琵琶、阮咸等の樂器を見て、細工の精巧に一驚を喫し、聖武天皇御使用の仕込杖と聽いて、千二百年前に此の工夫があり、而も現今の物に優るとも劣るまじき装置に再

驚を喫した。將軍は此の仕込杖に深き興味を寄せられ石突の工合に注意し、刀身の諸刃なるか、片刃なるかを確め、銘の有無、目貫の孔の數を質し、柄に鮫皮が用ひてあると聽き、當時の工藝の進歩に驚かれる様であつた。それから蒔繪の碁盤、硬玉及び赤珊瑚の碁石、鳥毛屏風の下繪等何れ目を驚かさぬ物は無いが、取分け金銀珠玉を鏤めた鏡類の燦爛目を奪ふ立派さ、見事さ、中にも一面七寶の裝飾を加へた鏡は外國人が垂涎を禁ずる能はざる世界の逸品であるさうだ。

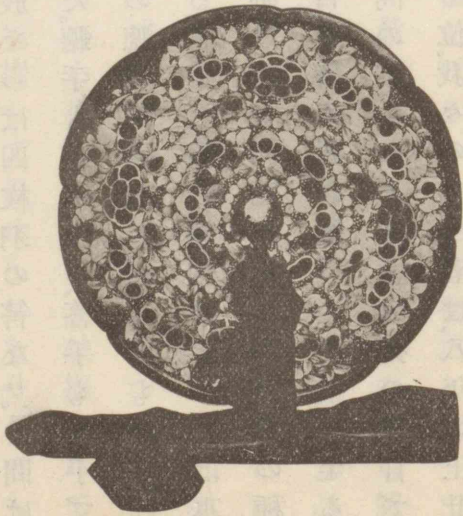


碁盤・碁石・碁

惠美押勝 藤原仲磨の第二子。天平寶字八年(一四二四)叛し、官軍の爲に斬らる、年五十九。

天平時代 聖武・孝謙・淳

聖武天皇の御寢臺は、長さと言ひ、幅と言ひ、實に大きな物であるが、將軍は委しく其の寸法を測つて居られた。中倉の二階であつたか、刀劍、弓矢、槍戟の類が澤山ある。是は惠美押勝の亂に用ひられた物であるとか云ふ。普通の觀覽者は一通り目を通しただけでさつさと過ぎ去つて仕舞ふのであるが、將軍は職掌がら特に綿密な注意を拂はれた。先づ長槍の柄の卷方、石突の工合を仔細に點檢され、刀劍類の細部を逐一取調べて、後世今日に至るまでの種類は、天平時代に一も缺けて居ない。」と語られて、それから弓矢に就いては、矢の羽根は二枚か。

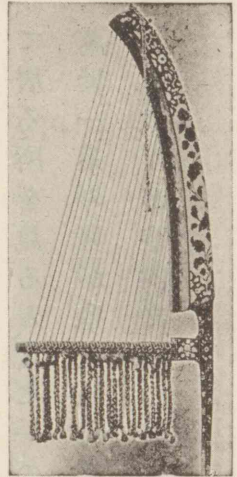


鏡 角 八

仁・稱徳の四
天皇の御代に
天平二十年、
天平感實一
年、天平勝賢
八年、天平賢
字八年、天平
神護二年あ
り。これを總
稱して天平時
代といふ。(一
三八九—一四
二六)

と問はれ、三枚のも、其の他如何なる種類のもあり、鏑矢までも備
つてゐる。」と係官は答へる。矢の根も總べての種類があると聽い
て、雁股の矢の根があるか、雁股ならば四枚羽の筈なり。」と問はれ、
係官は何れも然る旨を答へた。聽手も聽手なら、答手も答手で、此
の故實上の問答は實に意外の聽物で、傍聽の我々どもは思はぬ
新知識を授けられたのである。將軍の用意周到なることは、専門
の武具馬具に限らず、何事に懸けても非凡であつて、錠前の種類、
唐櫃の蓋の厚みに至るまで目を留められ、經筒の構造に至るま
で、細密な觀察を遂げ、其の質問の細かいこと、並大抵の係官では
答辯に困るだらうと思はれる位、我々の先導者は、八年以上此の
御蟲干のため、東京から年々出張すると云ふ老練家であるから、
如何なる質問に逢つても淀みなく答へるので、聽いて居ても心
持が好かつた。

次に箜篌と云ふ樂器は、西洋の豎琴に似たものであるとかね
て聞いて居たから、特別の興味を以て迎へたのであるが、何様餘
程珍らしいもので、支那人が此の箜篌や阮咸を見て、是等の樂器
は書物の上で見るばかり、實物を見るのは今が初だと云つて感



箜篌

歎するさうである。此の外、東羅馬
帝國の遺物と云はれる玉・水晶乃
至玻璃の器具や、唐櫃の外部にあ
る密陀繪の如きは、是亦全世界に
類の無い逸品ださうで、西洋の博物館に此の類があつても、何れ
も土中から發掘した品であるから、見る影もなく破損されて居
るが、正倉院の御物は之を一つ取出して見せられたら、とても千
年以上の星霜を経たものとは思はれぬほど鮮かた、艶やかな品
である。最も不思議に思はれるのは、矢竹や、筆の軸に毫も蟲喰の

跡がなく、料紙も天平時代の物が今新しく漉上げたばかりと思はれる有様に保存せられて居ることである。これは奈良の土地が乾燥してゐるのと、校倉の構造が宜しいのと、手入の行届くためであるには相違ないが、一時は随分投遣りにせられて、乞食が縁の下で焚火をしたと云ふ噂もあるし、落雷の痕も歴々と存して居る所を見ると、實に一の奇蹟である。是も偏に世界に無比な萬世一系の我が皇室の御稜威の彌高きを示すものであつて、是こそ我々が宇内に向つて誇り得る一大寶庫である。

(文藝と人生)

菊の香や奈良には古き佛達 芭蕉

一八 斑鳩の宮

三 木 露 風

やまとの國

上宮王の

ましましし斑鳩の宮、

青葉して夏は今さかりなり。

古きこのあとどころ、

我は立ちむかししのべば、

三木露風 名
は操。曾て羅
風と號す。詩
人。明治二十
二年生。
上宮王 聖德
太子。
斑鳩の宮 推
古天皇の九年
(一二六一)太
子之を營む。

日出づる處の
推古天皇の十
五年、太子攝
政中、小野妹
子を隋に遣は
す。その國書
の冒頭の句。

白き日のかぎろひ照れる中に
まぼろし青し。

まだ稚き若草の文明日本に
吹きめぐる西域のかをりは、
やはらかき詩の佛陀を
金色にただよはせぬ。

「日出づる處の天子、
日没する處の天子に
書を致す。」と

かの太子は宣らす、おごそかに國使をして。

覺あき弼きや慧え慈じ等の聖徒は
衣ころもをかひかつて來きり、
藝げ術じゆつ興おこり、文ぶん明めいすすみ、
憲けん法ぽう十じゆ七しち條じょう、民たみをみんを導みちかずす。

美うつくしき法ぽう隆りゆう寺じは
千せん三さん百ひゃく餘り年ねんの昔むかしに建たちけらし。
鳴な呼こ、巨こほいなる日ひ本ほんのこころを示しす
僧そう伽が藍らん摩ま。

覺弼 五經博士。太子就いて儒教を學ぶ。
慧慈 高麗の僧。推古天皇の三年歸化す。太子の佛教の師。
憲法十七條 推古天皇の十二年、太子の制作。
法隆寺 また斑鳩寺ともいふ。推古天皇の十五年太子の建立。

相良徳三 成
城高等學校教
授。
Franco's Millet ミレ
(1814-1875) フラン
スの畫
家。

見つつ我が
涙をながす、
東天の菩薩太子、
君がせし功績のあとを。

やまとの國
上宮王の
ましましし斑鳩の宮、
青葉して夏は今さかりなり。(青き樹かけ)

一九 ミレ
相良徳三

ミレといふ名をきく時、人々は恐らくすぐに「落穂拾ひ」や「ア
ンジェラスの鐘」を思ひ浮かべるであらう。それについて又「樵婦」
や「牧女」や「鋤を持つ人」などの素描をも思ひ出すであらう。そして
それらの作品が、何れも農村生活を主題としたものである事に
氣付く時、一體ミレは單なる農村の生活ばかりを描いた畫家
であらうかといふ疑問を起す人があるかも知れない。

一言にしていへば、ミレは農夫の畫家であつた。彼は或時期
に神話畫肖像畫裸體畫等を描かないではなかつたが、その他は
常に農村の生活だけを描いた。農村の生活は實に彼の作品の全
部を掩ふところの主題である。そして農村の生活を描いた所に、
繪畫史上に於ける彼獨特の地位もあり、また彼の人間としての



鐘のストラエジニア

かれてゐる。従つて其處に住む農夫も、純情にして高潔、些の汚れも悶えも知らない人々として描かれなければならなかつた。

偉さも存在すると云つても間違ではないであらう。云ふ迄もなく、農村の生活をかいた畫家は、決してミレに限つたわけでもなく、又ミレに始つたことでもない。既に十七世紀のオランダの畫家の中にも、農夫をかいた人々があつた。けれども、彼等のかいた農夫は次の二種類の何れかであつた。即ち一は、都會人らしい、知識的な容貌態度を持つた農夫で、若し彼等が百姓服を着て居らず、農具を持つてゐないならば、恐らく教養ある都會人と間違へられるやうな農夫であり、もう一つは、勞働してゐる農夫ではなくて、酒に酔つた農夫、大食してゐる農夫、おどけてゐる農夫、人々に



拾穂落

このやうな農村、このやうな農夫が單に空想に過ぎないことは、此處に改めて云ふ迄もあるまい。農村の生活は、古くはギリシヤの詩人ヘシオドスが既に「勞作」の中に歌つたやうに、又近くは農村問題の事實がそれを表明してゐるやうに、實に勞苦に充ちたものである。農夫は朝から晩迄働き通さなければならぬ。さうしなければ、彼等は生きて行かれないのである。それが彼等の運命なのである。實に働くことは農夫の生活そのものであり、農村の生活の本質であると云つても差支ないであらう。

「働く農夫」これこそミレーが發見した主題である。この點に於て、吾々はミレーを眞の農夫の發見者と呼んでも好いと思ふ。彼の描いた農夫達がどんなに精一杯に働いてゐるか。例へば鳥の群に跡をつけられながら種子を蒔いてゐる「種子を蒔く人」、鋤にもたれてほつと息をついてゐる「鋤を持つ人」、自分の體の何倍も

ある大きな薪を背負つて、その重みのために體を二つに折り曲げてゐる「樵婦」、その他「土を掘る人」、「乾草を集める人」、「海藻拾ひ」等を透して、ミレーを考へたい。

然し吾々はミレーを單に農夫の發見者としてだけ考へるも



樵

婦

のではない。それだけでも繪畫史上に於ける彼の位置は際立つたものであらうが、吾々は彼の藝術にもつと深い意味を見出すものである。彼は單に農夫、眞の農夫の生活を描いたばかりでなく、農夫の中に「人間」を見出してゐる。人間に普遍的な、そして絶對的な價值を描いてゐる。吾々が専門的な繪畫史的興味を離れてもミレーを尊敬することが出来るのは、それが爲である。

ミレーに描かれた農夫達が何れも運命に堪へながら働いてゐる事は、既に述べた通りである。この事は直ちに、彼等が單に農夫としてでなく、人間として描かれてゐることの有力な暗示である。私は多くのミレー讚美者のやうに、彼等は百姓服を着けた受難者である。と叫ぼうとは思はないが、然し少くとも彼等の中に、人間にとつて本質的なものを感じることは確だと思ふ。私は額に汗して働くのは人類の運命であるが故にミレーの農夫がよく運命に堪へたのであるか如何かは知らないが、然し單に農夫であり、平凡人であるに過ぎない彼等が、苦痛の中に、生きんがための仕事の中に、ある喜を感じてゐることは看取される。その喜が多分彼等の苦痛を和げたであらう。ミレー自身も云つてゐる。この地方では到る處の畑地に於て、これ等の人々が土を耕し、掘つてゐるのを見るであらう。そして彼等は時々腰をのばして、

手の甲で額の汗を拭くのである。汝の額に汗して汝のパンを食ふべし。これが果して幸福と歡喜の勞働であらうかと世人は疑ふであらう。然し私はその中にこそ、眞の人間性と偉大な詩が潜んでゐるのを見るのである。と。ロマン・ローランが云つてゐるやうに、ミレーに取つては、人間の苦痛は必然的なものである。従つてそれは眞實である。眞實である故に、それは喜——嚴肅な喜——であつた。この嚴肅な喜の爲に、ミレーの農夫達は、苦しい運命に堪へることが出來たのである。

この考を更に確めるやうに見えるのは、前にも擧げた農夫の生活の幸福な側面に關した幾つかの作品である。私はそれを「幸福な」と云ふ。然しその幸福とは、云ふ迄もなく普通の意味に於ける農村生活の幸福ではない。勞働を愉快なもの、一種の舞踏に類するものとして考へる人々のいふやうな幸福ではない。ミレー

の幸福は人生の苦痛を通して、少くとも苦痛に關聯して感じられるやうな、しみじみとした幸福である。ミレーは云つてゐる。『子供達に食べさせる女』を見る人は、子供達に食べさせる物を得る爲には、彼等の父は働いたのであることを考へてほしい。』と。それ故にこそミレーは、小さな子供を胸に抱いてゐる、子供をあやす若い母親をかき、病兒を氣遣つて、心配さうに戸口に立つてゐる若い父親をかいたのである。更に彼は、水を汲む女』についても、私は單なる水を汲む女、若しくは女中を描かうとしたのではない。子供達に食べさせるスーブを拵へるために水を汲んで來る母性を描かうとしたのである。』と云つてゐる。彼が幸福な生活を描いたのは、唯それが愉快で愛すべきものである爲ではなく、それが人間の本質の要求だからである。彼の作品から嚴肅な何物かが感じられるのは、全くそれが爲である。(ミレー)

仁王

夏目漱石

運慶が護國寺の山門で仁王を刻んで居るといふ評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集つて、頻りに下馬評をやつて居た。

山門の前五六間の所には大きな赤松があつて、其の幹が斜に山門の蔓を隠して、遠い青空まで伸びて居る。松の緑と朱塗の門とが、互に照り合つて見事に見える。其の上、松の位置が好い。門の左の端を、眼障りにならないやうに斜に切つて行つて、上になるほど幅を廣く、屋根までつき出して居るのが、何となく古風である。鎌倉時代とも思はれる。

ところが、見て居るものはみんな自分と同じく明治の人間である。其の中でも車夫が一番多い。辻待をして退屈だから立つて

夏目漱石 名
は金之助。大
正五年歿、年
五十。
運慶 鎌倉時
代の有名なる
佛師。歿年不
詳。
護國寺 眞言
宗。東京市小
石川區大塚坂
下町。
仁王 山門の
守護神。

居るに相違ない。

「大きなもんだなあ。」

と言つて居る。

「随分骨が折れるだらう。」

とも言つて居る。さうかと思ふと、

「へえ、仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえさうかね。私やま

た仁王はみんな古いのばかりかと思つてた。」

と言つた男がある。

「どうも強さうですね。なんだつてえまずぜ。昔から誰が強いつ

て、仁王ほど強い人あ無いつていひますぜ。何でも日本武尊よ

りも強いんだつてえからね。」

と話しかけた男もある。この男は尻を端折つて、帽子を被らずに

居た。よほど無教育な男と見える。

運慶は、見物人の評判には委細頓着なく鑿と槌を動かして居る。一向振向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の邊を頻りに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子のやうなものを載せて、素袍だか何だか分らない大きな袖を背中に括つて居る。その様子がいかにも古臭い。わいわい言つてる見物人とはまるで釣合が取れないやうである。自分はどうして今時分まで運慶が生きて居るのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだ。と考へながら、やはり立つて見て居た。

然し運慶の方では、不思議とも奇態とも頓と感じ得ない様子で、一所懸命に彫つて居る。仰向いてこの態度を眺めて居た一人の若い男が、自分の方を振向いて、

「流石は運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はたゞ仁王と

我とあるのみだといふ態度だ。天晴だ。」

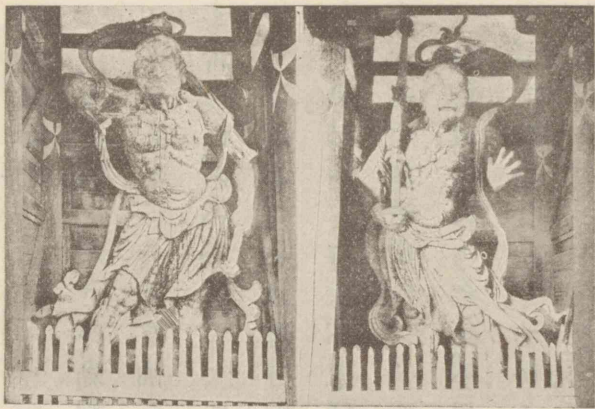
と言つて褒めだした。

自分はこの言葉を、面白いと思つた。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男はすかさず、

「あの鑿と槌の使ひ方を見給へ。大自在の妙境に達して居る。」

と言つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の齒を豎に返すや否や、斜に上から槌を打ち下した。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の聲に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面が忽ち浮上つて來た。



(門大南寺大東良奈)王仁作慶快左慶運右

その刀の入れ方が、いかにも無遠慮であつた。さうして少しも疑念を挟んで居ないやうに見えた。

「能くあゝ無造作に鑿を使つて、思ふやうな眉や鼻が出来るものだな。」

と、自分はあるまり感心したから獨言のやうにいつた。するとさつきの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まつてゐるのを、鑿と槌の力で掘出すまでだ。まるで土の中から石を掘出すやうなものだから、決して間違ふ筈はない。」

と言つた。

自分は此の時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。果してさうなら、誰にでも出来る事だと思ひ出した。それで急に自

分も仁王が彫つて見たくなつたから、見物をやめて家へ歸つた。道具箱から鑿と金槌を持出して、裏へ出て見ると、先達ての暴風で倒れた檜を、薪にする積りて木挽に挽かせた手頃な奴が、澤山積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢よく彫り始めて見たが、不幸にして仁王は見當らなかつた。その次のにも運悪く掘當てる事が出来なかつた。三番目のにも仁王は居なかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つて見たが、どれもこれも仁王を藏して居るのはなかつた。遂に明治の木には到底仁王は埋まつて居ないものだと思つた。それで運慶が今日まで生きて居る理由もほぼ解つた。(漱石全集)

二時 雨

沼波瓊音

沼波瓊音 名は武大、昭和二年歿、年五十一。
十一日 元祿七年(二三五四)十月、芭蕉病歿の前日。
仁左衛門 大阪、御堂前南久太郎町、花屋仁左衛門。芭蕉はその裏座敷に病臥せるなり。
其角 江戸の俳人。芭蕉門下。寶永四年(二三六七)歿年四十七。
惟然 美濃の人。芭蕉門下。正徳五年(二三七五)歿。
支考 美濃の人。芭蕉門下。享保十六年。

十一日の朝も時雨が通つた。「此方でござりまする。」と仁左衛門の聲、つゞいて飛石を踏む雪駄の音。「や、どうも御手数をかけました。」といふ思ひもかけない其角の聲に、惟然支考・丈草・去來等争つて縁に出て、「これはどうして」と異口同音に尋ねた。丈短かな淺黄の羽織に子持縞の重ね着、肥つて活々した其角の姿は、滅入り切つた連衆の心をそゞろに引立たせた。

其角は「御免下され。」と、皆に挨拶もそこそこに、直ぐに病床に通つた。そして芭蕉を一目見るなり、ぎよつとして一言も口が利けなかつた。彼は今年の五月八日に品川まで見送つた一人であつ

(二三九) 歿年六十七。
丈草 尾張の人、後栗津に住す。寶永元年(二三六四)歿、年四十五。
去來 京都に住す。芭蕉門下。寶永元年歿、年五十四。

た。其の時の芭蕉はえらい元氣であつたのに、皮骨連立したこの姿は……。彼は二目と見得ず、俯向いて坐つてゐた。芭蕉も一言も言ひ得なかつた。凹んだ眼からは只涙が流れた。

丈草が見かねて、其角の袖を引いて次の間へ呼んだ。其角は改めて一同に挨拶をした。五人連で伊勢參宮をして、それから和州・紀州・泉州と遊び歩いて、昨夜難波に着くと老師重病との噂、それから直ぐに方々問合はせた末、やつと今朝になつて御堂前と知れて、連に別れ、駕籠を飛ばして來たのだと物語つた。

皆が交る交る今までの経過を話した。それでは到底助かる見込はない。老師はこゝで終焉であらう。然し風流の一生を完成して、徳化洽く、斯く多數の門弟に圍繞されて果てられる、まことに有り難い尊い事だと、其角は師の爲に大きな満足を感じた。この満足な感じは、不知不識の間に皆も持つやうになつてゐた。突詰

め差迫つた後に、今は安靜な氣がこの花屋の裏座敷に満ちわたるやうにさへ覺えた。

「大變御機嫌が宜しうなりました。皆様にこちらへおいでになるやうに。」

と吞舟が云つて來た。其角が先に立つて、皆々病室に入つた。其角は改めて師にこゝへ來た迄の旅行の話などした。

芭蕉は珍らしく起きてみると云つて、背後から次郎兵衛に支へられ、前に脇息を力に坐つて、さも嬉しさうに弟子達の話に耳を傾けた。しかし直ぐに疲れて、又横になつた。芭蕉の心には、もう煩悶も何もなかつた。妄執だとか、妄執でないとか、そんなことを忘れて、心は春の様に風ぎわたつた。

靜かな落着いた日であつた。芭蕉はよくすやすやと寝た。「粥が食ひたうなつた。」

吞舟 大津の人。蕉門。

次郎兵衛 伊賀の人。蕉門。

朔日 十月朔
日。九月二十
九日發病。

夜に入つてから、突然芭蕉がかう云つた時、一同の喜は飛立つばかりであつた。次郎兵衛は早速勝手へ行つて、いそいそと粥を作つて進めた。さも旨さうに中嵩椀で食べた。朔日以来の食事であつた。土鍋の中に残つたのを、去來は椀にうつして、押しいたゞいて食べた。そして、ふと、

病中のあまりすゝりて冬ごもり

と云ふ句が出来た。それから去來が、一つ師を慰め申すために、深く案じ入らずと、頓に句を作らうては無いかと發議した。

「すでに出來合ひがあります。」

と惟然が云つて、丈草と二人笑ひ合ひながら書きつけたのを見ると、

ひつ張りて蒲團に寒き笑ひ哉

惟然

思ひよる夜伽もしたし冬籠り

正秀

正秀 大津の
俳人。芭蕉門
下。

と云ふのであつた。

「昨夜は正秀と二人で寝たところが、寒かつたものだから、一枚の蒲團を互にあつちへ引張り、こつちへ引張つて、到頭夜明まで落着いて寝られなかつた。」

と惟然が大きな聲で説明をした。皆どつと笑つた。芭蕉も笑つた。人々はそれを見て限りなく嬉しく思つた。

くじ取りて菜飯たたかす夜伽かな

木節

皆子なり蓑蟲寒くなき盡くす

乙州

うづくまる薬のものと寒さ哉

丈草

吹井より鶴を招かむ初時雨

其角

こんな句が集つた。それを一々惟然が師の側へ行つて吟聲した。丈草の句をもう一度と芭蕉が望んだ。

うづくまる薬のものと寒さ哉

木節 大津の
人。蕉門。醫
を業とす。
乙州 大津の
人。蕉門。

と又惟然が吟じた。

「丈草でかされた。いつ聞いても寂榮が調うて居る。面白い、面白い。」

と噎れた聲で芭蕉は譽めた。

いつに無く上機嫌な師の様子に、皆の心には本復されるかも知れぬといふ望が光つた。其角は木節の様子を見た。木節は獨り愁然としてゐた。それとなく其角は木節を一間へ呼んで、どうであらうと訊いた。

「いけません、とてもいけません。あの大病で、絶食の後俄かに食が進んだり、氣分が宜うなることのあるのは、もう先のない兆で御座ります。」

と木節は答へた。成る程と其角も思つた。病室では笑ひ交りに賑やかな聲が聞えてゐた。(芭蕉の臨終)

三 みとり日記

小林 一茶

小林一茶 俳人。信濃の人。通稱彌太郎。俳諧寺と號す。文政十年(二四八七)歿、年六十五。六日 享和元年(二四六一)五月。一茶時に年三十九。

六日。天晴れたれば、臥してばかりも退屈にや思ひめさんと、夜着うち疊みて寄り懸らせ申したるに、來し方の物語など始め給ひけり。抑、汝は三歳の時母に後れや、長くるにつけても、後の母との中睦まじからず。爲に日々夜々魂を痛め、心の安き時とはなかりき。ふと思ひけるやうは、一緒にありなばいつまでもかくありなん。一度故郷を離れたらんには、自然親慕はしき事もやあらんと、十四歳といふ春、はるばる江戸へとは赴かせたりき。あれ餘所の親は、今三とせ四とせ過ぎたらんには家を任せ、汝にも安堵せさせ、我等も行末を樂しむべきに、年はもゆかぬ瘦骨に荒奉公せさせしを、つれなき親とも思ひしならん。皆これ宿世の因縁と諦めよや。我も一たびは江戸に立越えて汝にめぐり逢ひ、相

五逆罪 佛語
一に父を殺し、二に母を殺し、三に阿羅漢を殺し、四に佛身より血を流し、五に利合僧を破るをいふ。

果てんにも汝が手を借らんと思ひしに、この度はるばると歸り來れる汝にかゝる看病を受くるこそ、淺からざる縁なれ。今は往生遂げたりとも何の悔かあらん」と、はらはらと涙を落し給ふに、我は唯うち伏して物をもえいはず。夏も消えやらぬ富士の雪より厚く、紅の色より深き父の恩を、側に付き添ふこともならで、唯浮かめる雲の如く、東にあるかと思へば西に漂ひて、はや今年にて二十五年にもなりぬ。頭は白き霜を戴くまで親の側を遠ざかりぬること、五逆罪といふともこれに過ぎなんやと、心に伏し拜み、われ涙を落しなば病いよいよ重らせ給ふべしと、顔おし拭ひてうち笑ひ、さる事に思ひ給はて、はやや快氣なし給へ」と藥をすゝめ、やがて健かになり給はば、我も元の彌太郎となり、草刈り土掘りて御心を安んじ參らすべし。今までの體たらく許させ給へ」といへば、父は限りなく喜び給ひぬ。

身後云々 白
氏文集に「身
後金ヲ堆クシ
テ北斗ヲ柱フ
トモ、生前一
杯ノ酒ニ如カ
ズ」

八日晴。田休みなればとて、所縁あるも所縁なきも聞傳へ語り傳へて、訪ひ來る人も多かり。父が好物なりとて、酒もて來る人もあり、蕎麥粉もて來るもあり。父は喜ばしげに首を擡げ、手を合はせて、ほどほどに會釋し給ひぬ。身後黄金北斗をさゝふとも、如かじ生前一杯の酒と、唐も大和も人の情等しく、亡き後にて佛事供養美々しく盡くしたりとも、存命のうちの優しき言葉にはまさらじ。今は世降りて、他の一寸の歪は咎めて、おのれが一尺のひがみは見えず、萬づうしろめたき勝にて、我が身不孝なりと思へる人だになし。

うけがたき人と生れてなよ竹のすぐなる道に入るよ
しもがな

この夜は子一つの頃より寝られねば、夜長うおほして、まだ夜は明けぬか、鶏の啼かざるか」と我に聞き給ふこと三度、四度、七度、

子一つ 夜の
十二時頃。

鷄の空音 史
記孟嘗君傳に
「昭王、孟嘗
君ヲ釋ス。出
テ、函谷關ニ
至ル。關ノ法
鷄鳴イテ客ヲ
出ス。客ニ鷄
鳴ヲ爲ス者ア
リ、鷄悉ク鳴
ク、是ニ於テ
關ヲ開イテ之
ヲ出ス。」
入日を返す勢
淮南子に「魯
陽公韓ト雖ヲ
構フ、醢醢ニ
シテ方ニ暮ル
戈ヲ授リテ之
ヲ搗ク、日爲
ニ反ルコト三
合。」

牟禮 上水内

九度に及べども、たゞ星あかりのみにして、軒のつまの樅楓の樹
かけ、其處に彼處に暗く、梟の夜更をうたふばかりなり。あはれ鷄
の空音をつくりて關の戸を開きしためしはあれど、火を袋に入
るゝ幻術は知らず、入日を返す勢はたあらねば、たゞ燈火をかゝ
げ寝顔を守りて、空しく天明を待つばかりなり。
十日晴。頻りに梨の實をたうべたしとむづかり給へば、このあ
たりの所縁あるも無きも、親しき限り、富みたる家、心當りある門、
聞き盡くし尋ね探し盡くすといへども、一つだに貯へたる人な
く、夏さへ寂しき山里なり。今日はわけて宣ふなれば、善光寺へ往
きてみると、曉に支度して門を出てけるに、皁月の空ほのぼの晴
れて、白雪はた山にあり。青葉隠れの花は春を殘して、種蒔の山入
など懐かしく、時鳥の一聲もこよなく時めく空なるに、あやしく
心の晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮といふ驛に至る。今は二十

郡牟禮村。
雪中に筍を掘
リ吳志に「孟
宗ノ母筍ヲ嗜
ム、冬節マサ
ニ至ラントシ
テ筍尙ホ未ダ
生ゼズ。宗竹
林ニ入リテ哀
歎ス、筍之ガ
爲ニ出デ、以
テ母ニ供ス。」
氷上に魚を求
め晋書に「王
祥性至孝ナ
リ。繼母朱氏
慈ナラス、而
シテ祥愈々恭
謹ナリ。父母
疾メバ、湯藥必
カズ、湯藥必
ズ親テ生魚ヲ
母管テ生魚ヲ
欲ス、時ニ天
寒ク水凍ル、
將ニ氷ヲ割リ
之ヲ求メント
ス、氷忽チ自
ラ解ケ、雙鯉
躍リ出ヅ。」

四年の昔、われ江戸へ赴きける日、父の見送り給ひし里なれば、川
の音、阪の影も仄かに心覚えありて何となく嬉しけれど、人は知
らぬ顔のみとなりけり。急ぎければ、辰の刻ばかりに善光寺に着
く。醫師の家はまだ朝飯頃と見えて主人の聲も聞えければ、具さ
に病のさまを語りけるに、やがてから櫛の匙取りつゝ、御藥合は
せて給ひたり。抑、この地は御佛の淨土にしあれば、肆は軒をあら
そひ、幌は風に飜り、入る人出づる人、國々よりはるばる歩を運び
て、未來の成佛を願はぬ人なし。おのれは今日父の命を受けて、御
藥づかひ、はた梨さがしに來つるなれば、この役濟まざらんうち
はと、御佛も遙拜して、天を翔り地を潛りてなりとも梨一つ得ま
ほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を足を空にして驅けめ
ぐるに、悲しきはさらに片割一つありといふ人もなし。昔雪中に
筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、皇天我を捨て給ふ

吉田 元は上水内郡吉田村。今長野市の一部。

高田 今の新潟縣高田市。柏原より約八十軒。

みどり日記 又「父終焉日記」ともよばれ、父洲五兵衛の終焉に倚つた作者のいつはらざる手記。

かや、佛神我を見限り給ふかや、一世ばかりの不孝にはあらじ、父はさぞ梨を待ち居給はん、この儘に歸りて父を何とか慰めんと思へば、胸塞がりて、落つる涙は大道を潤すに、往來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、暫く手を組み首をうなだれて、心をぞ静めける。無き物はいかにせん、唯一足も早く戻りて薬を進め奉らんと、手を空しうして吉田といふ里に來つるに、樹立の山鴉三つ四つ、我を見ては聲をたつるに、何となく父の身の上の心にかゝり、息もつきあへず足を早むる程に、日影は八つ時といふ頃宿に戻る。父はいつもより顔うるはしく笑みを含み給ふに、梨の事を語らば又もや氣を落し給はん、とやせんかくやせんとためらふに、父の問ひ聞き給へば、ありのまゝを答へ、高田に往きて求め來り參らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根無し言を申して父を宥め奉りぬるは、いと本意なき夕なりけり。(みどり日記)

吉田兼好 姓卜部氏。歌文をよくす。

初め、宇多上皇に仕へて、左近衛尉たりしが、上皇の崩後出家して風月を友とす。正平五年(一一〇一)歿、年六十八。

物のあはれは春はただ花のひとへにさくばかりもの、あはれは秋ぞまされる。(拾遺集)

花橘は さま待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。(古今集)

灌佛の頃 佛生會、四月八日。

二三 折節のうつりかはり

吉田 兼好

折節の移りかはるこそ、物ごとにあはれなれ、物のあはれは秋こそまされ。と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲など、この外の春めきて、のどやかなる日かげに垣根の草萌出づる頃より、や、春深く霞み渡りて、花もやうやうけしきだつ程こそあれ、折しも雨風打續きて、心慌しく散過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬づに唯心のみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、古のことも立ちかへり戀しう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるもの

祭の頃、賀茂の祭、四月、中の酉の日。

六月祓、罪及び觸穢を除く爲、陰曆六月晦日に行ふ大祓。

源氏物語、式部作の小説。

枕草子、清少納言の隨筆。

思しき事、おぼしき事、おぬはげにぞ腹ふくる、心地しける(大鏡)

御佛名、十二月十九日より三日間、罪障消滅のため、宮中にて僧をして佛名經を讀み、諸佛の名號を唱へしむる佛事。

荷前の使、十二月中の吉日に、諸國よりの貢穀の初穂を十陵八墓に獻ぜらるゝ爲の使。

なれ。五月、菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鶏の叩くなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゝくれば、みな源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じことまた今更にいはいはじともあらず。おぼしき事はぬは腹ふくる業なれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り留まりて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なく

あはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日餘の空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやむごとなき。公事も繁く、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。追儼より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たゝき走りありきて、何事にかあらむことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方より流石に音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ほそけれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそあはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。(徒然草)

二四 名器を毀つ

薄田泣菫

176

薄田泣菫 名は淳介。大阪毎日新聞社社員。明治十年生。
伊達政宗 武將。和歌をよくし又茶事を好めり。寛永十三年(一二九六)歿、年七十二。
利休 千氏。名は宗易。織田信長・豊臣秀吉に仕ふ。茶道千家流の元祖。天正十九年(一二五十一)歿、年七十。
天目 支那建安の天目山の産をはじめとす。日本の禪僧が彼地より持歸りしもの。

伊達政宗があるとき、家に傳へた名物茶碗を取出してゐたことがあつた。

太閤秀吉が自分の好みから、また政略上の方便から煽り立てた茶の湯の流行は、激情と反抗心との持主である奥州の荒くれ男をも捉へて利休の門に弟子入をさせ、時折は爲う事なさの退屈しのぎから、茶器弄りをさへさせるやうになつたのであつた。茶碗は天目だつた。紺青色の釉ゆうのなかに、寶玉のやうな九曜星の美しい花紋が、茶碗の肌一面に光つてゐた。政宗は持前の片眼に磨りつけるやうにして、この窯變りの不思議を貪り眺めてゐたが、ついうつとりとなつたまゝ、危く茶碗を掌面より取落さうとした。

政宗ははつとなつて、覺えず膽を潰した。

「金二千兩もしたもので、ちや、壊してなるものか。」

こんな考へが電光のやうに頭のなかを走つた。仕合せと、茶碗は膝の上で巧く兩手の掌面に抱きとめられてゐた。政宗は冷汗をかいた。胸には高く動悸が鳴つてゐる……

「俺は娘つ子のやうにおつ魂消たな。恥づかしいことぢや。」

政宗はその次の瞬間、さう思つて悔しさに身悶えした。咄嗟の場合、器の値段を思ひ浮かべて胸をどきつかせたのが、何としても堪へられなく厭だつた。

いつだつたか、政宗は徳川家康に茶の饗應を受けたことがあつた。そのをり家康は、湯を汲み出さうとして何心なく釜の蓋へ手をやつた。蓋は火のやうに熱してゐた。あまりの熱さに家康は小兒のやうに、

177

「おう、熱う……。」

と叫んで釜の蓋を取離したかと思ふと、慌ててその手を自分の耳朶へやつた。その様子がいかにも可笑しかつたので、政宗は覺えず、

「うふ……。」

と吹出してしまつた。

家康はそれを聞くと、また氣をとり直して、前よりは熱してゐたらしい釜の蓋を平氣で撮み上げた。そして何事もなかつたやうに、靜かに茶を立てにかゝつた。

政宗は、いつに變らぬ亭主のねばり強さに感心させられたが、それでも腹のなかでは、もしか俺だつたら、初めに手にとり上げたが最後、どんなに熱くたつて釜の蓋を取落すやうな事はしまゝと思つた。

政宗は今それを思ひ出した。あんなに心上りしたことを考へてゐたものが、今の有様はどうだつたかと思ふと、顔から火が出るやうな氣持がした。誰だか知らないが、自分の耳近くにやつて来て、

「うふ……。」

と冷かすやうに吹出したらしい氣配を政宗は感じた。

逆上し易いこの茶人は、かつとなつてしまつた。彼は驚擱みに茶碗を片手にひつ擱んだかと思ふと、いきなりそれを庭石目にかけて叩きつけた。茶碗はけたゝましい音を立てて、粉微塵に碎け散つた。

「は、は、は、……。」

政宗は聲高く笑つた。彼はその瞬間、金二千兩の天目茶碗を失つた代りに、自分の心の落着きをしかと取返すことが出來たや

片桐貞昌 宗
關・能改庵等
と號す。將軍
家綱の茶道の
師範。延寶元
年(一三三三)
歿、年六十九。
船越吉勝 名
は永景。宗舟
と號す。織部
派と遠州派の
茶を能くせり
寛文十一年
(一三三三)
歿、年七十四。
多賀左近 織
部派の茶人。

うに思つて、昂然と胸を反らした。

泉州小泉の城主片桐貞昌は、茶道石州流の開祖として、船越吉勝・多賀左近と合はせて、その頃の三宗匠と稱へられた名譽の茶人であつた。

貞昌がある時、海道筋に旅をして宿屋に泊つたことがあつた。丁度冬のことだつたので、宿屋の主人は夜長の心遣ひから、湯器を室の片隅に持運んで來た。それは一風變つた形をした陶器だつたが、物の鑑定にたけた貞昌の眼はそれを見通さなかつた。彼は主人に言ひつけて、器を綺麗に洗ひ濯がせた後、あらためて手にとつて見直すことにした。洗ひ清められた湯器の肌には、古い陶物の厚ぼつたい不器用な味がよく出てゐた。愛撫に充ちた貞昌の眼は、勞はるやうにそ

の上を滑つた。

「亭主。この器を譲り受けたい。價は何程にしてくれるの。」
暫くしてから、貞昌は主人の方に振向きざま言葉をかけた。
「お氣に召しましたらお持ちかへりを願ひますが、旅籠屋が湯器をお譲りして代物を頂きましたとあつては……。」

主人は小泉一萬石の城主ともあるものが、ものもあらうに旅籠屋の湯器を買取らうとするなど、風流にしてはあまりに戲談に過ぎ、戲談にしてはあまりに風流に過ぎるとも思つてゐるらしかつた。

「他人から物を譲り受けて、代物を拂はぬといふ法はない。」

貞昌は半ば自分の供のものたちへ言ひきかせるやうにいつて、何程かの金を主人の手に渡させた。

貞昌は靜かに立つて夜の障子を開けた。薄暗い内庭に踏石が

ほんのり白く浮かんで見えた。彼は手に持った湯器を強くそれに叩きつけた。居合せた人たちはびつくりした顔を上げた。

何事もなかつたやうな氣ぶりで貞昌は座に歸つた。そして靜かな聲でいつた。

「わしの見たところに間違ひがなければ、あれは立派な古渡ぢや。今は埋もれて湯器に用ひられてゐるが、もしか眼の利く商人に見つかつて掘出されてもしようものなら、どんなところへ名器として納まらないものでもない代物ぢや。そんなことがあつてはならぬと思ふから、可惜物をつい割つてしまつた。」二人は二様の心持と方法とで、世の中から二つの陶器を失つた。失はれたのは、いづれも秀れた名器だつたが、彼等はそれを失ふことによつて、一層尊いあるものを救ふことが出來たのだ。

（艸木蟲魚）

伊原青々園
名は敏郎。劇
評家。明治三
年松山市に生
る。

二五 感想五題

伊原青々園

茶法があるために、抹茶は上品なものとされて居るが、また其の茶法が面倒くさいために、茶の味だけは好んでも、敬して遠ざける人が少くない。茶法の存するのは、茶のために幸でもあり、不幸でもある。

しかし實際には、飲食にも坐作にも法の無いものはない。抹茶には其の法が比較的に勵行され、嚴守されて居るだけの相違である。茶法などは全く知らない若い人で、それが洋食を食べて居るのを見ると、まるで茶人の會席に於けるやうに手際の鮮かなのがある。抹茶でも洋食でも、その法のあることは同じだからである。

歌舞伎座が今の椅子席となる前に、軍隊を招待して芝居を見せた事があつた。千人近くの兵士が上り口で靴をぬいで、歸りには其のまゝ置いてある靴を銘々にはいて、何の間違も混雜もないのに下足番が驚いたといふ。
すべて軍隊生活には茶法に似た所が多い。茶法の源は禪僧の共同生活を支配した清規（清規は禪僧の生活の規則を指す）から來て居ることを思ふと、それが軍隊生活の作法に似て居るのに不思議はない。

大震災の時である。或る料理屋の主人が焼出されて郊外をうろついて居ると、露店の西瓜屋に立つてゐる男は、よく自分の内へ來る客だつた。それは成金の贅澤屋で、何の料理を出しても必ず「まづい」と小言をいふ人だつたが、よごれた浴衣に細帶をしめて、西瓜の切り身を貪るやうに食つて居た。これを見て可笑しく

もあり、氣の毒でもあつたと其の人が語つた。

食物の贅や通をいひ得られるのは、平安無事の時だけである。地震や火事の場合とかでなくても、旅行して僻地に泊つた時、若くは振舞になつて主人の好意を無にしないためには、まづい物でも我慢しなくてはならぬ。私は平素なるべく好き嫌ひをせず、まづい物も力めて食べるやうにしたいと思つてゐる。

子供にも、唯うまい物を食べさせようと心を碎くのみが親心ではないであらう。うまい物をうまいと食べ得るやうに、又まづい物をも平氣で食べ得るやうに、否、更に進んでうまい物もまづい物も感謝して食べ得るやうに、平素心身を鍛へてやることこそ、一層深い親心といはなくてはならないであらう。

これも震災の時の話である。わたしは貨物自動車で市中の焼

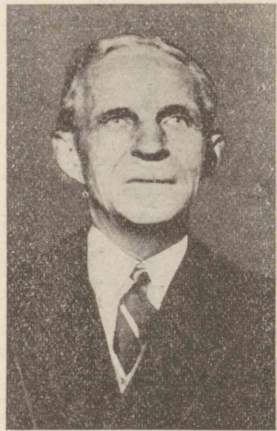
押上。東京市
本所區。
吾妻橋。淺草
區本所區を通
する隅田川に
架る橋。
淺草の森。東
京市淺草區淺
草寺の境内。

跡を見廻つたが、押上から吾妻橋まで來ると、荒涼たる焦土の間
に淺草の森と觀音堂の美しく残つたのを見て、どんなに心を慰
められたらう。それから中秋に薄や桔梗や女郎花を何時もの通
り八百屋で賣つて居たのも嬉しかつた。美しいものが人間生活
に必要なといふ事を痛切に感じた。
病院にはひつて三日ばかりお菜なしで白粥だけ食べさせら
れたことがあつたが、三度三度のうまかつたことは今に忘れら
ない。漸くお菜を許されるやうになつて、この上どんなにうまか
らうと思ひのほか、お菜の鹽梅がいゝ時はうまいが、鹽梅のわる
い時は白粥だけの時よりまづかつた。それで食味の第一義は簡
素と自然とにあることをつくづく悟つたが、それは食味ばかり
でなく、生活上の一切に互ることである。(詩と隨筆集)

フォード
米國實業
家。自動
車王と稱
せらる。
Henry Ford
大山卯三郎
法學博士。前
桑港總領事。
本年、昭和五
年。

二六 フォード主義

大山卯三郎

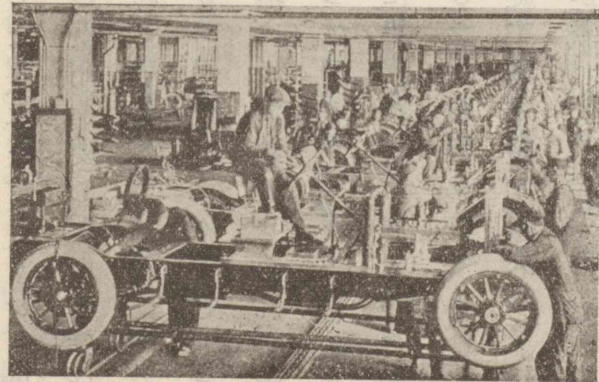


像 自 ドー オ フ

現今の世界文明は、自動車工業の著しい發達の賜であるとい
つても決して過言ではないであらう。然も其の先驅をなすもの
は米國であつて、本年一月、同國各
州政府に登録せられた自動車現
在数は、實に二千六百五十萬臺の
多數に上り、大陸の人口約四人に
對し一臺の割になつて居る。又一
九二八年の統計によれば、米國の同年の自動車製造高は約四百
五十萬臺、此の價四十億弗の巨額に達し、世界の全製造高の八分
の七を占めて、之に従事した労働者の數約十八萬人、動力使用高
五十萬馬力、労働支拂高三億弗に上つて居る。以て米國の自動車

であつて、最後の組立作業の如きは、その最も目醒ましいものである。第二に職工を優遇する事であつて、この點に於てフォードは實に米國工業界の模範を以て目せられて居る。

即ち一九一四年にフォード氏は、他の資本家が未だ労働者優遇の問題に氣附かなかつた際、率先して一日八時間労働賃銀五弗制を發表して大に世人を驚かし、更に一九二六年に至り、一週五日労働の例を開き、然も賃銀は從來の六日分を支給したが、かゝる大膽な方法は、從來他の工場主等の考へ及ばなかつたところであつて、彼等にとつては



自動車工場内部

實に晴天の霹靂ともいふべきものであつたのである。然もフォード氏は飽くまでも高い賃銀・能率増進・大量生産・賣價の低廉をその目標とし、これに向つて最も勇敢に猛進した。右につきフォード氏の意見として傳へられる所に依れば、職工に對し其の給與を豊かにすることに依り、其の作業を奨励することは、其の能率を増進する最善の方法である。収入が豊富で時間に餘裕を生ずる時は、それが直に彼等の消費を刺戟し、購買力となつて現はれる。故に事業を最も賢明に支配する方法は、労働者に高率の給料を與へる事に依り、其の能率を増進せしめるにある。斯くすれば生産費は減少し、物價は下落し、労働者に人生を樂しましめ、彼等に時間と資本とを得しめる事が出来る。と言つて居る。以てフォード氏が如何に進歩的頭腦の人であるかを知るに足るのである。

フオード氏は斯くして職工を信じ、職工はフオード氏を信じ、其の結果勞資の協調が極めて圓滑に行はれ、工場の能率が百パーセントの成績を擧げて居るのであるが、然も是に依つて利益を受ける者は、獨りフオード氏と其の職工のみではない。現にフオード氏が新政策を採用して以來、米國工業界の受けた刺戟は甚大なものであつて、工場主等は之に依つて新しい教訓を受け、勞資の利害の共通する事を覺り、所謂フオード主義なるものが全國を風靡し、米國勞働界を裨益したことは實に計り知るべからざるものがある。況や同氏の大量生産の成功は、一般人をして自動車の使用を容易ならしめ、其の社會的活動と生活の向上とを助ける事に於て甚大な効果のあつた事は世人の等しく認める所であつて、世界が擧げて同氏の手腕を賞し、其の徳を稱へるのは誠に所以ありと云ふべきである。(世界現狀大觀)

二七 細川父子

天正十年の夏、織田殿明智光秀が爲に討たれ給ふ。初より藤孝は丹後にあり、忠興この時山陽に向はんとて、丹後の國にぞ歸りたる。明智は忠興が舅なりければ、やがて丹後に使たてて、光秀年頃の本意とげて、織田殿父子失ひぬ。折節攝津國關國に侍れば、忠興にまゐらす所なり。急ぎ馳せ來つて、力合はせたまふべし。といひしかば、忠興父子大に怒つて、返答にも及ばず、信長の御爲に髪おし切り、二心なきよしを心の中に誓ひ、また忠興おのが妻に子供つけて、山深き所に押籠め、急ぎ秀吉の許に使たてて、共に心をあはせて、光秀を誅すべきよし牒狀して、軍勢を催す程なく、光秀誅せられぬ。藤孝都に上りて、織田殿父子の御跡を弔ひ奉る。これより入道して、玄旨と稱し、幽齋とは號しけり。

天正十年 親町天皇の御代(二二四二) 明智光秀 三十九歳の時より信長に仕ふ。天正十年、年五十七。 藤孝 細川氏初め足利義晴の臣。足利氏滅びて後織田信長に仕ふ。文武に勝れ、豊臣秀吉・徳川家康にも重く用ひらる。 慶長十五年(二二七〇) 歿、年七十七。 忠興 藤孝の子。信長・秀吉に仕へ、後家康に従ひて大功あり、豊前國四十萬石に封ぜらる。文

武に勝れ、勤
王の志厚く、
徳川幕府の專
權、朝廷の式
微を僞す。入
道して宗立又
は三齋と號
す。正保二年
(二二〇五)歿
年八十二。
妻 光秀の三
女。父の執逆
の爲三戸野山
中に幽せら
れ、苦節十二
年、遂に復歸
を許さる。深
く基督教を信
じ、稀に見る
賢夫人。慶長
五年(二二六
〇)歿、年三
十六。
大阪の奉行等
石田三成等。
内府 家康。

慶長五年の秋、奥の上杉謀反の聞えあつて、徳川殿御發向の事あり。忠興御跡を慕ひて馳せ下る。此の隙を窺ひて、大阪の奉行等兵起して、徳川殿失ひ參らせんと謀る。内府に従つて奥に下りし大名等が妻子、一々取つて質とせば、彼等みな身方に參らんずらんとて、まづ最初に忠興が妻子城中に迎へんとす。かの妻、女なれどさる者の娘なり。又日比我が夫の心の奥は知りぬ。使者度々に及べども、更にその催促に従はず。さらば、さな云はせそ。人々の見懲しめの爲、搦め取つて參らせよ。とて軍兵をさし向く。忠興が妻、家人等に防矢射させ、自ら十歳になる男子、八歳になる女子を刺し殺し、家に火かけさせて自害す。奉行等案に相違し、怒なること仕出し、諸大名を内府の方人になし果せて詮なし。とて、これより後、人質とるべき沙汰に及ばず。此の上は細川が城攻め落せ。とて、丹波、但馬の軍勢さし向く。然るべき兵をば引きすぐり、忠興具し

杵築の城 速
見郡八坂村。
慶長四年秀吉
の遺志により
杵築五萬石加
増せらる。
丹後 天正八
年信長により
封ぜらる。

宮津の城 京
都府與謝郡宮
津の東偏。
田邊の城 京
都府加佐郡田
邊、今舞鶴町
の東。

古今和歌集
二十卷、勅撰
歌集の最初の
もの。延喜五
年(一五六五)
紀貫之等撰。

て奥へ下る。おとなしき者共に兵をば少し附けて豊後國へ下し
て、杵築の城を守らす。丹後には、藤孝入道に、年老いたると、幼けな
き者共とばかり残り居て、はかばかしく軍すべき者多からず。さ
れども入道さる古兵にて、少しも騒ぐ氣色もなく、宮津の城を棄
てて田邊の城に立て籠り、敵おそしと待ち居たり。
そもそも此の入道と申すは、弓矢打物取つて堪能なるのみに
あらず、さらぬ小藝にだに達せずといふ事なく、天下雙なき多才
多能の人なりけり。中にも敷島の道に深く好きて、古今和歌集の
秘訣悉く此の人に傳はれり。されば此の度我が身討死したらん
後、此の道長く絶えなんことを悲しみ、城に籠れるはじめ、相傳の
書ども取集めて大内へ獻るとて、
古へも今もかはらぬ世のなかにこころのたねをのこ
すことの葉

烏丸右大辨
光廣のこと。
和歌を幽齋に
學び、古今集
の秘訣を受
輝元 毛利
氏
三成 石田
氏

三條西大納言
實條のこと。

といふ一首の歌を添へてぞ參らせける。かくて丹波但馬の軍勢
雲霞の如く押寄せ、十重二十重に取巻きて火水になれと攻めけ
れども、入道ちつともひるまず防ぎ戦ふ。かくて此の城、中々一時
に攻め落さるべうも見えず。烏丸の右大辨勅使として大阪に行
き向ひ、輝元・三成等に勅諭を傳へらる。夫れ和歌は我が邦の風と
して、天地開けはじめしより此のかた、百王の今に至るまで、其の
道永く傳はれり。然るに今古への事をも歌の心をも知れる人忽
ちに失せなんこと、尤も朝家の歎きなり。如何にもして彼の二位
法印が恙なからんやうを謀るべし。と宣べられたり。輝元を初と
して奉行等謹んで承り、いそぎ早馬を立てて寄手の軍兵を止む。
元より入道は今を最期と思ひ切つて戦ひし程に、寄手たやすう
引きて歸らん事叶ふべからず。此の由又都に聞えしかば、三條西
大納言綸命を含みて丹後國に下向あつて、速かに勅に應じてそ

普天の下云々
普天ノ下、王
土ニ非ザル英
ク、率士ノ濱、
王臣ニ非ザル
莫シ。(詩經)

高野山 和歌
山縣伊都郡。

の城を去るべし。とありければ、入道畏りて、普天の下率土の濱、王
土王臣にあらずといふ事なしと承る。ましてや此の微賤の身、か
く目の當り寵渥の辱きを蒙るをや。さりながら入道が年若き時
ならんには、弓矢とる身の習なり、敢て死を白刃の際に決して、深
く恩を黄泉の下に感ずる事もありなまし。今は齡既に傾きぬ。た
とへ此の戦に死する事なからんにも、餘命また幾ばくぞや。され
ば惜しかるまじき身なるが故に、私の名譽を貪つて、いかで王命
には背き參らすべき。と答へ奉りて、やがて城を立つて高野山に
ぞ赴きける。
さる程に上方にも軍起れりと聞えしかば、忠興等先陣承り、又
引返して美濃國に馳せ上り、手合せの軍に打勝ち、徳川殿程なく
上りたまひ、關が原にして東西の戦を決す。忠興また先軍して、敵
の多勢を打破る。杵築の城を守りたる家人等も、大友が勢と戦つ

仁和寺 京都
市右京區御室
潘翰譜 十三
卷。徳川家宣
の命により慶
長五年より延
寶八年まで、
八十一一年間
於ける、一萬
石以上の諸侯
三百三十七家
の傳記・沿革・
勳功等を記し
たるもの。

て勝ち軍す。此の時徳川殿の御爲に、家をも身をも顧みず身方せし人もとりどりなりけれども、父子兄弟夫婦主従皆悉く功をも節をも盡しし事、忠興に若くはなかりけり。されば其の勸賞に、此の年豊前國一圓に下し賜ひぬ。

かくて天下悉く徳川殿に歸して後、慶長八年の春、征夷將軍の宣旨蒙らせ給ふ。此の時忠興參議に任じ、從四位下に敘す。さればこの時草創の業は既に成りぬれども、柳營の儀は未だ備はらず。こゝに彼の藤孝入道は世々の公方に仕へて、しかも當時の有職なり。丹後國を出でしより、都に上り、仁和寺の邊に幽かなる栖居して籠り居たり。徳川殿此の人に就きてこそ前代の事をも問ひ、當世の禮をも講ずべけれとて、永井右近大夫直勝を御使として、武家の規式悉く受け傳へさせ給ひけり。されば當世の禮節は、内内此の入道の定め申されし事ども多かりしとぞ承る。(潘翰譜)

賀茂眞淵 縣
居と號す。明
和六年(二四
二九)歿、年
七十三。

加藤千蔭 芳
宜園と號す。
眞淵の門人。
文化五年(二
四六八)歿、
年七十四。

二六 近世歌人鈔

賀茂眞淵

秋の夜のほがらほがらと天の原照る月影に雁鳴き
わたる

信濃なる菅の荒野を飛ぶ鷺の翼もたわに吹くあら
しかな

加藤千蔭

墨田川蓑着て下す筏士にかすむあしたの雨をこそ
知れ

村田春海 琴
後翁と號す。
眞淵の門人。
文化八年(二
四七一)歿、
年六十六。

墨田川堤に立ちて船待てば水上遠く鳴くほととぎす

村田春海

大空はそこはかたなく霞む野に聲のみ落つる夕雲雀かな

心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るる富士のね

小澤蘆庵

波となり小舟となりて夕暮の雲の姿ぞはては消え行く

小澤蘆庵 名
は玄中。通稱
帶刀。享和元
年(二四六一)
歿、年七十九。

人の世の富は草葉に置く露の風を待つ間の光なりけり

香川景樹

事もなき野邊に出でても見つるかなもすが鳴く音のあわただしさに

むら山の高ね高ねをつたひ來て富士の裾野にかか
る白雲

良寛

むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶ
を見れば

香川景樹 桂
園と號す。香
川黄中の養
子。天保十四
年(二五〇三)
歿、年七十六。

良寛 禪僧。
天保二年(二
四九一)歿、
年七十五。

井手曙覽 初
名尙事。明治
元年（二五二
八）歿。年五
十七。

秋の日に光りかがやくすすきの穂この高屋にの
ぼりて見れば

わが庵の垣根にうゑし八千草の花もこのごろ咲き
そめにけり

井手曙覽

山吹のみの一つだに無き宿はかさも二つはもたぬ
なりけり

髪白くなりても親のある人も多かるものをあはれ
親なし
きのふまで我が衣手にとりすがり父よ父よといひ

大隈言道 野
村望東の師。
明治元年（二
五二八）歿。
年七十一。

てしものを
山吹のみの一つだに無き宿はかさも二つはもたぬ
なりけり

鶯の鳴く一聲に忘れけり何處にか行く我が身なり
けむ

遠くありてよそより見ればいつもいつも行きかふ
人はゆたけかりけり

唯ひとり夜ふけてゆけば行く月とわれとのものぞ
廣き大路は

(籠語)

籠言

人名義

二成三

三内六

文學的価値

二九 狐塚

主「此のあたりの者で御座る。某山田を數多持つて御座る。當年は殊の外よう出來て御座る。さりながら、此の頃は鹿・猿・貉が出て田を荒します。太郎冠者くわんじゃを呼びいだし、山田の番にやらうと存ずる。」

「やいやい、太郎冠者在るか。」

太「はあ、御前ごまへに居ります。」

主「汝を呼出す事、別の事でない。當年は身どもの山田が殊の外よう出來た。それにつき、此の頃は鹿・猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば、追うて番をせい。」

太「畏つて御座る。私一人で御座るか。」

主「いや、後程は次郎も見舞にやらう程に、先づ行け。」

太「心得ました。」

主「さりながら、此の中は狐塚の狐が出てばかすと云ふ程に、ばか

されぬ様にして番をせい。」

太「それはこはい事で御座る。もはや参ります。」

主「明日早々歸れ。」

太「はあ。」

主「えい。」

太「はあ。」

太「扱も扱も迷惑な事言付けられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや。参る程に是ぢや。先づ是にゐて番を致さう。」

主「太郎冠者を山田へ番に遣はして御座る。定めてさびしうして

主「みるで御座らう。次郎冠者を見舞につかはさうと存ずる。」
次「いやい、次郎冠者あるか。」

次「これに居ります。」

主「汝は大儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次「畏つて御座る。」

主「小筒も少し持つて行け。」

次「心得ました。」

次「これは叔、迷惑なれども、参らざるまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。これは暗うてどこやら知れる事でない。呼ばはつて見よう。」

主「ほうい、ほうい、太郎冠者やい。どこに居るぞ。」

太「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。お

主「のればかさるゝ事では無いぞ。先づ眉毛をぬらさう。」

次「ほうい、ほうい。」

太「ほうい、ほうい。こゝにゐるは。」

次「どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐるは。やあ、次郎冠者か。」

次「なかなか。頼うだ人が言付けられて伽に來たは。」

太「ようこそおりやつたれ。」

主「叔も叔もようばけた。そのまゝの次郎冠者ぢや。捕へて縛つて

やらう。」

主「やい次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身共が追

うたればこなたの山へくわらくわらと逃げたは。」

次「それはでかした。」

太「どつこへやる事ではないぞ。」

次「これは何とするぞ。」

太「何とするとは、狐め、ばかさるる事ではないぞ。」

次「おれは次郎冠者ぢや。」

太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、此の柱にくゝつて置いて。狐殿よ、い體のおのれ今に皮を剥いてくれうぞ。」

主「太郎冠者次郎冠者を山田へ遣はして御座る。心もとなう御座る。見に參らうと存ずる。」

太「ほういほうい。太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほうい、ほうい。」

太「是はいかな事。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の聲ぢや。是も捕へてやらう。」

太「ほうい、ほうい。」

主「ほうい、ほうい。どこにあるぞ。」

太「こゝにゐます。」

主「やあ、これにあるか。淋しからうと思つて見舞に來た。次郎冠者先へ遣したが。」

太「なかなか、あれにゐます。」

主「これはいかな事。是もようばけた。そのまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。」

主「おのれもようばけた。先づ縛つて、此の大木にくゝりつけて置いて、致しやうがある。狐は松葉でふすべるといやがるといふ。」

主「おのれ太郎冠者め。主を此の様にして。罰當りめ。」

太「何を狐殿いはる。さらば次郎冠者もふすべてやらう。さあさ

あ、鳴け、鳴け、こんこんといへ。」
次「これは何とする。」

太「あれや、あれや、いやがるは、いやがるは、おのれ二匹ながら鎌を取つて来て、皮を剥いてくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思ふたなあ。唯今殺してくれうぞ。鎌を取つてくるぞ。」

主「扱も扱も氣の毒な奴ぢや、やあそれに見ゆるは次郎冠者か。」

次「左様で御座る。此方は頼うだ御方か。」

主「なかなか。汝も縛りをつたか。」

次「いかにも縛られました。」

主「何と鎌を取つて来る、殺さうと言ひをつたが、何とそちが繩はほどかれぬか。」

次「されば、どうやら繩が解けさうに御座る。解けますぞ、解けます

ぞ。さあ解きました。どれどれ、此方も解きませう、扱も扱も憎い奴で御座る。何としたもので御座らう。」

主「いやいや、此の體ではそばへよるまい程に、もとの様にしてゐて、これへ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。」

次「一段とよう御座らう。」

主「さあ、是へよつて元の様にしてゐよ。」

次「心得ました。」

太「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で殺してくれう。さあ今打殺すぞ、打殺すぞ。」

主「それや、次郎冠者。」

次「心得ました。」

主「おのれにつくいやつ。次郎冠者、足を持って。」

次「心得ました。」

主「さあ、ゆりに上げ、ゆりに上げ。」

太「これは何と狐どもするぞ。」

主「狐とは、まだおのれめは、にくいやつ。縛り居つたがよいか。こ

れがよいか。これがよいか。」

太「扱は頼うだ人。次郎冠者か。免させられ。まつびら御ゆるされ。ま

つびら御ゆるされ。」

次「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」(續狂言記)

三〇 落葉

相馬御風

焚くほどは風がもて来る落葉かな

これは良寛和尚の作であるとして、越後地方でひろく人口に膾炙して居る句で、良寛和尚の詩や歌を全く知らない人でも、この句を知つてゐる人は少くない。和尚が最もながく住んでゐた國上山の五合庵跡に、先年此の句を石に彫つて建てた人さへあつた。一人の法師が落葉を焚いてゐる圖に此の句を讚した富岡鐵齋筆の扇面が、越後の某家に藏されてゐるのを私自身見たこともある。

それにしても、私の心にはいつからとはつきり分らなかつたが、かの「焚くほどは」の句についての一つの漠然とした疑問があつた。それは、この句に現された心持はいかにも良寛でなくては

相馬御風 名は昌治。早稲田大學出身。明治十六年生。良寛和尚 前出。國上山 新潟縣西蒲原郡にある山。五合庵は良寛四十八才より三十三年間住したる庵。富岡鐵齋 名は百鍊。日本畫家。大正十三年歿。年八十九。

真心尼 越後
長岡藩士奥村
某の女。早く
夫を失ひて出
家す。良寛に
歌を學び又道
義を受く。
明治五年歿。
年七十五。

と思はれるにも拘らず、しかもなほどこか知ら良寛らしくない
感じのすることであつた。これはおそらく其の句が良寛の自作
でないといふ説が世間の一部にあることに暗示を與へられた
からでもあらうが、そればかりでなく、私にはその句をどこまで
も良寛の自作であると主張しかねる二三の理由があつたから
でもある。その一つは、此の句が良寛の代表作であるかの如く世
間で言ひはやされてゐるにも拘らず、私自身今日までの調査で
は、眞にこれが良寛の眞筆であると信ずるに足るものを見ない
ことであり、二つには、良寛に最も近く接してゐた真心尼の集め
た良寛遺詠の中にも、かくまで名高いこの句の收められてゐな
いことであつた。しかしそれよりも此の句の表現に、とりわけ此
の句の調子に、良寛としては餘り氣輕過ぎる所があるやうに私
には思はれた。けれども、かういふ漠然たる感じだけを根據とし

て、世間に弘く信じられてゐる口碑の虚妄を説破することは、私
には出来ないことであつた。

ところが、今年の一月ある未知の人から受取つた一通の手紙
は、さうした私の心の曖昧さに思ひがけない一道の光明を與へ
てくれたのであつた。この手紙によると、同氏は最近一茶の「七番
日記」を讀んでゐるうちに、圖らずも文化十二年十月の條で、
焚くほどは風がくれたる落葉かな

といふ句に出遇つて驚いたが、一體これは一茶自身の作である
か、それとも當時人口に膾炙してゐた良寛の句を、記憶に浮かぶ
まゝに何氣なく他の自作の落葉の句と並べて書込んだもので
あるか、それについての私の考へを聞きたいとのことであつた。
これは私にとつては、大きな驚きであつたと同時に、一つの大
きな安心でもあつた。「やつとわかつた」といふやうな安心と満足

一茶 俳人。
信濃の人。文
政十年（二四
八七）歿、年
六十五。
七番日記 文
化七年（二四
七〇）より同
十五年（二四
七八）に至る
一茶の句日
記。

とに、私は奥歯に挟まつてゐた物がとれたやうなすがすがしさを感じた。更にそれについて私の心には、なるほど一茶の句であつたか。」といふうなづきと、「一茶にかうした句があつたか。」といふ驚異に近い一種の感じとが動かずにはゐなかつたのである。だが、一體この句は、もともと一茶の作であつて、しかもあの當時ひろく人口に膾炙してゐたのを良寛が心にとめてゐて、それを話の種にでもしたのであらうか、それとも、もとは良寛の口ずさんだものであつたらうか、そのことを私は先づ考へて見なければならぬのであるが、しかしそれは一茶自身の日記に此の句の書かれてゐる事實の立派に分つた以上、そして良寛の方にそれと匹敵するほどの文献すらも發見されてゐない以上、もはや何とも考へて見る餘地のない問題である。たゞ私にとつて、なほ一つ残つてゐる問題は、

焚くほどは風がもて来る落葉かな

良寛

焚くほどは風がくれたる落葉かな

一茶

この二句に於ける「もて来る」と「くれたる」の相異についてである。今、後者が當時ひろく人口に膾炙した結果、良寛の耳にも入り、それが又良寛の口から人々の耳に傳はつたのが事實であつたとして見ても、この二つを全然同一句として見ることは出来な「くれたる」が良寛によつて幾度となく口ずさまれてゐるうちに、「いつしか」もて来る」に變つてしまつたのだとして考へると、その轉化にはかなり深い意味がある。深く味はつてみると、僅かにその一つの言葉の相違によつて、二つの句全體がそれぞれ全く獨立して存在し得る程の結果をもつてゐるとさへ考へられる。「くれたる」にはなほ自己を主にした自然へのはからひがある。その自然はなほ相對的である。しかし「もて来る」には自然が擴充し

てゐる。主我的なはからひがない。自然は自然である。その恩恵にあづかるのはこちらからである。それに感謝するのもこちらの心からである。そんな風に見て来ると、やはり一茶は一茶、良寛は良寛だとうなづかれる。それにしても、焚くほどは風がくれたる落葉かなの心境にまで、一茶も五十三歳にして達し得てゐた事は、實に恭敬に價する事と云はねばならない。

焚くほどは風がくれたる落葉かな

幼い時から逆境にあつて、生涯を家庭や世間の険しい、冷たい空氣に虐げられ通したために、他人に對し、世間に對してひがみ心を脱し得なかつた一茶も、自然の前には、なほ且かくまでにその愛と恩恵とを感ぜずにはゐられなかつた。そしてそこから、

木の葉かくすべをも知らで年とりぬ

といふやうな嘆息も洩れゝば、又、

入る程は手でかいて来る落葉かな
といふやうな謙虚な心にもなり得たのであつた。一茶晩年の心のおちつきは、さうしたところから徐々に築かれて行つたのであらう。(一茶と良寛と芭蕉)

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは 一 茶

名月を取つてくれろと泣く子かな 同

秋風やむしり残りの赤い花 同

やれ打つな蠅が手をする足をする 同

病 中

美しや障子の穴の天の川 同

内村鑑三 宗
教育家。昭和五
年歿、年七十。

三 縦の林

内村鑑三

今日世界の樂園といはれてゐるデンマルクは、我が九州大の本國と三つの屬島とから成つてゐる小國で、其のゆたかな富源は、一にその九州大の本國にあるのであります。

然るに此のデンマルク本國は、本來決して富饒の地ではないのであります。一の鑛山があるでなく、大港灣の萬國の船舶を惹くに足るものがあるのでもありません。デンマルクの富は主として其の土地に在るのであります。其の牧場と、其の家畜と、其の縦と白樺の森林と、其の沿海の漁業とに在るのであります。殊に其の誇とする所は、其の乳産であります。其の牛酪と乾酪とであります。デンマルクは實に牛乳を以て立つ國であると云ふ事が出來ます。トルヴァアルドセンを出して世界の彫刻術に一新紀元

Thorvaldsen セン
(1770-1844)
有名なるデンマルク家の彫刻家。

Andersen アンデルセン
(1805-1875)
御伽話の有名作家。其の代表作として『小人の家』、『詩話』。

Schleswig-Holstein シュレスヴィヒ・ホルスタイン
今は北プロシアの一州。北海とバルチック海との間に在る。

を劃し、アンデルセンを出して近世お伽話の元祖たらしめたデンマルクは、實に柔和なる牝牛の産を以て立つ、小さくて靜かな國であります。然るに今を去る五十年前のデンマルクは、最も憐れな國でありました。千八百六十四年に獨逸二強國の壓迫する所となり、其の要求を拒んだ結果終に開戦の不幸を見、デンマルク人は善く戦ひましたが、遂に敗れて再び起つ能はざるに至りました。デンマルクは和を乞ひました。而して敗北の賠償として、獨逸の二國に南部最良の二州シュレスヴィヒとホルスタインを割譲しました。戦争は終を告げました。然しデンマルクはこれが爲に窮困の極に達しました。元より多くも無い領土、而も其の最良の部分を持去られたのであります。如何にして國運を恢復せんか、如何にして敗戦の大損害を償はんか、これが此の時に方つてデンマ

は、弱い人も強い人と違ひません。疾病に罹ると、弱い人は斃れ、強い人は存るのであります。其の如く、眞に強い國は國難に遭遇して亡びないのであります。其の兵は敗れ、其の財は盡きても、なほ起上る力を蓄へてゐるものであります。これは誠に國民の試練の時であります。此の時に亡びない國民は、運命の如何に關はらず永久に亡びないのであります。

デンマルク人は戦に敗れて家に還つて來ました。還り來れば、國は荒れ、財は盡き、見る物として悲憤慷慨の種ならざるはない有様でありました。然るに、茲に彼等の中に一人の工兵士官がありました。彼の名をダルガスといひました。フランス系のデンマルク人でありました。ダルガス、齡は今三十六歳、工兵士官として戦争に臨み、橋を架し、道路を築き、溝を掘る際、彼は細かに彼の故國の地味地質を研究しました。而して戦争が未だ終らないのに、

ルクの愛國者等の腦漿を絞つた問題でありました。國は小さく、民は少く、残つた土地には荒漠が多いといふ状態でありました。

國民の精力は斯かる時に試されるのであります。戦は敗れ、國は削られ、國民の意氣は銷沈し、何事にも手の着かない時、斯かる時に國民の眞の價値は判明するのであります。戦勝國の戦後の經營は、どんな詰らない政治家にも出來ます。國威宣揚に伴ふ事業の發展は、どんな詰らない實業家にも出來ます。難しいのは、戦敗國の戦後の經營であります。國運衰退の時に於ける事業の發展であります。戦に敗れて精神に敗れない民が、眞に偉大な民であります。國の興ると亡びるとは、此の時に定まるのであります。どんな國にも時には暗黒が臨みます。其の時之に打勝つことの出來る民が、永久に榮える民であります。恰も疾病の襲ふ所となつて始めて人の健康がわかると同然であります。平常の時に

彼は既にその胸中に故國恢復の策を立てました。即ちデンマルク國の歐洲大陸に連なる部分で、其の領土の大部分を占めるユトランドの荒漠を化して、之を沃饒の地にしようとの大計畫であります。故に彼の同僚が戦に敗れ、絶望に壓せられて其の故國に歸つて來た時に、ダルガス一人は其の面に微笑を湛へ、其の頭に希望の春を戴いて來ました。他人の失望する時に、彼は失望しませんでした。彼は、彼の國人が劍を以て失つた物を、鋤を以て取返さうとしました。今や敵に對して復讐戦を計畫するに非ず、鋤と鋤とを以て残る領土の荒漠と闘ひ、之を田園と化して、敵に奪はれた物を補はうとしました。

しかしダルガスは單なる夢想家ではありませんでした。工兵士官なる彼は、土木學者であり、地質學者であり、又植物學者でもありました。即ち彼は詩人であつたと同時に、又實際家であつた

のであります。理想を實現するの術を知つてゐたのであります。ユトランドはデンマルクの半分以上であります。而して其の三分の一以上が不毛の地であつたのであります。面積一萬五千平方哩のデンマルクに取りましては、三千平方哩の曠野は過大の廢物であります。これを化して良田沃野となして、外に失つたものを内に償はうとするのが、ダルガスの夢であつたのであります。而して此の夢を實現するに方つて、ダルガスの執るべき武器はたゞ二つてあります。其の第一は水でありました。其の第二は樹でありました。ユトランドの荒地は、今より八百年前の昔には、其處に繁茂した良い林がありました。降つて今から二百年前までは、處々に櫛の林を見ることが出來ました。然るに文明の進むと共に人の慾心は増進し、彼等は土地から取ることにのみ急であつて、之に酬いるのに緩でありました。故に、地は年を追う

て瘠せ衰へ、終に五十年前この憐れむべき状態に立到つたのであります。

これを元始の沃饒に還す方法は、先づ溝を穿つて水を注ぎ、ヒーズと稱する荒野の植物を驅逐し、之に代へるのに馬鈴薯或は牧草を以てするのであります。此の事は左程の困難ではありませんでした。然し難中の難事は、荒地に樹を植ゑることでありました。此の事に就いて、ダルガスは非常の苦心を以て研究しました。植物界廣しと雖も、ユトランドの荒地に適し、其處に成育して、レバノンの榮をあらはす樹は有りや無しやと、彼は研究に研究を重ねました。而して彼の心に思ひ當りましたのは、ノルウエー産の樅でありました。是はユトランドの荒地にも成育すべき樹であらうと思ひました。然しながら實際に之を試験して見ますと、思ふ通りには行きません。樅は生えますが、數年ならずして枯

レバノン

舊譯全書
に出でた
るパレス
チナの山
名。壯嚴と森
林の繁茂を以
て名高し。

れて了ひました。ユトランドの荒地は、今や此の強硬な樹木をさへ養ふに足る養分を残してゐませんでした。

然しダルガスの熱心は、これがために挫けませんでした。彼は、天然は此の難問題をも解決して呉れると確信してゐました。故に彼は更に研究を續けました。而して彼の頭にふと浮かび出ましたのは、アルプス産の小樅でありました。之を移植したら如何かと彼は思ひました。而して之を取つて來てノルウエー産の樅の間に植ゑました所が、兩種の樅は相並んで生長し、年を経ても枯れなかつたのであります。茲に於て大問題は釋けました。ユトランドの荒野に始めて緑の野を見ることが出來ました。緑は希望の色であります。ダルガスの希望、デンマルクの希望、其の民二百五十萬の希望は實際に現れました。しかし問題は未だ残つてゐました。緑の野は出來ましたが、緑

の林は出来ませんでした。ユトランドの荒地から建築用の木材をも伐り得ようといふダルガスの熱望は、事實となつて現れませんでした。樅は或程度まで成長して、それで成長を止めました。其の枯死はアルプス産の小樅の併植を以て防ぎ得ましたけれども、其の永久の成長は之に由つてとげられませんでした。ダルガスよ、汝の預言せし材木を與へよ。」と言つて、デンマルクの農夫等は彼に迫りました。

彼の長男をフレデリックダルガスといひました。彼は父の質を受けて、善い植物學者でありました。彼は樅の生長に就いて、大なる発見をしました。若きダルガスは言ひました。大樅が或程度以上に成長しないのは、小樅を何時までも大樅の側に生やして置くからである。若し或時期に達して小樅を伐り拂つて仕舞ふならば、大樅は獨り土地を占領して其の成長を續けるであらう

と。而して若きダルガスの此の言を實際に試して見ました所、實に其の通りでありました。小樅は或程度まで大樅の成長を促す能力を持つて居ります。然し其の程度に達すれば却つて之を妨げる者であるといふ奇態な植物學上の事實が、ダルガス父子に由つて発見されたのであります。而も此の発見は、デンマルク國の開發に取つては實に絶大な発見でありました。之に由つてユトランドの荒地挽回の難問題は決せられたのであります。これによつて各地に鬱蒼たる樅の林を見るに至りました。千八百六十年には、ユトランドの山林は僅かに十五萬七千エーカーに過ぎませんでした。四十七年後の千九百七十年に至りましては、實に四十七萬六千エーカーの多きに達しました。然し是れなほ全州面積の七分二厘に過ぎません。更にダルガスの方法に従つて植林を繼續致しますならば、數十年の後には、數百萬エーカーの

緑林を見るに至るであります。しかし植林の効果は、單に木材の收穫に止まりません。第一に其の善い感化を蒙つたものは、ユトランドの氣候でありました。樹木の無い土地は、熱し易く冷め易くあります。故にダルガスの植林以前に於ては、ユトランドの夏は、晝は非常に暑くて夜は時に霜を見ました。四六時中に熱帶の暑氣と初冬の霜を見るといふやうでは、植物は堪つたものではありません。當時ユトランドの農夫が收穫成功の希望を以て植ゑ得た植物は、馬鈴薯、黑麥、其の他少數に過ぎませんでした。しかし植林成功後の彼の農業は一變しました。夏期の降霜は全く止み、小麥、砂糖大根等、北歐産の穀類又は野菜で成熟しないものはないまでになりました。ユトランドは大樅の林の繁茂によつて、良い田園と化しました。木材を與へられた上に、善い氣候を與へられました。其の上樹木の繁

茂は、海岸から吹送られる砂塵の荒廢を止めました。北海沿岸特有の砂丘は海岸近く喰止められました。北海に瀕する國に取つて敵國の艦隊よりも恐るべき砂丘は、緑の樅の林を以て美事に撃退されたのであります。

霜は消え、砂は去り、其の上に洪水の害が除かれたのであります。是れは何れの國に於ても、植林の結果として直ちに現れるものであります。勿論海拔六百尺を以て最高點となすユトランドに於ては、我邦の如き山國特有な洪水の害を見ることはありません。然し比較的少い此の害をすら、ダルガスの事業に由つて免れるを得たのであります。

斯くの如くにして、ユトランドの全州は一變しました。廢れた市邑は再び起りました。新たに町村は設けられました。地價は非常に騰貴しました。或所では四十年前の百五十倍に達しました。

道路と鐵道とは縦横に敷かれました。我が四國全島に更に一千平方哩を加へたユトランドは復活しました。戦争に由つて失つたシュレスウイヒとホルスタインとは、今日已に償はれて尙餘りあるとの事であります。

然し木材よりも、野菜よりも、穀類よりも、畜産よりも、更に貴いものは全國民の精神であります。デンマルク人の精神は、ダルガスの植林成功の結果として、茲に一變したのであります。失望した彼等は、茲に希望を恢復しました。彼等は國を削られて、更に良い國を得たのであります。而も他人の國を奪つたのではありません。己の國を改造したのであります。熱誠と忍耐と、之に加へるに大樅小樅の不思議な能力に由つて、彼等の荒れた國を回復したのであります。(デンマルク國の話)

三人臣の道

北 畠 親 房

凡そ王土にうまれて、忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、其の跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下として、競ひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功無くして過分の望を致すこと、自ら危むる端なれど、前車の轍を見ることは誠にあり難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒しめられき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふ例あれば、戒しめらるゝも理なり。

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべしといふ制符、たびたびありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて諸國の兵を召具しけるに、

北畠親房 吉野朝の忠臣。足利尊氏の叛するや、吉野朝を擁護し、子嗣家・顯信と共に奔走す。正平九年(二〇一四)没、年六十三。

前車の轍 晏子春秋に「諺ニ曰ク、前車ノ覆ルハ後車ノ戒ナリ。」

鳥羽院 第七十四代(御在位一七六七—一七八三)

言語云々「昔
行ハ君子ノ樞
機ナリ。」易經
繫辭傳。
堅氷云々
「霜ヲ覆ンデ
堅氷至ル。」易
經坤卦。

近代となりて、やがてかたらはるゝ族さぶら多くなりしによりて、此の制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、云ひがひなき事になりけり。

此の頃の諺には、一たび軍に驅合ひ、或は家の子郎從、節に死ぬる類もあれば、わが功におきては日本國を賜へ。若しは「半國を賜はりても足るべからず」などぞ申すめる。まことにさまで思ふことはあらずなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又朝威の輕々しさもおし量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり」と云へり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子と云ふものは、その初心、言葉を慎しまざるより出て來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず。人の心の悪しくなり行くを、末世すゑのよとは云へるにや。昔許

許由・巢父
共に堯の代の
隱者。

堯 支那上古
の天子。
潁川 支那河
南省にあり。
將門 平將門
桓武天皇の皇
子葛原親王の
玄孫。天慶元
年（二五九八）
叛し、同三年
誅に伏す。
高祖 秦を亡
し漢朝を建
つ。在位十二
年。（皇紀四五
五―四六六）
蕭何 主とし
て軍糧を司
る。後故あり
て獄に下さ
る。
韓信 高祖に
從ひて秦を亡
し、齊王に封
ぜらる。高祖

由と云ふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、此の水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟六腑の變るにはあらず。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心、思ひやるこそ淺ましけれ。大方己一身は恩に誇るとも、萬人の怨を残すべき事をば、なか顧みざらん。君は萬姓ばんせいの主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に分たせ給はん事は、推して測り奉るべし。若し一國づつを望まば、十六人にて皆塞がりなん。一郡づつと云ふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも、千萬人の人は喜ばじ。況や日本の半ばを志し、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、詞にも出で、面に恥づる色のなきを謀叛の初と云ふべきなり。昔の將門は、比叡山に登りて、大内を

の十一年殺さる。
籌を云々
「夫運籌策帷幄之中決勝於千里之外吾不如此子房」史記、高祖本紀。
藤原氏第四代の主。文治五年（一八四九）頼朝に討たれて歿。年三十五。
平重忠 畠山重忠。源頼朝の重臣。
五十四郡 陸奥五十四郡。長岡 今の宮城縣遠田郡内の地。

遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけん。昔は人の心正しくて、自ら將門に見も懲り聞きも懲り侍りけん。今は人の心かくのみなりにたれば、この世はよく衰へぬるにや。
漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる處を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討ちしに、自らむかふ事ありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少しき處を望みて賜はりけるとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめん

直實 熊谷氏源頼朝の臣。宇治川・一の谷の戦に功あり、後、出家して蓮生坊と稱す。承元二年（一八六八）歿

神皇正統記 六卷。親房の著。神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を陳べたり。

が爲にや、賢かりけるをのこにこそ。又直實と云ひける者に一處を與へ給ふ下文に、「日本第一の甲の者なり。」と書いて賜はりけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞の甚しきに、與へたる處の少き、誠に名を重くして利を軽くしける、いみじき事と口々に褒め合へりけり。いかに心得てほめけんといとをかし。
これまでの心こそなからめ、事に觸れて君を落し奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もありと聞えしかど、中一年ばかりは、誠に一統のしるし覺えて、天下舉り集りて、都の中はえはえしくこそ侍りけれ。（神皇正統記）

三 神 國

德 富 蘇 峯

德富蘇峯 名は猪一郎。評論家。文久三年生。貴族院議員。東京日日新聞社賓。

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此のことあり。異國には其の類無し。此の故に神國といふなり。」とは、北畠親房の神皇正統記の開卷第一に特筆大書したる文字なり。今や我が日の神の御子は、天壤と共に萬世一系窮りなき實祚を嗣がせ給ふ。吾人草莽のマツ小民、恭しく茲に忠良なる帝國臣民の至情と、赤心とを披瀝して、一片の頌辭ソウジを奉る。

謹んで按ずるに、皇室典範第十條に曰く、

天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

と。神器とは鏡、劍、璽の三種の神器を云ふ。此の神器の皇位の御守たることは、國史の上に昭乎として天日の如く瞭アキラカかなり。蓋し天子の位一日も曠ウツしくすべからずとは、歴世の宣命にも明記せら

宣命 君命を

臣下に宣る意より轉じて命令そのものをいふ。これが再變して、漢文にて書きし君命を詔勅と呼ぶに對して、國文のものを宣命と稱するに至る。

れたる所なり。國家の變故に際する毎に、帝國の舊章古典は恒トコに吾人の指導者たり。今や親しく其の實物教訓に接す。吾人臣民は自ら顧みて、悠久なる歴史を持つ日本帝國の臣民たることを、無上の幸運にして且光榮たりと感激す。

恭しく惟みるに、今上天皇陛下には天資聰明、仁孝の德、蚤つとに天下に洽し、攝政として、先帝に代り庶政を總べ、百揆ヒョウケツを攬トり、其の御經驗や頗る多大なり。而して皇太子として世界を周遊シュウユウあらせられたる如きは、國史上未曾有のことたり。吾人臣民は、洵マコトに陛下御統治の下に其の生を享け、其の事に就き、其の志を遂げ、其の務を果すを得るを以て、比類なき福祉とし、冥加として感佩す。

皇政維新の大改革以來、既に六十年を經過し、而して帝國の國運は、世界の變遷と與に勢ひ變遷せざるを得ざるものあり。特に世界大戰以來、世界に於ける無比の大國たる露、無比の強國たる

宣統帝 清朝
最後の天子。
醇親王の子。
我が明治四十
五年退位。昭
和七年三月、
溥儀の名を以
て滿洲國執政
に就任。

獨、無比の舊國たる塊の三大帝國は其の國命を革め、而して其の以前東洋に於ける一大帝國たりし清國も亦、宣統帝位を去りて中華民國となりぬ。今や世界の中に於て、帝國の名實兩つながら全くして、巍然として列國の表に聳立するものは、東洋に於て大日本帝國あり、西洋に於て稍、これに庶幾きもの、大英帝國あるのみ。

世界大戰の結果は、從來把持したる國際政局の平衡を打破して、未だ整一せる新局面を開展せず。一天四海、看來れば、大風雨大洪水の後たらずんば、大火事の後たり。爾來各國攷々として善後の施設に努むと雖も、其の復興は容易ならず。此の間に介在して善處せんとす。我が大日本帝國の前途も亦難いかな。

而も其の紛淆は、單に形而下の事のみならず、今日は世界に於ける思想上の一大混亂期にして、我が日本帝國も亦其の驚波駭

浪の中に立てり。物質的の鎖國の不可能なる如く、思想上の鎖國は猶更不可能とする所にして、此の一大混亂期に際する吾人の覺悟とは、徒らに外來の惡思想、惡傾向を防止するにあらずして、我自ら我が固有の本領を發揮するにあらざるべからず。所謂彼の惡を禁ずるに非ずして、我の善を獎むるにあらずんばあるべからず。而して其の善思想、善傾向の源泉は、主として我が國民の中樞たる皇室にこれを求め、且これに則る事に力を致さざるべからず。

我が國民の忠良なることは、國史の證明する所なり。而もこれ國民が獨り自ら忠良なるにあらずして、我が皇室の恩德、よく國民の思想を涵養し、育化し、其の性情を感發し、興起せしめて、こゝに至らしめたるなり。

如何なる場合にも除外例はあり。若し仔細に國史を探究せん

太平記 四十
卷。花園天皇
より後村上天
皇に至る、約
五十年間の戦
亂の記録。作
者不詳。

か、我が國民の少くとも或部分に於ては、其の忠良性を失墜したる場合、決して皆無にはあらず。一部の太平記を披きても、如何に我が國民の或者が脱線的言動を逞しうしたりしかを知るべし。若し徒らに國民の忠良性に依頼し、之を培育し、これを補充し、これを長養せしむる所以の道を竭さざるに於ては、其の極或は寒心すべき結果を來さずとも限られず。此の一義は、須臾も忘るべからざる要件にして、殊に現今の世界思想混亂期に於て最も然りとす。

今日は國家多難の秋なり。如何に壯言美辭を以て泰平を謳歌せんとするも、我が帝國が世界的大波瀾の洶涌中に掀翻せられつゝある實狀を看過する能はず。吾人臣民は、かゝる多難の時に際し、至尊の御新政を創始せられ給ふにつきて、深く宸慮を惱まさせ給ふを拜察し奉らざるを得ざるなり。而も我が國民は、悉く

皇室中心主義者にして、至尊の御導きには、智愚賢不肖を問はず、奨順せざる者なし。今日の急務は、たゞ至尊の乾徳天の如き範を垂れ給うて、我が臣民を御指導あらせ給ふ一事に存す。而してこれ實に明治天皇の振古未曾有の皇運を恢弘あらせ給ひたる所以なりしなり。恐れながら新政の典型は、一にこれに基づかざるべからず。

抑、神武天皇の業を創め給ふや、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて而して宇と爲すの大規模を建てさせ給ひぬ。明治天皇の御代を知ろしめすや、首めに五條の誓文を立て給ひ、

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ 朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天
地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆
亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

と宣へり。而して天皇は實に其の御言葉の如く行はせ給ひぬ。否

御言葉以上に行はせ給ひぬ。

日本帝國臣民の尊皇心は、明治の御代、殊に其の末期に至りて最も深厚熱烈に發揮せられたり。而してこれ國民の忠良心が、偶然に勃興し、一時に突發したるにあらざして、實に我が明治天皇の盛徳、國民を感化し、知らず、覺えず、こゝに至らしめたるものなりしなり。次いで大正の御代は、實に其の聖澤の中より出で、先帝よくこれを守らせ給ひしによりて、彌、隆運を成ししものと信ず。草莽の微臣、此の國家の大事に際し、感迫り情熱し、自ら裁する所以を知らず。たゞ恭しく滿腔の赤誠を披瀝して、天つ日嗣たる今上天皇陛下の萬歳を頌し奉るのみ。而してこれ實に我が帝國の忠良なる臣民の、心底より出でたる至誠の祈願なり。

(昭和一新論)

三四 早春の賦

阿部次郎

阿部次郎 文
學博士。東北
帝國大學教
授。明治十六
年生。

余は一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命とに溢るゝ夏も、靜かに澄みわたりつゝ、鎮まり行く秋も、自然の生命が濫かに雪に籠る冬も、盛なるにつけ、寂しきにつけ、靜かなるにつけ、悲しきにつけ、愁を含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢るゝにつけて、余は一年の中にとあらゆる季節を愛する。

併しかく云ふは、余の容易に同化し難き季節と、余に最も調子の合ふ季節との差別があることを否定する意味ではない。梅雨の美しさや東京の冬の美しさを感じずるには、余にとつては、身心の特に強健で調節された状態が必要である。余の心の痛み易く感じ易き時、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも、灰色の空と肌を襲ふ濕潤の氣の厭はしさによつて、凜然たる霜晨の勇ましさを

よりも、裸なる土と梢を揺る風の音の烈しさによつて、余の心は容易にかき亂される。之に反し、一年の中最もよく余の心と調を等しくするのは、春の微かに動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へ乍らも日の光の肌に親しき頃、温み始めたる細流の邊に青き物の漸く芽ぐむ頃である。その時自然の生命の營はなほ半ば大地の下に行はれて、中に籠る力は、たゆたひつゝ、羞らひつゝ、しかも怠るところなき伸張を續けて行く。生命の車は未だ全力を盡くして急轉することをせず、前途の遙けさを豫想しつゝ、その靜かに緩かな廻轉を開始する。外に發するよりも内に籠ることを愛する余は、さうして内より温むる力を自覺せずには生きがひを感じることを得ざる余は、一年中この季節に於て最も自己のエレメントにあることを感ずるのである。かくて余は、晴れたる日は獨り野を行き、岡を行き、春淺き雜木林の下蔭



春 早

を行きつゝ、頬に冷たき風と、背に温かき日の光とを貪り味はふ。
余は又早春に當つて、特に幼時を回想する。土の下に黒くなつて氷つてゐた雪もいつしか融けて、温かに日の光を吸ふ大地の面の日毎に廣がり行く時、久しぶりに草履を穿いて外出する喜に溢れつゝ、街道を過ぎる雪解の水の小流をまたいで獨樂を廻した時分のこと、雪の下に芽を出す筈の赤い頭や、露のたうの青い頭を捜しまはる心ときめき、遠山の雪を眺めながら、雪解の水の碧く勢よく流れ行く山川のほとりに腰を卸して人生を思つた少年の頃、思へばこれ等の人生の早春も、自分には既に流れ過ぎてしまつたのである。

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、又櫻が散る。さうして自然は又余の特に愛する第二の季節、即ち晩春初夏の節に入るので

ある。(北郊雜記)

岡本綺堂 名
は敬二。明治
五年生。劇作
家。

三五 夜叉王

岡本綺堂

人 面教師 夜叉王

源左金吾頼家

夜叉王娘 桂

下田五郎景安

同 楓

修禪寺の僧

時 元久元年七月十八日。

處 伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體、破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり、下手に爐を切りて、素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畑を隔てて塔の峯つゞきの山、又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

元久元年 土
御門天皇の御
代(一八六四)

二重家體 舞

臺語。縁側

などに見せる

ために、本舞

臺の上に、一

段高くしつら

へたるもの。

上手・下手

見物席より向

つて右を上

手、左を下

といふ。

楓門に立ちて人を見送る體、そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿(二十三歳)跡より下田五郎景安(十七八歳)頼家の太刀を捧げて出づ。

僧 これこれ將軍家の御微行ぢや、粗相があつてはなりませんぞ。

楓はつと平伏す。頼家主従進み入れば、夜叉王も出で迎へる。

夜叉思ひも寄らぬ御成とて、何の設けもござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。

頼家は縁に腰を掛ける。

夜叉して御用の趣は。

頼家問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に残さんと曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を経るも出來しつたせず、幾度か延引

を申立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家予は生れ付いての性急ぢや。待てど暮らせど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に参つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉御立腹恐れ入りました。ござりまする。勿體なくも征夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のも

の、一つも無く、更に打替へ、作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねました。次第何とぞお察し下さりませ。

頼家え、催促の都度に同じ事を……其の申譯は聞きあいたぞ。五郎此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉其の期日は申上げられません。左に鑿を持ち、右に槌を持ってば、面は容易く成るものと思召すか。家を造り、塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生しや無むき粗あら木きを削り、男女たにや・天人てんじん・夜叉や・羅刹らかしありとあらゆる善惡邪正の魂魄たましひを打込うちこむ面おもて作しやう師し。五體ごたいに漲たかる精力きりよくが兩の腕うでに自ら湊あはる時、我が魂魄たましひは流ながるゝ如ごとく彼かに通とひて、始めて面おもても作しやうられます。但たゞし其そのの時ときは半月げつごの後のちか、一月いちげつの後のちか、或あるは一年いちねん・二年にねんの後のちか、我われながら確たしかとはわかりませぬ。僧そうこれこれ夜叉や・王わう殿でん、上じやう様やう御ご自身しんも仰おほせらるゝ如ごとく、至いたつて御ご

夜叉 梵語
「勇健」の
義、鬼神
の類。
Yaksa.
羅刹 梵語
人を食ふ
魔。
Raksasa.

性急でおはしますぞ。三島の社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めの無い事ばかり申上げたたら、御疝癖が愈募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。

夜叉ぢやというて、出来ぬものはのう。

僧 何の、こなたの腕で出来ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば京鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に残すのは如何にも無念ぢや。頼家何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出来ぬといふか。

夜叉恐れながら早急には……。

頼家む、おのれ覺悟せい。

疝癖募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや抜かんとす。奥より桂走り出づ。

桂 まあまあお待ち下さりませ。

頼家え、退け、退け。

桂 先づお鎮まり下さりませ。面は准今献上いたしまするのう父様。

夜叉王は黙して答へず。

五郎何、面は既に出来して居るか。

頼家え、おのれ、前後不揃の事を申立てて予を欺かうでな。

桂 いえいえ、虚偽ではござりませぬ。面は確かに出来して居ります。これ父様、もう此の上は是非がござんすまい。

楓 ほんに然らうぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面を寧そ獻

上なされては……。

僧　それがよい、それが可い。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出来した面があるならば、早う上様に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。黙つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて来て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う、早う。

楓　あいあい。

楓は細工場へ走り入りて木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂は受取りて、頼家の前に捧ぐ。頼家は無言にて少しく解けたる體なり。

桂　虚偽ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家は假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげる。

頼家おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎上様御顔に生寫しぢや。

頼家むゝ。

飽かず打ちまもる。

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出来してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝ。

夜叉王形を改める。

夜叉何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致方もござりません。方々には其の面を何と御覽なされます。

頼家さすがは夜叉王、天晴のものぢや。頼家も満足したぞ。

夜叉天晴との御賞美は憚りながらお鑑識違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居ります。

五郎面が死んで居るとは……。夜又年來數多打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色なく、魂魄も無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。五郎そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。夜又いやいや、どう見直しても生ある人ではござりません。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふが如き、怨靈怪異などの類。あ、これこれ、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊あり難く御禮を申されい。頼家むゝ、ともかくにも此の面は頼家の意に適うた。持歸るぞ。夜又たつて御所望とござりますれば……。

頼家 おゝ、所望ぢや。それ、

頼家は顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。桂、箱を捧げて庭におり立つ。

僧 やれやれ、これで愚僧も安堵いたした。夜又王殿、明日又逢ひませうぞ。

頼家 行きかゝりて物に躓く。

頼家 おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧 進み出でて桂に燈籠を渡す。桂假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜又王はじつと思案の體。(現代戯曲全集)

辭書一覽

(A)

文字言語
字源簡野道明
詳解漢和大辭典服部宇之吉
小柳司氣太
大字典(上田萬年等)
言海(大槻文彦)
言泉(落合直文芳賀矢一)
廣辭林(金澤庄三郎)
大日本國語辭典(上田萬年松井簡治)
難訓辭典(井上頼因等)
日本外來語辭典(上田萬年等)
雅言集覽(石川雅望)
故事成語大辭典(簡野道明)
故事熟語大辭典(池田蘆洲)
國語學書日解題(東京帝國大學)
地理
大日本地名辭典(吉田東伍)

(B)

帝國地名辭典(太田爲三郎)
史傳
國史大辭典(八代國治等)
姓氏家系辭書(太田亮)
大日本人名辭書(東京經濟雜誌社)
日本人名辭典(附假作人名辭彙(栗島山之助))
國學者傳記集成(大川茂雄)
支那人名辭書(藤波常雄・鈴木行三・早川純三郎)
神祇
神祇辭典(山川鶴市)
佛教
佛敎大辭典(織田得能)
佛敎辭林(藤井宣正)
佛敎大辭彙(龍谷大學)
哲學
岩波哲學辭典(岩波書店)
哲學大辭書(同文館)

(C)

古事類苑(神宮司廳)
日本文學大辭典(藤村作等)
國書解題(佐村八郎)
日本文學辭典(三浦圭三)
漢籍解題(桂湖村)
和歌
國歌大觀(同續篇(松下大三郎))
俳句
俳句大觀(佐佐政一)
新撰俳諧辭典(岩本梓・石宮澤朱明)
類分俳句全集(正岡子規)
(D)
高等日本文法(三矢重松)
廣日本文典(大槻文彦)
廣日本文典別記
口語法
作文講話及文範(芳賀矢一)
修辭法講話(佐佐政一)
文學概論(本間久雄)
大百科事典(平凡社)

(D)

百科
日本百科大辭典(三省堂)
日本家庭百科事彙(芳賀矢一)
下田次郎)
大百科事典(平凡社)

漢字異同辨

(ア)

嗚呼 よき事にも、わるきことにも用ふる。
嘔 哀傷痛恨又は不平の聲。
腹 腹一ぱいに食ふ。あき足りていやになる。
賑 とびあがる。高くあげる。「飛揚」措と對す。下にあらるものをあぐ。「擧手」
昂 意氣揚々たるさま。「昂然」氣があがること。「激昂」
中 矢的的にあたること。轉じて廣く的中する義。百發百中。
當 彼と我とべつたりとあたりあふ。「相當」「適當」「正當」まさにも訓み、

(イ)

方今と熟す、今を盛りになり。「此時に方り」アツとはよまず。
本來は參與する意今は多く物品をあづかる意に用ふ。
その事に立ちまじはる。「參與」「干與」アツクとはよまず。薄と對す。輕薄ならす。「溫厚」
篤 心を用ふること。あつし。「篤實」
淳 風俗性質などの厚くして、まざりなきこと。「淳樸」
擘 かけゆく思ふ。可憐。
憐 擘に思ふ。憫然。
合 物の一つになること。アハスともよむ。
遇 期せずして出であふ。

(ウ)

逢、遭 兩方より行きあふ。
會「會合」「會議」
誤 氣づかずして仕損ず。「誤字」「誤解」すぢみちの滑り。
「隱見」
過 氣づかずに犯す。「過失」
改 ものをしなほす。「改正」
校 心をなほす。「校核」根本よりかへる。「革命」「改革」
更 改と略し同じ。「變更」「更新」
見 かくれたるものが出でくる。
現 見と義同じ。
顯 かくやく程にあらはる。「顯彰」
著 うちけるしとも訓む。「著名」
表 うはがはへ出してみゆるやうにす。

(エ)

「表明」「表示」むきだしにする。
露 露露「露出」
有 物のあること。「有無」と對用す。
在 その處にあること。「存在」ニアリ。
怒 いかり外にあらはる。
恚 心にいましく思ふ。
慍 心にむつとする。
息 安氣にやすむこと。小やすみをする。
抱 かへもつこと。ふところに入る。
痛 いたみを覺ゆ。いたみの始終やまぬこと。
傷 いたみきずつく。なげかはしく思ふ。

(オ)

至 そのまで行きつくこと。「至極の義」
到 彼より此に到着する意。
詣 往くなり。進むなり。
偽 いつはりこしらへる。人爲にて、天眞にあらざるなり。欺きだますこと。詐偽と連用す。
寐 寝に就くこと。ねいすること。人の言を直ちにうつすとき用ふ。イハク。
曰 人の言を直ちにうつすとき用ふ。イハク。
云 曰と略し同義。文の終に置くときは「と申すことである」との意。
言 心に思ふ所を口にのぶること。言と同義のことあり。批評の義となることあり。イハレとも訓む。

漢字異同辨

同訓の爲に誤用し又は解釋を過る文字を集めた一覽表である。詳しくは辭書に就いて研究し、常にこれを用ひて習熟せられることを望む。

フガタシ 隨 從 從行の義。まにま	ニリキシ 切 思ふ。 つゞけて。 逆の對。そのとほり でさからはぬこと。	グワサ 騒 静の對照語。せわしきこと。 口々にやかましくいふこと。	ル 距 里程年月などのへだたること。	サ 去 來の對照語。その場をたちのく。くひちがうてはなれる。	ム 醒 酒のさむること。目のあきてをること。「寤寐」	サ 覺 日のさむること。「夢覺む」
フクス 援 ひきよせて助くるなり。	シナクス 鮮 衆の對。極めて少なり。	ルシ 知 識。知は識より意重し。	クゾリシ 斥 排斥。はらひのける。	クラバシ 且 まあちよつと。進の對。あとへさがる。	カダシ 徐 疾の對。ゆるやかそる。	シ 舒 迫の對。のびのびと。
ムス 棲 居にすむこと。	チハナス 乃 すまひとする。「住居」	ニデス 則 ……なれば。即時。すぐに。そのなりで。	ツス 捨 取の對。とりあげぬ。 うつちやる。「放棄」	ム 薦 神に物を奉ること。轉じて人に物を進上するにも、人を推舉するにも用ふ。これも他動詞のみ。	ス 勸 他動詞にのみ用ふ。「勸誘す」	進 自動詞にも、他動詞にも用ふ。退の對。
ナソ 供 そなへものにする	グ 灌 水をながしこむ。田地などに水を引くこと。「灌漑」	ソ 酒 水を庭などにうつこむ。	ルシソ 注 先方のおちどをとがめそしる。ながしこむ。 「一萬千里」 どつと一時にそぐ。	ム 誣 かげ口をいひてせしめる。	セ 責 罪をせめとがむるなり。	攻 城を攻む。轉じて過去をとがむるの意ともなる。
トダ 假令 假定する意。假へば類似せることを假に作り設けて	ツ 建 家を建つ。國を建つ。	ク 立 坐より身を起して立つ。「起立」	ス 扶 手をひきて、こけぬやうにたすけるもとでやる。	フハクダ 助 力をそへる。	クムソ 背 うしろむきになる。離叛す。ちらがへる。	フ 具 「供養」 缺けぬくと、なふ。

ヒ 諭 話すこと。諭へば譬と同義。	ムシノダ 娛 苦の對。心おもしろし。	ノ 特 心だよりにする。父なくば何をか恃まん。	ム 負 うしろだよりにする。我が能を負むる。	フ 尊 卑の對。	ダ 貴 賤の對。位の高きこと。	ト 尙 大切にすること。上品なりとすること。	ブ 崇 あがめらやまふ。のけざまにたふるること。「轉倒」	フ 斃 うちたふれて死ぬること。斃れて後に巴む。	ル 仆 べつたりと横になる。
フマダ 給 行四段は働きかけ。良行四段は受身。あてがふこと。又敬語に用ふ。	マタマダ 會 をりよく行き合はせること。	フカチ 誓 言葉にてちがはぬやうに約束すること。	フ 盟 性を殺し血をすゝりて神にちかふこと。	ツ 掌 其の持分をとりあつかふこと。	サ 司 支配すること。	カ 使 指圖すること。波行四段活用。	ツ 事 目上の人に用事を下二段。	カ 仕 主人に奉公すること。波行下二段。	フ 突 つきあてて「突撃」
ク 衝 正面につきあてる。うちあてて。「鐘を撞く」	ク 搗 臼にて米などをつく。	ク 附 依なり。近なり。添へつけること。「附屬」	ク 就 從ひ近づく。「去就」直にそれになる。「位に即く」	ク 繼 絶えたるをつぐ。あとをつぐ。「繼承」	ク 嗣 家をつぐこと。	ク 次 次第に。つぎつぎ断の對。つゞく。	ク 接 つぎあふ。木を接ぐ。	ク 盡 有りたけをきはめつくす。「力を盡す」	ク 悉 盡と同義。無くし盡すにはあらず。「一々残らずの義」
ムシ 謹 「家を造る」 一筋に念を入れる。内はにして用心する。「獨を慎む」	ム 勤 骨折。精出すこと。	ム 務 力を専にするなり。精力を一途に、其の事に用ふる義にて。日夜朝暮のわざとする意あり。しひてつとむ。	ム 勉 力を入れて精だす。常住にしてかほることなき義。	ム 恆 永久にかほることなき義。	ム 毎 びごと。其のたびごと。	ム 途 しとぐる意あり。窮極なり。始の反對にて「しじゅう」の意あり。ばては略の反對にて、くはしきこと。	ム 詳 略の反對にて、くはしきこと。	ム 審 たしかにすること。	
ルナラツ 連 つゞくこと。	ト 解 四段活用。そのわけを言ひかす。活用。ほどく。わかるやうにする。刀で牛をほふるやうにときわける。下地のすがたなきやうにする。四段下二段。渙然として水釋く。	ク 釋 水にとける。加行下二段。佐行四段場所、又は方角。其の所を得たり。市役所。	ク 所 場所。又は方角。其の所を得たり。市役所。	ク 處 場所。又は方角。其の所を得たり。市役所。	ク 調 よく和合する。「調和」	ク 整 正しくそへる。「整理」	ク 齊 偏頗なく、出入な		

把	採	執	探	取	透	徹	通	訊	訪	問	停	留	止
把る	採る	執る	探る	取る	透る	徹る	通る	訊る	訪る	問る	停る	留る	止る
把る	採る	執る	探る	取る	透る	徹る	通る	訊る	訪る	問る	停る	留る	止る
把る	採る	執る	探る	取る	透る	徹る	通る	訊る	訪る	問る	停る	留る	止る

伸	延	暢	舒	展	昇	陸	登	上	飲	存	乘	騎
伸る	延る	暢る	舒る	展る	昇る	陸る	登る	上る	飲る	存る	乗る	騎る
伸る	延る	暢る	舒る	展る	昇る	陸る	登る	上る	飲る	存る	乗る	騎る
伸る	延る	暢る	舒る	展る	昇る	陸る	登る	上る	飲る	存る	乗る	騎る

博	弘	汎	寬	潤	合	衛	臥	伏	俯	防	禦	踐
博聞博愛。博學はひろし。	ひろむる意あり。弘く世に行はる。	深入りをせず。ばつとしてひろきこと。	ゆつたりと餘裕あること。	両方に限りありて其間のはゞびるきこと。「眼界潤し」	口中にくみみてをる。廣く用ふ。口にくはへる。「枚を衛む」	楯になる。	面を地につけて、うつぶしになる。	仰の對。うつむく。あらかじめ用心すること。「儆防」	よせつけぬ。「拒絶」	さしあたりて。「敵を禦む」	ふみゆく。	ふまへてをる。
踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏
足拍子をとる。どしどしふみつける	「舞踏」	ふみつける。約を踏むは約束をふみ破るなり。約を履むは約束をふみ行ふこと。	人のあとをふむ。後より追ひかける今に對す。	新に對す。「故舊」	勇みすむ。	電にて震動する。轉じて威光に畏るるにも用ふ。	ふるひおこるにも用ふ。	物を手にもちて、ふるふこと。「揮毫」	がたがたと、體や手のふるふこと。おのゝく。	「(ハ)	「(ハ)	「(ハ)
踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏
大言するなり。自を賢とするなり	わるきことを氣まますること。	専なり。一人にてほしいまにするは、わがみばかり龍をうける。名を擅にする。	大概、大略の義。細かに推し尋ねずまづざつと。あら	貶の反。ほめす。	毀の反。ほめす。すばかりにほめるほまれともよむ。罰の反。物を褒美にやる意。	一しきりづつなく「鷄鳴狗吠」	「犬吠」	勢よく聲をあげる「虎吼ゆ」	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)
將	當	當	當	當	當	當	當	當	當	當	當	當
將に……ならんとす。既の反對。	當に……なるべし。さうなるのが當然の理である。	さしあたつて。入りくむ。入りまじはる。	純の反。色々の物の入りこみたること。	物の入りちがうてまじはること。	混。滑。別々の物が一つにうちまじる。	人數の中にあづかり加はる。參政。	別にまた。そのうへまた。	モマタとよむ。これもあれもといふふたゝび。かさね	復。來るをまつ。又來ればあしらひをする意あり。まじうける。	待。いそがずに、自然とそこへ來るまで	俟。いそがずに、自然とそこへ來るまで	俟。いそがずに、自然とそこへ來るまで
善	好	佳	良	吉	因	由	據	依	願	憑	憑	憑
善惡の對。	醜惡の對。形のよきこと。	美なり。好なり。「風景佳し」	善なり。賢なり。凶の對。めでたきこと。	この原因によりてそれにつきて。	經過の意。此の來歴に由りて	物のよりどころとする。	よりそひてはなれぬこと。	たのみとしてよること。	「几に憑る」	たよりてつく。	藉。たよりて力にする	喜。悲・憂・怒の對。中心にてよるこぶ
全	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完
まつ。「全」も同じ多くのものが、のこることなくそるふ意。「大全」	一つのものが、かきめなくそなはること。「完璧」	儀をとりのへて神に事ふること。	神としあがめる。みはる。とりまもりて行ふ。	大切にする。とりまもる。	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)	「(ニ)

觀	覽	看	瞻	敵	向	迎	邀	報	酬	惠	郵	巡	繞	旋	周	回	環	運	召	徵	最	尤	玩	
「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」	「熟視」
「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)	「(ム)
「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)	「(マ)
「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)	「(ヤ)
「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)	「(ユ)
「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)	「(ヨ)
「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)	「(ワ)



広島大学図書

2000302115

